



鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(161)

二渡船渡ノ上遺跡・山崎野町跡A

二〇一一年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(161)

川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)

ふた わたり ふな わたし の うえ  
二渡船渡ノ上遺跡  
やま さき の まち あと  
山崎野町跡 A

(薩摩郡さつま町)

2011年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



川内川下流から見た二渡船渡ノ上遺跡



川内川下流から見た山崎野町跡A

## 序 文

この報告書は、川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴って、平成19年度及び平成21年度から平成22年度にかけて実施した薩摩郡さつま町に所在する二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡Aの発掘調査の記録です。

二渡船渡ノ上遺跡では、縄文時代中期から近代までの遺構・遺物が発見されました。特に、平安時代の中国産の磁器が出土したことば、川内川を使用した当時の交易の様子を示すものとして注目されます。

対岸の山崎野町跡Aでは、縄文時代早期から近代までの遺構・遺物が発見されました。中でも、野町跡に関連すると思われる遺構や当時の生活がうかがえる陶磁器の発見が注目されます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所、さつま町教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

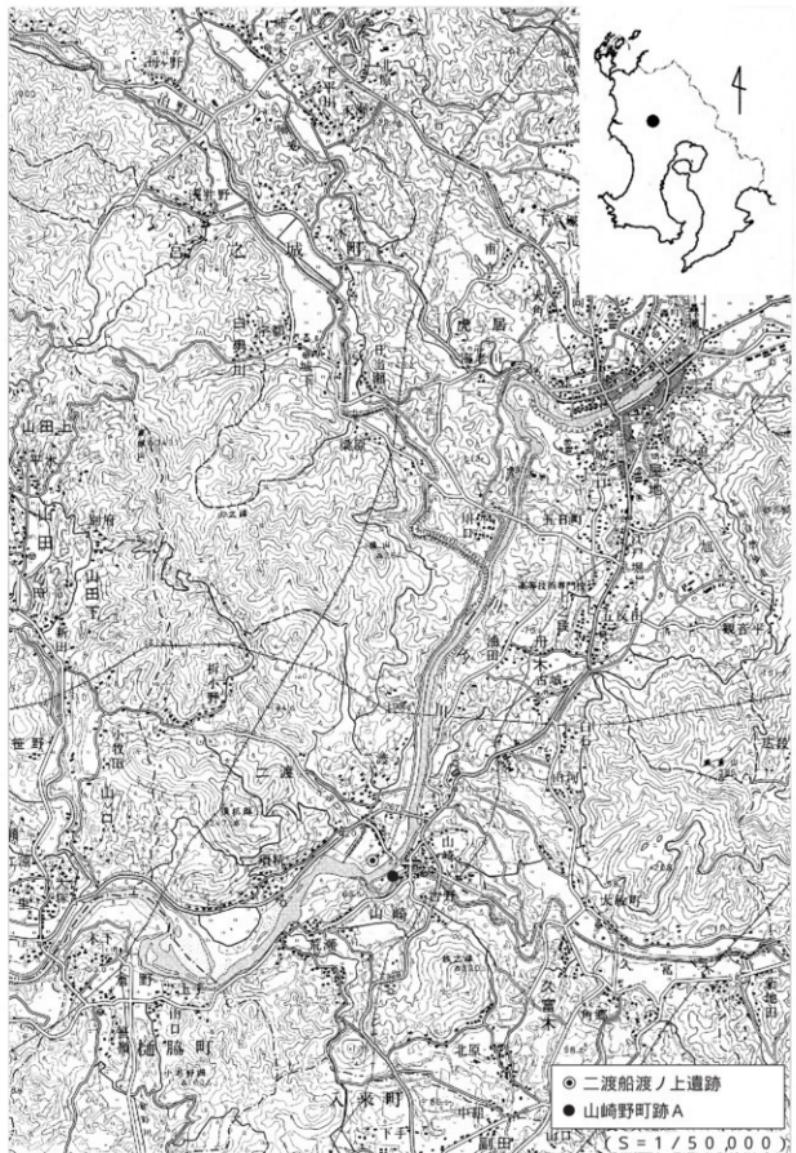
所長 山下吉美

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふたわたりふなわたしのうえいせき・やまさきのまちあとえい							
書名	二渡船渡ノ上遺跡・山崎町跡A							
副書名	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第161集							
編著者名	内山伸明・森雄二							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原津文の森2番1号 : 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2011年3月							
ふりがな	ふりがな	コード	日本測地系緯度		発掘期間	発掘面積m <sup>2</sup>	調査起因	
所収遺跡名	所在	市町村	遺跡番号	北緯 東経				
二渡船渡ノ上遺跡	さつまぐん 薩摩郡 さつま町 ふわたり 二渡	46392	39- 107	31° 51' 38" 25' 41"	130°	確認調査 2007.03.08 本調査 ①2007.12.04~ 2008.02.27 ②2009.09.07~ 2009.11.27 ③2010.01.20~ 2010.03.19	56.62 2,000 2,180 820	川内川激甚災 害対策特別緊 急事業に伴う 記録保存調査
山崎町跡A	さつまぐん 薩摩郡 さつま町 やまとさか 山崎		39- 133	31° 51' 33" 25' 46"	130°	確認調査 2009.02.16 2009.11.05.06 本調査 ①2010.12.20~ 2010.03.19 ②2010.07.01~ 2010.07.27	32.48 163.60 2,850 950	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二渡船渡ノ上遺跡	散布地	縄文時代中期		船元式土器、春日式土器				
		縄文時代晩期	埋設土器(1) 土坑(5)	上加世田式土器、滋賀東式土器、入佐式土器、黒川式土器、 則日突帯文土器、石磚、石甃、石陣、スクレイパー、石核 剥片、磨礫石、打製石斧、磨製石斧、石錐、磨石、敲石				
		弥生時代		則日突帯文土器、高橋式土器、黒竪式土器				
		古墳時代		成川式土器				
		古代	土坑(5)、ピット(9)	土師器、須恵器、土錐、輸入陶磁器（越州窑）				
		中世～近世	礎集積(?)	白磁、青磁、青花、染付、陶器、須恵器、土師器、石製品、 火打ち石、白磁小环				
		近代	歌(1)、溝(1) 机(105)、石臼(1) 石臼(1)、水田(1)					
山崎町跡A	散布地	縄文時代早期	集石遺構(1)	押型文土器、窓ノ神式土器、苦済式土器、石礎、石甃、磨石 石序、敲石、鞋石製品、黒曜石				
		縄文時代前期～晩期		曾岱式土器、深瀬式土器、大歳山式土器、条痕文土器、船元 式土器、春日式土器、並木式土器、出水式土器、西平式土器 黒川式土器、則日突帯文土器、石錐、石甃、石基、スクレイパー、 剥片、石核、石磚、石斧、磨石、磨盤、磨石器、黒曜石				
		弥生時代～古墳時代		高橋式土器 成川式土器				
		古代～中世	孤立石建物跡(1)	土師器、須恵器				
		近世以降	礎石建物跡(5)、布 基礎(2)	染付、陶器（肥前・唐津）、薩摩織（平佐・蘭門司）、煮餃鍋				

要約

二渡船渡ノ上遺跡では、縄文時代中期～近代の遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期は、船元式土器の出土が注目される。縄文時代後期は、用途不明の土坑が出土され、上加世田式土器・則日突帯文土器や打製石斧が多く出土している。古代は、土坑・ピットが複数出土され、土師器・須恵器・土錐・青磁が出土し、中でも当時の交易の様子がうかがえる越州窑の碗・水注などの輸入陶磁器は注目される。山崎町跡Aでは、縄文時代早期から近世に至るまでの幅広い時代の遺構・遺物が発見される。特に縄文時代は、遺物の出土數に比べて土器型の多様性が目立つ。また、近世の遺構・遺物では大型の壁石建物跡が見られるほか、17世紀から19世紀にかけての則日突帯文器類が出土しており、白龍摩の土窯や肥前式大皿、製糸関連の遺物（煮餃鍋）などが見られる。



遺跡位置図

## 例　　言

- 1 本書は、川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う二渡船渡ノ上遺跡及び山崎野町跡Aの発掘調査報告書である。
- 2 二渡船渡ノ上遺跡は、鹿児島県薩摩郡さつま町二渡に所在し、山崎野町跡Aはさつま町山崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 二渡船渡ノ上遺跡の発掘調査は、平成19年12月4日～平成20年2月27日、平成21年9月7日～11月27日、平成22年1月20日～平成22年3月19日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成21年度～平成22年度に実施した。  
山崎野町跡Aの発掘調査は、平成22年1月20日～平成22年3月19日、平成22年7月1日～平成22年7月27日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成22年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 土器表面に赤色顔料と炭化物・煤が確認できる場合は、実測図中に赤色と灰色で示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における図面の作成、写真的撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、二渡船渡ノ上遺跡を有限会社ふじたに委託し、山崎野町跡Aを有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 10 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て内山伸明・森雄二が行った。
- 11 土器・陶磁器等の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て森が行った。
- 12 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て森が行い、一部は株式会社九州文化財研究所・株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、監修は内山・森が行った。
- 13 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所・株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 14 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 15 本書の編集・執筆の分担は次のとおりである。

第1章 発掘調査の経過	森
第2章 遺跡の位置と環境	森
第3章 二渡船渡ノ上遺跡の調査	森
第4章 山崎野町跡Aの調査	内山
第5章 自然科学分析	森
第6章 総括	内山・森
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は二渡船渡ノ上遺跡が「FW」、山崎野町跡Aの確認調査が「山ノマチA」、本調査が「ノマチA」である。

# 本文目次

卷頭図版	
序文	
報告書抄録	
例言	
目次	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	5
第4節 整理・報告書作成作業	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 二渡船渡ノ上遺跡の調査	15
第1節 調査の方法	15
第2節 層序	20
第3節 調査成果	22
1 繩文時代中期VI層の調査成果	22
2 繩文時代晚期V層の調査成果	23
第4章 山崎野町跡Aの調査	85
第1節 調査の方法	85
第2節 層序	87
第3節 調査成果	89
1 繩文時代早期の調査成果	89
2 繩文時代前期から晩期の調査成果	94
3 弥生時代から古墳時代の調査成果	110
4 古代から中世の調査成果	114
5 近世以降の調査成果	116
第5章 自然科学分析	131
第6章 総括	143

# 挿 図 目 次

第1図 二渡船渡ノ上遺跡試掘トレンチ位置図	4	第39図 縄文時代晚期石器実測図(2)	53
第2図 山崎野町跡A試掘トレンチ位置図	4	第40図 縄文時代晚期石器実測図(3)	54
第3図 山崎野町地図	9	第41図 縄文時代晚期石器実測図(4)	55
第4図 山崎野町跡 石垣実測図	10	第42図 縄文時代晚期石器実測図(5)	56
第5図 山崎野町跡 調査範囲	11	第43図 縄文時代晚期石器実測図(6)	57
第6図 周辺遺跡位置図	13	第44図 縄文時代晚期石器実測図(7)	58
第3章 二渡船渡ノ上遺跡		第45図 縄文時代晚期石器実測図(8)	59
第7図 土層断面図(1)及びトレンチ位置図	20	第46図 縄文時代晚期石器実測図(9)	60
第8図 土層断面図(2)	21	第47図 縄文時代晚期石器実測図(10)	61
第9図 VI層調査範囲及び土器出土状況図	22	第48図 縄文時代晚期石器実測図(11)	62
第10図 VI層出土縄文時代中期土器実測図	22	第49図 弥生時代土器出土状況	64
第11図 V層調査範囲及び遺構配置図	23	第50図 弥生時代土器実測図(1)	65
第12図 V層検出縄文時代晚期土坑実測図(1)	24	第51図 弥生時代土器実測図(2)	66
第13図 V層検出縄文時代晚期土坑実測図(2)及び 土坑内遺物実測図(1)	25	第52図 弥生時代土器実測図(3)	67
第14図 縄文時代晚期土坑内遺物実測図(2)	26	第53図 古墳時代土器実測図	68
第15図 縄文時代晚期土坑内遺物実測図(3)	27	第54図 IV層検出古代土坑・ビット実測図	69
第16図 縄文時代晚期土坑内遺物実測図(4)	28	第55図 IV層検出古代土坑・ビット配置図	70
第17図 縄文時代晚期埋設土器検出状況図及び土器実測 図	29	第56図 古代土坑内遺物実測図	71
第18図 縄文時代晚期土器出土状況(1)	30	第57図 古代包含層出土遺物実測図(1)	72
第19図 縄文時代晚期土器実測図(A~C類)	31	第58図 古代包含層出土遺物実測図(2)	73
第20図 縄文時代晚期土器実測図(C~D1類)	32	第59図 古代包含層出土遺物実測図(3)	74
第21図 縄文時代晚期土器実測図(D2類)	33	第60図 古代包含層出土遺物実測図(4)	75
第22図 縄文時代晚期土器実測図(D3~D6類)	34	第61図 中世~近世遺構配置図	78
第23図 縄文時代晚期土器実測図(D6~D7類)	35	第62図 中世~近世遺構実測図	79
第24図 縄文時代晚期土器実測図(D7類)	36	第63図 中世~近世遺物実測図	80
第25図 縄文時代晚期土器実測図(D8~D9類)	37	第64図 近代歎状遺構実測図	82
第26図 縄文時代晚期土器実測図 (D10類, E類)	38	第65図 近代石組遺構実測図	83
第27図 縄文時代晚期土器出土状況(2)	39	第66図 近代杭痕実測図	84
第28図 縄文時代晚期土器実測図(E類)	40	第67図 近代遺構配置図	84
第29図 縄文時代晚期土器実測図 (E類, F1~F2類)	41	第4章 山崎野町跡A	
第30図 縄文時代晚期土器出土状況(3)	42	第68図 土層断面図	88
第31図 縄文時代晚期土器実測図(F2類)	43	第69図 縄文時代早期遺構配置・遺物出土状況図	89
第32図 縄文時代晚期土器実測図(F3~F5類)	44	第70図 縄文時代早期集石遺構実測図	89
第33図 縄文時代晚期土器実測図(F5~F7類)	45	第71図 縄文時代早期土器実測図(1)	90
第34図 縄文時代晚期土器実測図(F8類)	46	第72図 縄文時代早期土器実測図(2)	91
第35図 縄文時代晚期土器実測図(円盤形土製加工品)	47	第73図 縄文時代早期石器実測図(1)	92
第36図 縄文時代晚期石器出土状況(1)	50	第74図 縄文時代早期石器実測図(2)	93
第37図 縄文時代晚期石器出土状況(2)	51	第75図 縄文時代早期石器実測図(3)	94
第38図 縄文時代晚期石器実測図(1)	52	第76図 縄文時代前期~晚期遺物出土状況図	95

# 挿 図 目 次

第81図 縄文時代前期～晚期土器実測図(5) ······ 99	第5章 自然科学分析
第82図 縄文時代前期～晚期石器実測図(1) ······ 102	第109図 古代3号土坑の暦年較正年代グラフ ······ 132
第83図 縄文時代前期～晚期石器実測図(2) ······ 103	第110図 中近世6号棟集積の暦年較正年代グラフ ······ 132
第84図 縄文時代前期～晚期石器実測図(3) ······ 104	第111図 弥生時代早期土器の暦年較正年代グラフ ······ 134
第85図 縄文時代前期～晚期石器実測図(4) ······ 105	第112図 古代モモ核の暦年較正年代グラフ ······ 134
第86図 縄文時代前期～晚期石器実測図(5) ······ 106	第113図 縄文時代前中期～中期前葉土器の暦年較正年 代グラフ ······ 135
第87図 縄文時代前期～晚期石器実測図(6) ······ 107	第114図 縄文時代晚期土器の暦年較正年代グラフ ······ 135
第88図 縄文時代前期～晚期石器実測図(7) ······ 108	第115図 二渡船渡ノ上遺跡から出土した炭化穀実と現 生標本 ······ 135
第89図 縄文時代前期～晚期石器実測図(8) ······ 109	第116図 ブレス試料及び元素マッピング図 ······ 137
第90図 弥生・古墳時代土器実測図(1) ······ 111	第117図 火山ガラスの屈折率(n1) ······ 138
第91図 壺形土器(662)出土状況実測図 ······ 112	第118図 テフラ中の火山ガラス・鉱物の顯微鏡写真 · ····· 141
第92図 弥生・古墳時代土器実測図(2) ······ 113	第119図 No.181外面付着顔料の成分(スペクトル) ······ 142
第93図 古代～中世遺構配置図 ······ 114	
第94図 掘立柱建物跡実測図 ······ 114	
第95図 古代～中世土器実測図 ······ 115	
第96図 近世以降遺構配置図 ······ 116	
第97図 碇石建物跡1号実測図 ······ 117	
第98図 碇石建物跡2号実測図 ······ 118	
第99図 碇石建物跡3号実測図 ······ 119	
第100図 布基礎実測図 ······ 120	
第101図 近世以降瓦質土器実測図 ······ 122	
第102図 近世以降磁器実測図(1) ······ 123	
第103図 近世以降磁器実測図(2) ······ 124	
第104図 近世以降陶器実測図(1) ······ 125	
第105図 近世以降陶器実測図(2) ······ 126	
第106図 近世以降陶器実測図(3) ······ 127	
第107図 近世以降陶器実測図(4) ······ 128	
第108図 近世以降金属遺物実測図・古銭 ······ 130	
	第6章 総括
	第120図 土鍤の出土状況 ······ 144
	第121図 縄文時代前期～晚期土器垂直分布(1) ······ 145
	第122図 縄文時代前期～晚期土器垂直分布(2) ······ 145
	第123図 二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡の遺跡範囲 · ····· 146

## 表 目 次

表1 試掘調査結果	3
表2 周辺遺跡一覧表(さつま町)	12
表3 周辺遺跡一覧表(薩摩川内市)	12
第3章 二渡船渡ノ上遺跡	
表4 土器分類表	16
表5 石材分類表	19
表6 石器分類表	19
表7 二渡船渡ノ上遺跡基本土層	20
表8 縄文時代中期土器観察表	23
表9 縄文時代晚期土器観察表(1)	47
表10 縄文時代晚期土器観察表(2)	48
表11 縄文時代晚期土器観察表(3)	49
表12 縄文時代晚期土製品観察表	49
表13 縄文時代晚期石器観察表	63
表14 弥生時代土器観察表	67
表15 古墳時代土器観察表	68
表16 古代ビット計測表	76
表17 古代遺物観察表	77
表18 中世～近世遺物観察表	81
第4章 山崎野町跡A	
表19 土器分類表	86
表20 石器器種分類表	87
表21 山崎野町跡A基本土層	88
表22 縄文時代早期土器観察表	91
表23 縄文時代早期石器観察表	94
表24 縄文時代前期～晚期土器観察表	100
表25 縄文時代前期～晚期石器観察表(1)	109
表26 縄文時代前期～晚期石器観察表(2)	110
表27 弥生・古墳時代土器観察表	112
表28 犀立柱建物跡計測表	115
表29 古代・中世土器観察表	115
表30 磁石建物跡1号計測表	121
表31 磁石建物跡2号計測表	121
表32 磁石建物跡3号計測表	121
表33 布基礎計測表	121
表34 陶器類観察表	129
表35 金属製品観察表	130
表36 古錢観察表	130
第5章 自然科学分析	
表37 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果①	132
表38 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果②	132
表39 測定試料及び処理	133
表40 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	134
表41 二渡船渡ノ上遺跡から出土した炭化穂実	135
表42 分析試料	136
表43 半定量分析結果	136
表44 屈折率測定結果	138
表45 山崎野町跡Aのテフラ分析結果①	139
表46 山崎野町跡Aのテフラ分析結果②	140
表47 №181外面付着顔料の成分分析結果	142

## 図 版 目 次

二渡船渡ノ上遺跡	
図版1 縄文時代中期・晚期の調査状況	147
図版2 縄文時代晚期の調査状況	148
図版3 古代の調査状況	149
図版4 中近世・近代の調査状況	150
図版5 近代の調査状況・調査風景	151
図版6 縄文時代中期・晚期の土器	152
図版7 縄文時代晚期の石器	153
図版8 弥生時代・古墳時代の土器	154
図版9 古代・中近世の遺物	155

山崎野町跡A	
図版10 北側調査区(1)	156
図版11 北側調査区(2)	157
図版12 北側調査区(3)・南側調査区	158
図版13 出土遺物(1)	159
図版14 出土遺物(2)	160
図版15 出土遺物(3)	161
図版16 出土遺物(4)	162

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

平成18年7月、薩摩地方北部を記録的な豪雨が襲った。特に川内川流域は県境を超えた宮崎県えびの市から河口の薩摩川内市まで甚大な被害を受ける災害となつた。同年10月には、川内川激甚災害対策特別緊急事業（平成18～22年度の5か年）が採択され、復興へのスタートを切ることとなつた。

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、同年11月、国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下、川内川河川事務所）は、川内川激甚災害対策特別緊急事業に先立って、41か所の事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は、平成18年12月に川内川流域の湧水町・菱刈町・大口市・さつま町・薩摩川内市の埋蔵文化財分布調査を実施した結果、18か所について埋蔵文化財調査が必要であることが明らかとなつた。

この結果をもとに、平成19年2月に川内川河川事務所は、県文化財課へ埋蔵文化財調査対象地の試掘調査実施を依頼し、黒文化財課は同月の下ノ原B遺跡（伊佐市）の調査を皮切りに、調査着手の条件が揃つたところから試掘調査を進めるところとなつた。

さつま町二渡船渡ノ上遺跡については、平成19年3月8日に県文化財課が用地買収済部分を対象に試掘調査を実施し、遺物包含層が残っていると考えられる部分（約4,000m<sup>2</sup>）について本調査の対象となることが明らかとなつた。

本調査は、用地買収の進捗にあわせ、平成19年12月～平成20年2月、平成21年9月～11月、平成22年1月～3月の3期に分けて県立埋蔵文化財センターが実施した。最終的な調査面積は当初に比べ遺跡の拡がりが確認されたことから、5,000m<sup>2</sup>であった。

さつま町山崎野町跡A地点については、平成21年2月16日と平成21年11月5日・6日に県文化財課が試掘調査を実施し、遺物包含層の存在が確認された。

本調査は、用地買収の進捗にあわせ、平成22年1月～3月と平成22年7月の2回に分けて県立埋蔵文化財センターが実施した。最終的な調査面積は、3,800m<sup>2</sup>であった。

整理・報告書作成作業については、平成21年4月～平成22年3月と平成22年4月～平成23年3月の2期にわたりて県立埋蔵文化財センターで実施し、平成23年3月に報告書刊行の運びとなつた。

### 第2節 事前調査

#### 1 分布調査

二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡の分布調査は、平成18年12月26日に川内川河川事務所からの依頼を受け、県文化財課が実施した。

二渡船渡ノ上遺跡の工事対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されている部分を中心に、工事の内容と遺跡の現状を把握しながら調査を進めた。

また、山崎野町跡A地点については、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、野町の略図に見える「板倉」や「ムシロ倉」の位置にあたることもあり、表面探査とともに地形の現状について野町略図と照合しながら調査を進めた。

なお、山崎野町跡は、川内川本流とそれに合流する久富木川沿いにあり、築堤や掘削等の工事箇所も数か所に分かれたことから、分布調査も各箇所を対象に実施し、国土交通省管轄部分をA地点、県土木部河川課管轄部分をB・C・D地点として対応することとし、本報告部分は川内川と久富木川の合流点にあたる部分で、A地点とすることとした。

その結果、二渡船渡ノ上遺跡は、隣接する圃場整備工事の際に遭構・遺物が発見されていることや、畠地表面から遺物が採集されること等から、工事対象地は試掘調査の実施が必要と判断した。

また、山崎野町跡A地点についても、野町略図との関係を把握する必要性があることから、試掘調査の実施が必要と判断した。

#### 調査体制

事 業 主 体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調 査 主 体	鹿児島県教育委員会
企 画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括	鹿児島県教育庁文化財課
	課 長 中尾 理
調 査 企 画	鹿児島県教育庁文化財課
	課長補佐 前原 浩一
	主任文化財主事 兼
	埋蔵文化財係長 青崎 和恵
調 査 报 当	鹿児島県教育庁文化財課
	文化財主事 前迫 亮一
調 査 協 力	さつま町教育委員会
	課 長 川添 俊行
	主 壱 村原 政樹

## 2 試掘調査（二渡船渡ノ上遺跡）

二渡船渡ノ上遺跡の試掘調査は平成19年3月8日に買収済の土地を対象に実施した。

調査は、約3×3mを基本とするトレーニングを6か所設定し、小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら掘下げを行った。トレーニングは、状況に応じて拡張しながら進めた。

その結果、1~4トレーニングからは、遺構・遺物共に発見されなかった。

5トレーニング及び6トレーニングでは古代から中・近世の遺構・遺物が確認された。

また、6トレーニングから北東方向にかけて、縄文時代晚期頃の遺物が表面採集や切り通しの土層断面で観察できることから、かつて町教委が調査した区域にかけて遺跡が続いている可能性が高いことが判明し、約4,000m<sup>2</sup>について本調査が必要となった。試掘調査の総面積は56.62m<sup>2</sup>であった。

### 調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	調査主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会	企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	調査統括	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	課長 木原 俊孝	課長補佐 前原 浩一	課長 有川 昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長 青崎 和憲	課長補佐 福山 徳治 主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長 堂込 秀人
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	文化財主事 前迫 亮一	鹿児島県教育庁文化財課
調査協力	さつま町教育委員会	課長 川添 俊行 主査 村原 政樹	さつま町教育委員会
立会者	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	立会者 国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	宮之城出張所 所長 佐藤 耕作 技術係長 橋本裕二郎

## 3 試掘調査（山崎野町跡A：第1次）

山崎野町跡A地点の試掘調査は、用地買収の進捗を見ながら、平成21年2月16日（第1次試掘調査）と平成21年11月5日・6日（第2次試掘調査）の2回に分け、県文化財課が実施した。

第1次試掘調査は、買収済の土地を対象に、約3×3mを基本とするトレーニングを4か所設定し、小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。地層の確認と遺構・遺

物の有無についてチェックしながら掘下げを行った。トレーニングは、状況に応じて拡張しながら進めた。

その結果、1~4のいずれのトレーニングからも遺構は検出されなかった。また、明瞭な遺物包含層も確認できなかつた。

ただし、1トレーニング付近は、野町に間連すると考えられる近世の倉跡等が想定される部分であることや、2トレーニングや3トレーニングの表土及びその周辺からは縄文時代の遺物が出土したため、約4,000m<sup>2</sup>について本調査が必要となつた。第1次試掘調査の総面積は32.48m<sup>2</sup>であった。

### 調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	調査主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会	企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	調査統括	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	課長 木原 俊孝	課長補佐 前原 浩一	課長 有川 昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長 青崎 和憲	課長補佐 福山 徳治 主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長 堂込 秀人
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	文化財主事 前迫 亮一	鹿児島県教育庁文化財課
調査協力	さつま町教育委員会	課長 川添 俊行 主査 村原 政樹	さつま町教育委員会
立会者	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	立会者 国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	宮之城出張所 所長 佐藤 耕作 技術係長 橋本裕二郎

## 4 試掘調査（山崎野町跡A：第2次）

第2次試掘調査は、第1次調査後に買収された土地を中心、約2×3mを基本とするトレーニングを8か所設定し、小型バックホウによる掘下げを中心に進めた。掘下げは地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら行った。

トレーニングは、状況に応じて拡張しながら進めたため、2トレーニングの2×17mのようにロングトレーニングとなるものや1トレーニングのように調査面積が50m<sup>2</sup>を越えるものもあった。試掘調査総面積は163.6m<sup>2</sup>であった。

その結果、1~4トレーニングからは、表土下で礎石と考えられる石や石列、竪跡、土坑等が検出された。

5~6トレーニングは20年ほど前の製材所解体工事により、壊乱を受け遺構面が残存していなかった。近世以前に関して、旧石器時代相当層まで掘り下げたが、遺物包含層は確認できなかつた。

7・8 トレンチでは、表土除去後すぐに縄文時代晚期相当の土器や石斧、黒曜石が出土し、土坑も検出された。	調査企画	鹿児島県教育庁文化財課 課長補佐 埋蔵文化財係長	中尾 純則 堂込 秀人
2回の試掘調査結果をふまえ、1~4 トレンチ周辺と7・8 トレンチ周辺について、本調査が必要なことが判明した。	調査担当	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事	中村 和美
	調査協力	さつま町教育委員会 課 長 主 事 埋蔵文化財専門員	川添 俊行 小倉 浩明 佐藤 真人
調査体制	立会者	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
事業主体 国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所		鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育文化財課	工務課
調査主体 鹿児島県教育文化財課 企画・調整 鹿児島県教育文化財課 調査統括 鹿児島県教育文化財課 課 長 有川 昭人			佐藤 亜彦

表1 試掘調査結果

二渡船渡ノ上遺跡

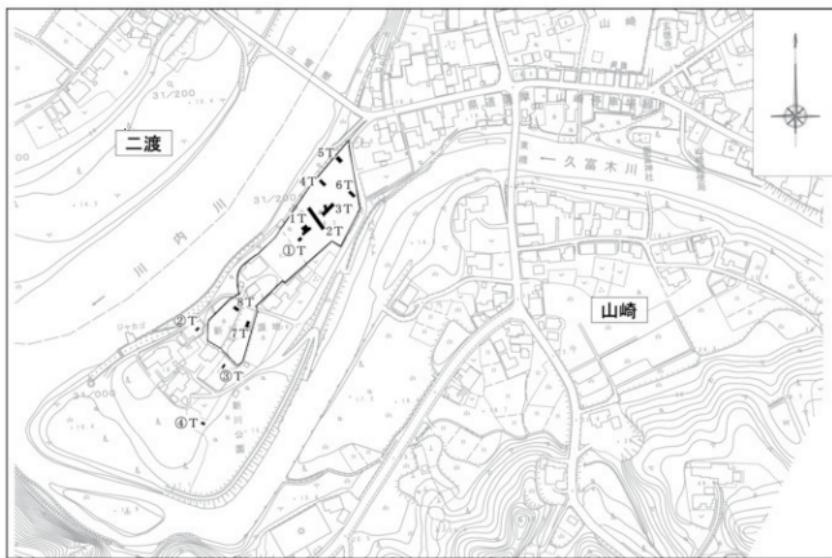
トレンチNo.	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	時代・時期	包含層までの深さ(cm)	備考
1	9.00	-	-		-	
2	7.84	-	-		-	
3	9.00	-	-		-	
4	7.84	-	-		-	
5	7.28	柱穴?	土師器 陶磁器	古代~中近世	40	IV・V層
6	15.66	石列,溝	土師器 陶磁器	古代~中近世	50	遺構は近世の灌漑施設か?
調査総面積				56.62 m <sup>2</sup>		

山崎野町跡A

トレンチNo.	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	時代・時期	包含層までの深さ(cm)	備考
①	9.80	-	-		-	
②	7.20	-	-		-	
③	9.00	-	-		-	
④	6.48	-	-		-	
1	52.30	竪跡,礎石石列	陶器	近世以降	20	
2	34.00	礎石		近世以降	10~70	
3	34.80	土坑		近世以降	40~50	
4	12.70	-	-		-	
5	9.80	-	-		-	
6	8.00	-	-		-	
7	6.00	-	土器	縄文時代晚期	30	III層: 明茶褐色土
8	6.00	土坑	土器,石斧 黒曜石	縄文時代晚期	10	II層: 茶褐色土
調査総面積				196.08 m <sup>2</sup>		



第1図 二渡船渡ノ上遺跡試掘トレンチ位置図  
(網フセは、旧宮之城町が平成12年に調査した範囲、番号のないトレンチは、本調査中に試掘を実施)



第2図 山崎野町跡A試掘トレンチ位置図 (①～④は第1次試掘)

### 第3節 本調査

#### 1 調査概要

二渡船渡ノ上遺跡は、用地買収の進捗に応じて平成19年12月4日～平成20年2月27日（作業員実働49日間）、平成21年9月7日～11月27日（作業員実働44日間）、平成22年1月20日～3月19日（作業員実働37日間）の期間で行った。調査面積は、5,000m<sup>2</sup>である。

山崎野町跡Aについては、平成22年1月20日～平成22年3月19日（作業員実働37日間）、平成22年7月1日～7月27日（作業員実働19日間）の期間で行った。調査面積は、3,800m<sup>2</sup>である。

#### 2 調査体制

本調査に係る期間の組織体制は、年度ごとにまとめると以下のとおりである。

##### (1) 平成19年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画	所長 宮原 景信 次長兼総務課長 平山 章 次長兼南の郷文調査室長 新東 晃一 調査第一課長 池畠 耕一 主任文化財主事 兼調査第一課第二課室長 中村 耕治
調査担当	文化財主事 東郷 克利 文化財主事 森 雄二 文化財主事 富山 孝一 総務係長 寄井田正秀
事務担当	鹿児島国際大学短期大学部
調査指導	名譽教授 三木 靖 鹿児島大学法文学部 教授 渡辺 芳郎

##### (2) 平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画	所長 山下 吉美 次長兼総務課長 斎藤 守重 次長兼南の郷文調査室長 青崎 和恵 調査第一課長 中村 耕治

調査担当	主任文化財主事 兼調査第一課第二課室長 宮田 宗二 文化財主事 佐藤 義明 文化財主事 森 雄二 文化財主事 吉岡 康弘 文化財主事 永浦 功治 総務係長 紙屋 伸一
調査指導	鹿児島大学法文学部 准教授 本田 道輝 鹿児島大学法文学部 准教授 森脇 広

##### (3) 平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査企画	所長 山下 吉美 次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の郷文調査室長 中村 耕治 調査第一課長 長野 真一 文化財主事 兼調査第一課第二課室長 八木澤一郎
調査担当	文化財主事 森 雄二 文化財主事 羽嶋 敦洋 事務担当 総務係長 大園 祥子

#### 3 調査経過

本調査は、事業区内の用地買収の進捗に合わせ、4期に分けて実施した。1期調査は、平成19年12月～平成20年2月の約3か月で二渡船渡ノ上遺跡2,000m<sup>2</sup>を調査した。2期調査は、平成21年9月～平成21年11月の約3か月で二渡船渡ノ上遺跡2,180m<sup>2</sup>を調査した。この2期調査の中で確認調査を実施したところ、二渡船渡ノ上遺跡の範囲が自然堤防上に拡大することが明らかになった。そこで3期調査は、平成22年1月下旬～平成22年3月の約2か月で二渡船渡ノ上遺跡の遺跡拡大範囲の820m<sup>2</sup>と山崎野町跡A2,850m<sup>2</sup>を併行して調査した。4期調査は、平成22年7月の1か月で山崎野町跡A950m<sup>2</sup>を調査した。

調査面積は、二渡船渡ノ上遺跡が5,000m<sup>2</sup>、山崎野町跡Aが3,800m<sup>2</sup>である。計画していた調査をすべて終了した。なお、調査の詳しい経過は、各遺跡の調査日誌に基づき、第3章・第4章で略述する。

#### 第4節 整理・報告書作成作業

##### 1 作成概要

発掘調査報告書作成に伴う出土遺物及び遺構実測図面等の整理作業は、二渡船渡ノ上遺跡に関して平成19年度の調査終了後に一時開始したが、本格的な作業は平成21年度・平成22年度に実施した。平成21年度は、9月から11月（二渡船渡ノ上遺跡）、翌年1月から3月（二渡船渡ノ上遺跡と山崎野町跡A）の2回の発掘調査と並行して基礎作業（遺物の注記・接合と遺構図面の整理）と土器実測の一部を行った。平成22年度は、7月に実施した山崎野町跡A発掘調査と並行して、両遺跡の基礎作業から遺物の分類・実測など報告書作成作業全般を行った。

作業は県立埋蔵文化財センターで行い、報告書は平成22年度に2遺跡の内容を合本で刊行することとした。

##### 2 作成体制

報告書作成に係る期間の組織体制は、年度ごとにまとめると以下のとおりである。

###### (1) 平成21年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
作成企画	所長 山下 吉美 次長兼総務課長 斎藤 守重 次長兼南の原文調置室長 青崎 和恵	調査第一課長 中村 耕治 主任文化財主事 佐藤 義明 副課長第一課第二課置係長 宮田 栄二	調査第一課長 中村 耕治 主任文化財主事 佐藤 義明 副課長第一課第二課置係長 宮田 栄二
作成担当	文化財主事 森 雄二 文化財主事 紙屋 伸一	事務担当	総務係長 山下 吉美 次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の原文調置室長 中村 耕治 調査第一課長 長野 真一 文化財主事 八木澤一郎

###### (2) 平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 川内川河川事務所	作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
作成企画	所長 山下 吉美 次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の原文調置室長 中村 耕治 調査第一課長 長野 真一 文化財主事 八木澤一郎	調査第一課長 中村 耕治 主任文化財主事 佐藤 義明 副課長第一課第二課置係長 宮田 栄二	調査第一課長 中村 耕治 主任文化財主事 佐藤 義明 副課長第一課第二課置係長 宮田 栄二
作成担当			

作成担当	文化財主事 文化財主事	内山 伸明 森 雄二
事務担当	総務係長	大園 祥子
企画担当	文化財主事	関 明恵
	文化財主事	黒川 忠広
調査指導	鹿児島大学法文学部 教授	渡辺 芳郎

##### 3 作成経過

整理作業の具体的な経過については、主な作業を月ごとに記しておく。

###### (1) 平成21年度

- 4月～7月  
注記、分類・選別、復元（平成19年度の遺物）
- 8月・9月  
土器実測
- 12月～3月  
洗浄、注記、分類・選別、復元

###### (2) 平成22年度

- 4月  
洗浄、注記、分類・選別、復元
- 5月～7月  
土器復元、図面整理、遺構トレース、遺物実測、石器実測委託
- 8月  
土器復元、図面整理、遺構トレース、遺物実測、トレース、科学分析委託、石器実測委託
- 9月・10月  
写真撮影、レイアウト、原稿執筆、印刷起案・入札
- 11月・12月  
校正、遺物・図面等の整理、収納作業
- 1月～3月

###### (3) 報告書作成指導委員会

平成22年11月29日 次長ほか3名

###### (4) 報告書作成検討委員会

平成22年12月1日 所長ほか9名

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡の所在するさつま町は、伊佐市・出水市・薩摩川内市・霧島市に接し、周囲は北に矢箇岳・宮ノ尾山・圓見岳、東に安良岳・鳥帽子岳・中ノ岳・片城山・船見岳、南に八重山・冠岳・雄岳、西に紫尾山に囲まれ、川内盆地の一部となっている。

さつま町の中央をほぼ南北に流れる川内川は、熊本県白髪岳（1417m）に源を発し、宮崎県えびの市を中心とした西諸県盆地を流れ、本県の大口盆地、川内平野を貫流し、東シナ海に注ぐ、幹線距離137km、流域面積1636 km<sup>2</sup>の九州屈指の河川である。流域の市町は、宮崎県えびの市、本県の湧水町・伊佐市・さつま町・薩摩川内市の三市二町であり、川内川に合流する支流は109河川を数える。支流には、北から桜野を流れる夜星川、平川大薄を流れる大薄川がと紫尾で合流して柏原までの夜星川、上平川から下平川、海老川を経て推込付近までの海老川、泊野・母ヶ野・一つ木・白男川を流れて川口までの泊野川、仮屋原で南方川と合流し、田原、時吉を経て轟の瀬付近までの穴川、祁答院から久富木を流れて山崎までの久富木川がある。その他、屋地を流れる東谷川、豊川、虎尾を流れる後川、船木を流れる五反田川、二渡を流れる大山口川などの小さい支流がある。川内川とこれに流入するこれらの河川による浸食・運搬・堆積により、沖積地や河岸段丘が形成されている。この地域の地質は四十万累層群を基盤としている。北部の紫尾山地は四十万累層群と共に貫入した花崗閃綠岩からなる。南部及び東部には四十万累層群に貫入した火山岩類が低い山地を形成している。また、紫尾山地を除く広い範囲に今から約30万年前から約2万5千年前の火碎流堆積物が分布している。

今回報告する2遺跡は、川内川と久富木川の合流地点から約250m上流に架かる県道薩摩山崎停車場線の山崎橋付近に位置する。川内川右岸の標高約20mの自然堤防が二渡船渡ノ上遺跡で後背地に水田が開けている。北から小河川の大山口川が流れ川内川に合流する。標高は、川内川に近いほど高く、大山口川にいくほど低くなっていく。その高低差は約7mある。川内川及び大山口川の影響と水田等に土地を利用されていたことから砂・シリト・粘土などが堆積し、桜島や霧島火山噴出のローム層をほとんど確認できない。また、二渡船渡ノ上遺跡の範囲は、地形的にみて川内川に沿って上流の方へのびているものと思われる。二渡船渡ノ上遺跡の対岸で久富木川と川内川に挟まれた地点が山崎野町跡Aである。地形は、久富木川が南へ大きく弯曲し川内川に合流するために三方を河川に囲まれ、標高約19mの河岸段丘である。河川の氾濫による砂泥の堆積層と浸食による切り立った岸が見られる。

### 第2節 歴史的環境

さつま町の中央を流れる川内川やその支流周辺には肥沃な台地が多く、先史時代から人々の生活に適した地域であったと考えられる。山崎と二渡においても周囲に各時代の遺跡があり、人々の生活を窺い知ることができる。

旧石器時代の遺跡と断定できないが、米ノ山遺跡が久富木の台地上に存在する。平成5年度に県文化財課が行った分布調査で黒曜石の剥片を採集し、細石核の調整剥片があることから旧石器時代の遺跡である可能性がある。現在のところ旧石器時代遺跡の発見例は数少ないが、川内川を中心とする生活圏が存在した可能性が高い。

縄文時代の遺跡は、大歎町園田遺跡、園田遺跡や甫立原遺跡等が代表的である。まず、久富木に所在する大歎町園田遺跡では、早期の手向山式土器、前期の轟式土器、曾畠式土器、中期の阿高式土器、後期の出水式相当土器、晚期の黒川式土器等が出土し、この地域で長期間安定した生活が営まれていた様相が窺える。また、虎居に所在する甫立原遺跡では、縄文時代早期の押型文土器が出土している。さらに、虎居老川に所在する松尾城及び宗功寺跡では、縄文時代早期・中期・晚期の土器や磨製の彫型石斧を含む石器等が出土している。その他、東下原遺跡・西下原遺跡・舟木原遺跡・原畠遺跡・下原遺跡・坪井遺跡・米ノ山遺跡・川添遺跡・宮ヶ原遺跡・諭訪下遺跡・荒瀬上原遺跡・上大原遺跡・内堀遺跡・山角遺跡・上原遺跡・下川内遺跡・丸岡遺跡・茶屋ヶ段遺跡などが発見されている。

弥生時代の遺跡は、町内で少ない。大歎町園田遺跡や時吉地区一帯及び湯田地区の山越、湯田原地区では弥生時代の土器片が発見されている。

古墳時代の遺跡は、成川式土器が町内各地で採集されており、桜崎遺跡・舟木原遺跡・下原遺跡・四目ヶ追遺跡・坪井遺跡・鷹ノ巣遺跡・米ノ山遺跡・堂ノ前遺跡・川添遺跡・宮ヶ原遺跡・荒瀬上原遺跡・前床遺跡・上大原遺跡・内堀遺跡・上原遺跡では、成川式土器片が採集されている。また、原畠遺跡・西下原遺跡・下川内遺跡では、成川式土器片が多量に散布し、東下原遺跡では、成川式土器に加えて須恵器が採集されている。加えて本遺跡からは距離があるが、薩摩隼人の墓制といわれる地下式板石積石室墓が別府原古墳群・日露古墳・湯田原古墳・小松原古墳にあり、鉄刀・鉄剣・鉄錐などが副葬品として出土している。また、湯田原や轟原で採集された土器には高环が多く、内外面に丹を塗り研磨されたものがある。

古代には、さつま町は薩摩国高城郡に属する。<sup>a</sup>和名抄<sup>a</sup>には、高城六郷として合志・飽田・櫛木・宇都・新多・託万の名があげられている。合志を鶴田町神子に、櫛木を宮之城町一つ木に、新多を薩摩川内市新田八幡宮付近に比定する説がある。平安時代の遺跡は発見例が少なく、

坪井遺跡・上大原遺跡が発見されている。

平安時代末期には、大前氏が山崎を含む祁答院地方を支配する。その後、南北朝時代に閻東から下向した渋谷氏が祁答院地方を支配することが、「祁答院記」や「山崎名勝志再撰方志ら邊帳留」及び「三国名勝図絵」などからうかがわれる。これら資料によると本遺跡周辺は、祁答院氏第七代重茂の三男重直が山崎城の領主、東郷渋谷氏第六代氏親の七男正重が二渡地区的北西側にある山城「高城」の領主となりこの地域を支配していたことがわかる。そして、永祿9年（1566年）十三代良重の代で約300年にわたる渋谷氏の支配が終わり島津氏の支配が始まった後に、豊臣秀吉が天正15年（1587年）に島津討伐のため薩摩へ侵攻し、肥後路を南下してきた。その際、豊臣秀吉は5月3日に薩摩に入り川内の泰平寺で島津義久の降伏を受け入れ、帰路の途中、当時から交通の要所であった二渡を通り川内川の対岸にある山崎城に泊をとったといういわれが有名である。この頃の遺跡には、山城の長松院跡・舟木の古城跡・高城跡・山崎城跡・久富木城跡・松尾城跡・於天城跡・余ヶ城跡が知られている。また、城館跡の恋ノ巣城跡と古戦場の牧の峯、寺医院跡の淨福寺跡、法円寺跡が知られている。平成5年の分布調査で青磁が上原遺跡から採集された。また、土師器が格崎遺跡から採集された。他にも大畠町園田遺跡・上大原遺跡が知られている。

近世の頃になると「旧記雜錄」に寛永16年（1639年）の外城薩摩三十七か所の中に山崎郷の名があり、慶長19年（1614年）大村郷から久富木村が山崎郷に加わり、明暦から万治（1655～1660年）の頃に東郷渋谷氏の勢力藩であった二渡・白男川・沿野の3つの村が加わり、山崎を含め5つの村で郷が成立した。地理的に山崎郷は、私領の宮之城・入来・蘭牟田と境を接し、四方（大村・樋脇・副田・宮之城）への街道が交差しているので交通の要衝であった。そのため山崎郷の藩政時代は島津氏の直轄地（地頭所）であった。当初、地頭仮屋は山崎野町の宿場屋敷付近にあったが、文化11年（1814年）に現在の山崎小学校付近に移され明治維新まで続いた。その頃の山崎野町の様子については宮之城町史に絵図（第3図）があり、山崎町の十文字付近から川内川岸までの間に名頭屋敷と部当屋敷が道の両側に並び、町人が生活していた様子がうかがえる。また、今回発掘調査を行った場所には山崎興御倉があったと考えられ、その関係で宿場があり、目前に流れる久富木川のところを宿場淵と呼んでいた。

山崎野町跡は川内川の支流である久富木川にかかる東橋の西側一帯に位置する。川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う県道山崎川内線（山崎2東橋）改良事業に伴い、平成21年9月7日から平成21年9月18日まで調査を実施している。トレンチ調査の結果、宅地として造成

盛土され、遺物包含層は確認されなかった。しかし、久富木川に面した石垣については、実測を行い記録保存がなされた（第4図）。

石垣上部は切石を各段の高さを水平に揃えて積まれ、一部セメントの使用も確認できる。また、周辺地域の歴史からも明らかのように、明治初期に宅地の造成が行われた時期のものであることが確認できた。さらに、石垣東端部は昭和年間に至るまで道路工事で使われた長方形の平石の隅を立てて積む谷積であった。隣接する東橋の建設に伴い、昭和初期に一部改築されたものと考えられる。石垣下部は、自然石を加工せずに積み上げただけで石の形に統一性がなく、石同士がかみ合っていない。排水性に優れているが、技術的に初期の石積法である。明治以前に築かれたもので江戸時代の野町に間連する石垣と考えられる。なお、近世の遺跡は、寺院跡の清庵寺跡と費庵寺跡がある。



山崎野町跡調査範囲遠景



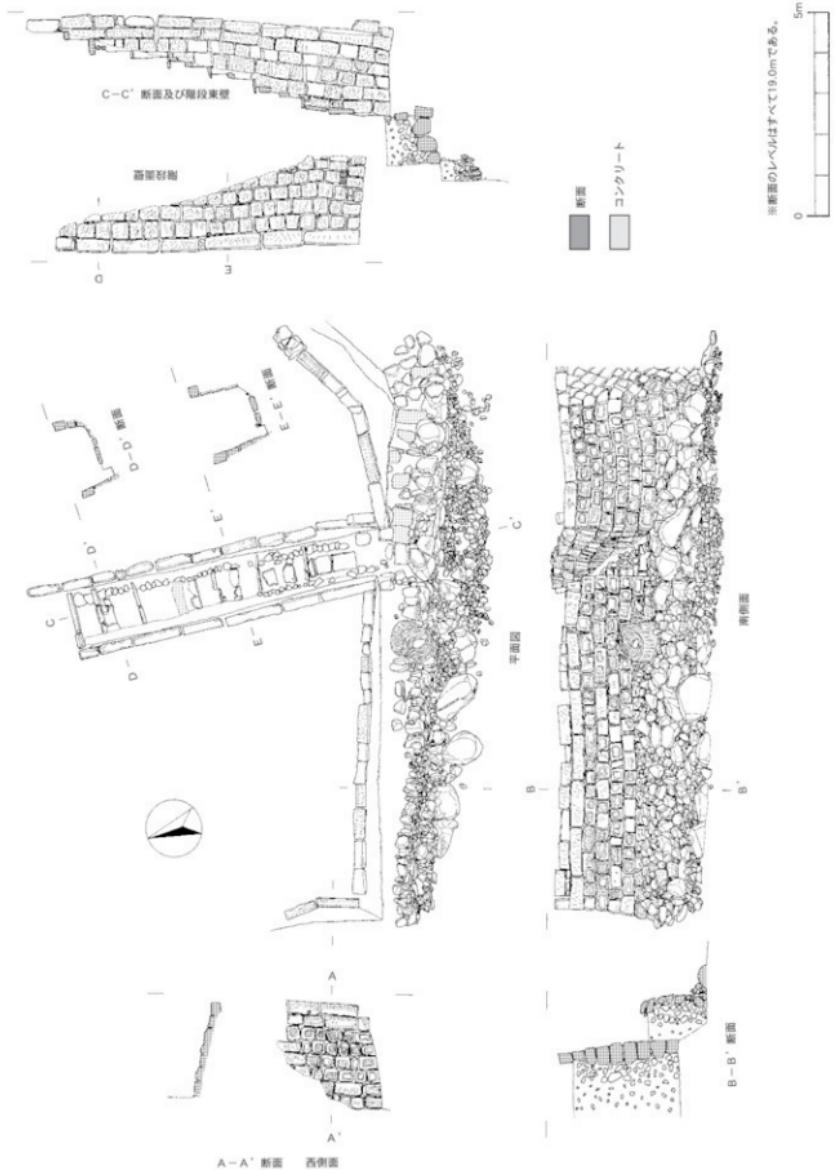
石垣近景



旧宮之城町史 229 頁に掲載されている図を基に作成

第3図 山崎野町地図

第4図 山崎野町跡 石垣実測図





第5図 山崎野町跡 調査範囲

当時の産業で特筆されるものは、養蚕・茶葉及び稻作がある。養蚕は、島津家二代忠長が加世田から宮之城に移封されたときに同行した家臣が養蚕業を興したと言われる。また、茶葉は、宮之城島津家4代久通が京都の宇治から茶の実を持ち帰り栽培したのが始まりと言われている。山崎郷御仮屋文書の明治3年の諸廻文に茶葉が記され、現在でも地域の高台では盛んに栽培されている。近世中期である享保年間には、各地で新田開発が盛んに行われ二渡地区の二渡新田は享保14-16年(1729-1731年)の頃の宮之城島津家による開発と伝えられている。なお当一帯の水田への用水は、川内川の上流にある泊野川から水を引き南瀬までの延長約7.5kmにわたる井手溝からの用水が現在も使われており、途中には岩盤を掘り抜いた隧道が何か所もある。

次に交通は、街道による陸上交通の要衝であったことは前述したが、川内川の舟運も重要であった。島津忠長の家老稻富掃部介長元(元周)が川舟を造らせ、川内川を下らせたのが舟運の起りと言われ、慶長の頃(1600年代)から、宮之城と川内の間で舟による荷物・旅客の往来が行われた。当時の荷物は、下りが米・雑穀・木



二渡新田（隧道）

表2 周辺遺跡一覧表（さつま町）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代				備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳古代	
1	桜崎	船木	台地			●	●	H5年度県教委分布調査(III)
2	舟木原	船木	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
3	下原	船木	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
4	原畠	船木	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
5	長松院跡	船木	台地				●	中世山城跡
6	四目ヶ迫	船木字坪井ほか	台地			●		H5年度県教委分布調査(III)
7	坪井	船木	台地		●	●	●	H5年度県教委分布調査(III)
8	於天城跡	船木	台地				●	
9	恋ノ巣城跡	船木字城ノ段	丘陵			●		中世城館跡
10	舟木の古城跡	船木	台地			●		中世山城跡
11	鳴ノノ果	船木	台地			●		H5年度県教委分布調査(III)
12	高城跡	二渡	丘陵				●	中世山城跡
13	宮ヶ原	二渡	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
14	諏訪下	二渡ほか	丘陵		●			H5年度県教委分布調査(III)
15	宮下原	北原	丘陵			●		
16	清庵寺跡	二渡	河岸段丘				●	
17	二渡船渡ノ上	二渡	自然堤防	●	●	●	●	本報告書・町発掘調査報告書(10)
18	山崎城跡	山崎	丘陵			●		一部消滅、中世山城跡
19	山崎野町	山崎	河岸段丘				●	
20	養庵寺跡	山崎	河岸段丘				●	
21	淨福寺跡	山崎	台地			●		
22	貝侯	山崎	河岸段丘		●			
23	余ヶ城跡	山崎	台地			●		
24	堂ノ前	船木	台地			●		H5年度県教委分布調査(III)
25	米ノ山	久富木	台地	●	●	●		H5年度県教委分布調査(III)
26	上原	山崎	台地		●	●	●	H5年度県教委分布調査(III)
27	内堀	山崎	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
28	大窪	山崎大窪	山麓緩斜面					
29	州之元	山崎州之元	河岸段丘					
30	山角	山崎	台地		●			H5年度県教委分布調査(III)
31	松尾城跡	久富木字上横橋	台地			●		中世城館跡
32	大航町園田	久富木大航町園田	河岸段丘	●		●		町発掘調査報告書(1)
33	法円寺跡	久富木	台地			●		
34	久富木城跡	久富木	丘陵			●		中世山城跡
35	牧の峯	山崎	丘陵		●		●	古戦場
36	荒瀬上原	山崎荒瀬	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
37	川添	二渡ほか	自然堤防		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
38	前床	山崎荒瀬ほか	河岸段丘			●		H5年度県教委分布調査(III)
39	上大原	山崎荒瀬	台地		●	●	●	H5年度県教委分布調査(III)
40	茶屋ヶ段	久富木ほか	丘陵		●			H5年度県教委分布調査(III)
41	丸岡	久富木ほか	丘陵		●			H5年度県教委分布調査(III)
42	下川内	山崎久富木荒瀬ほか	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
43	西下原	久富木北原ほか	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)
44	東下原	久富木北原ほか	台地		●	●		H5年度県教委分布調査(III)

表3 周辺遺跡一覧表（薩摩川内市）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代				備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳古代	
45	下永北	入来町副田小字下永北	低地・古墳			●		昭和62年度町教委文化財調査
46	後追	入来町副田小字後追	低地		●	●		昭和62年度町教委文化財調査
47	永山	入来町副田小字永山	低地		●	●		昭和62年度町教委文化財調査
48	上永北	入来町副田小字上永北	低地			●		昭和62年度町教委文化財調査
49	寺畠	入来町副田小字寺畠	低地		●	●		昭和62年度町教委文化財調査



第6図 周辺遺跡位置図

(S = 1 / 25,000)

材・木炭・船材で、上りが塩・魚・砂糖・焼酎・骨粉・獸骨だった。その後、大口・加治木の交通が盛んになり、明治期に著しく衰退した。

近代から現在にかけては、明治10年に起きた土族による武力反乱であった西南戦争で、西郷軍の勇義隊と振武隊が官軍に追われ衝突を繰り返しながら、同年6月下旬には宮之城から山崎へ副田に敗走した。幸い山崎郷内の交戦はなかったが、副田において両軍が戦闘した際に勇義隊が炊き出しに使った米は、山崎郷組藏から持ち出されたものであった。また官軍の一部は山崎蘿筋へ向かい蘿船渡場から川内川を二渡に渡り、東郷に進出していた大隊と連絡している。明治22年4月町村制の施行で山崎郷が山崎町となり、これまでの5つの村が大字となった。昭和28年の町制で山崎町となり、さらには昭和30年に旧宮之城町と合併し、2005年3月に鶴田町・薩摩町・宮之城町が合併し現在のさつま町となっている。

産業は前述した養蚕が盛んに行われ、明治7年の「山崎郷御仮屋文書」に山桑で蚕をしていたことが記され、明治30年代から大正時代末まで山崎村だけでも2つの製糸工場が稼働し、約150名の従業員が働いていた。また、煙草は明治8年に税を納めることで煙草の製造販売が可能となり、盛んに生産され始めた。明治36年の煙草の作付面積と生産高は、宮之城村の5.5haで6,190kgであったのに対し、山崎村は48.38haで42,069kgと他の地域に比べ飛び抜けて生産が盛んであった。明治37年煙草専売法が公布され、国の専売事業となつたとともに、近年まで生産が続いた。他にも馬の飼育が盛んで、大正から昭和の初期には、山崎橋下で婦人財叢と呼ばれる賞金付きの競馬が催され廻らざると言わされている。

次に交通は、古くから交通の要所であり、今日に至るまで変わっていない。明治26年3月に県道鹿児島-宮之城線が開削され、久富木川に東橋が架橋された。その後、明治32年に架け替えられ、さらに、昭和8年に鉄筋コンクリート製の東橋となった。また、明治28年に県道川内-山崎線が開削され、川内川に板橋であったが山崎橋が架橋された。その後、大正14年に7月鉄筋コンクリート

製の山崎橋となった。これら2つの橋は、近年まで利用されていたが、平成18年7月の災害で新しく架け替えられたことになった。また公共交通機関は、大正7年10月に宮之城-川内間で乗合自動車が運行される。県内においても乗合自動車の営業運行は当時ほとんどなく、バス事業の草分けであった。昭和21年には、省営バス(現JRバス)北薩線(鹿児島-宮之城線)が開通し、山崎の役場前に山崎町駅ができる。ほかにも鉄道が大正15年5月川内-宮之城間に国鉄宮之城線が開通し、薩摩山崎駅ができる。その後、昭和12年12月宮之城線は大口まで伸びたが、自動車の普及で昭和62年1月に廃止になった。

#### 参考文献

- 宮之城町教育委員会 1985 「大畠町園田遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
- 宮之城町教育委員会 1992 「甫立原遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
- 宮之城町教育委員会 1995 「諏訪原遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』(6)
- 宮之城町教育委員会 2002 「二渡船渡ノ上遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
- 宮之城町史編纂委員会 2000 『宮之城町史』
- 鹿児島県教育委員会 1994 『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書』(III)
- 鹿児島県教育委員会 2002 『松尾城跡』『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(42)
- 入来町教育委員会 1987 『入来町文化財調査報告書』  
原口虎雄 1982 『三國名勝圖會』第三卷 図書出版青潮社
- 原口泉 永山修一 1999 『鹿児島県の歴史』山川出版社
- 河口貞徳 1988 『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社
- 鹿児島県土木部河川課 1992 『鹿児島の河川・海岸』



山崎橋

### 第3章 二渡船渡ノ上遺跡の調査方法と成果

#### 第1節 調査の方法

##### 1 発掘調査の方法

平成19年3月8日に行われた県文化財課の事前調査を受けて、平成19年12月から平成20年2月までと、平成21年9月から11月、平成22年1月から3月の計9か月間の本調査を行った。

調査は、対象区域全体を用地境界座標点のZ 4 (X : - 125750.667, Y : - 54531.508) と Z 6 (X : - 125782.761, Y : - 54382.695) の2点を直線で結び、その延長上でZ 6 から南方にある調査区側に5m移動させた地点を座標(0, 100)とし、10m四方のグリッドを設定した。各グリッドについては、アルファベットと数字で呼称することとし、座標(0, 0)から南方へ大文字のアルファベットと北方へ小文字のアルファベット、東方に数字を付した。平成19年度は、用地取得済みの11区以西の自然堤防後背地部分の調査を実施し、調査面積は2,000m<sup>2</sup>であった。平成21年度は、平成19年度に調査できなかつた自然堤防部分の調査を実施した。調査面積は3,000m<sup>2</sup>であった。

発掘調査は重機によってI・II層(いずれも表土)を除去した後、おむねIV層を除くV層から人力で掘り下げた。後世の擾乱によって層位が乱されているD-E-4-5区付近については、擾乱層を表土同様に重機で掘り下げ、包含層が残存していないことを確認した。また、最終的な下層確認のためのトレーニングを設定して、これを人力で掘り下げた。

遺構は検出状況を写真で撮影し、位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測終了後の状況も写真で撮影した。

遺物は、トータルステーションを用いて出土位置を記録した後に取り上げた。ただし、古代以降の遺物については、おむね同一グリッドの出土遺物は一括で取り上げ、遺構埋土内出土遺物などはトータルステーションを用いて出土位置を記録し、取り上げた。

##### 2 遺構の認定と検出方法

遺物包含層上面を検出した際、各遺物包含層上面の精査を行い、土質の違いや硬のまとまり具合を見極めて遺構の有無を確認した。その後、遺構内外で異なる土の境界をたどり、平面的に遺構の輪郭を確定した。その結果、埋設土器、土坑・ピット・礫の集積・石組み・跡跡・水田・杭痕を検出した。その後、埋土の堆積状況が把握できるようベルトを設定し、遺構の掘下げを行った。その際、埋土の色・質・硬さなどの違いを比較しながら埋土を掘り下げた。さらに、遺構を検出した層や埋土状況・遺構の形態・遺構内出土遺物などの情報から総合的に遺構の構築時期や性格等の検討を行った。

#### 3 発掘調査経過

##### (1) 平成19年度

川内川の自然堤防の後背地に掛かる遺跡範囲2,000m<sup>2</sup>の本調査を行った。詳細は、日記抄により、略述する。

##### (11月)

重機による表土剥ぎ取り、トレーニング設定・掘下げ、幅杭・基準杭設置(27日、川内川河川事務所)

##### (12月)

重機による表土剥取り、トレーニング設定・掘下げ、環境整備、ベルトコンベア設置、グリッド設定、IV層掘下げ、遺物一括取上げ、調査範囲平板実測、V層遺物取上げ、石列遺構検出(C-7区), ピット検出(C-5~7区, B-6・7区), 故状遺構検出(B-6区, A-9・10区, B-10区), 杭列検出(B-4区),

##### (1月)

IV層掘下げ、IV層遺物取上げ、石列・礫の集積・杭列・ピット・土坑検出・実測、石組み遺構検出・実測、IV層地形図作成、水田跡検出・埋土掘下げ、

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部)、渡辺芳郎(鹿児島大学法文学部)現地指導(28日)

##### (2月)

IVb・V層掘下げ・遺物取上げ、水田跡埋土掘下げ、石組み遺構・石列実測、土坑検出・埋土掘下げ・実測、空中写真撮影(14日), ピット・土坑検出・実測、下層確認トレーニング設定・掘下げ、現場撤収作業

##### (2) 平成21年度

本遺跡は2期に分けて川内川の自然堤防に掛かる遺跡範囲合計3,000m<sup>2</sup>の本調査を行い、計画していた調査をすべて終了した。詳細は、日記抄により、略述する。

##### (9月)

重機による表土剥取り、調査範囲内グリッド杭新設、レベル移動、面積測量、B-D-9-11区V層掘下げ・遺物取上げ、D-F-5-11区トレーニング設定・確認調査、f-i-23-26トレーニング設定・確認調査

##### (10月)

a・b・A-D-12-19区V層掘下げ・遺物取上げ・遺構検出・検出写真撮影・実測、6トレーニング(C-12区)拡張・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影、7-11トレーニング設定・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影、VI層直上まで重機による掘下げ、VI層精査(11月)

a・b・A-D-12-19区V層掘下げ・遺物取上げ・遺構検出・検出写真撮影・実測、6トレーニング(C-12区)拡張・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影、7-11トレーニング設定・下層確認・遺物取上げ・土層断面写真撮影、VI層直上まで重機による掘下げ、VI層精査、調査区引渡し協議

本田道輝氏（鹿児島大学法文学部准教授）現地指導（12月）

（1月）

環境整備，表土掘下げ，ベルトコンベア設置，表土一括遺物取上げ

（2月）

D-F-5～11区V層上面精査，掘下げ・遺物取上げ，

D-9区V層埋設土器検出・写真撮影，掘下げ・実測，

D-8区V層土坑2基検出・写真撮影・掘下げ・実測，

ベルトコンベア移設

（3月）

E-8・D-8区下層確認トレンチ設定・掘下げ，V層遺物出土状況撮影，D-8区土坑実測，D-9区埋設

土器実測，F-6区土坑検出・写真撮影・実測，E-F

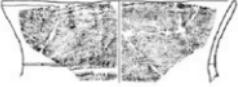
-6区礎石検出・写真撮影・実測，環境整備，7・8区間セクションベルト土層断面実測・写真撮影，完掘状況撮影，撤収作業，調査区引渡し協議

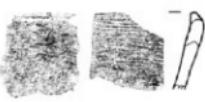
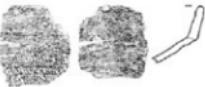
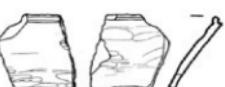
#### 4 出土遺物の分類

##### （1）土器の分類

本遺跡では、縄文時代中期から近世までの幅広い時代の土器・陶磁器が出土した。中でも縄文時代晩期から弥生時代の土器がV層から多数出土した。他にも古代の土師器・須恵器・青磁などがIV層から比較的多く出土している。そこで一定量の遺物数があり、類を作ることができた縄文時代晩期土器に限って次のとおりに分類した。

表4 土器分類表

大分類	小分類	器 形：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。 文 様：器面に施された文様とその施文原体を表記する。 器面調整：器面に行われる調整と原体を表記する。 土器型式：從来言われている土器型式名を表記する。	図：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 (スケール不統一)
A	-	器 形：口縁部が肥厚して内湾する深鉢形土器 文 様：数条の沈線・凹線を巡らす。 器面調整：ミガキ，ナデ 土器型式：上加世田式土器	
B	-	器 形：口縁部が内湾する深鉢形土器 文 様：数条の沈線線を巡らす。 器面調整：ミガキ，ナデ 土器型式：滋賀里式土器	
C	-	器 形：口縁部が肥厚して外に開く深鉢形土器 文 様：下位に段を有する。 器面調整：ナデを施すが、条痕が若干残るものもある。 土器型式：入佐式土器	
D	1	器 形：口縁部が肥厚せずに外傾する深鉢形土器 文 様：貝殻条痕 器面調整：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ 土器型式：黒川式土器	

大分類	小分類	<p>器 形：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。          文 様：器面に施された文様とその施文原体を表記する。          器面調整：器面に行われる調整と原体を表記する。          土器型式：從来と言われている土器型式名を表記する。</p>	図：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 (スケール不統一)
		<p>器 形：口縁部が緩やかに外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器          文 様：貝殻条痕          器面調整：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ          土器型式：黒川式土器</p>	
	2	<p>器 形：口縁部が直行し、胴部は僅かに屈曲する深鉢形土器          文 様：貝殻条痕          器面調整：内外面共に貝殻によるケズリのちナデ          土器型式：黒川式土器</p>	
	3	<p>器 形：口縁部が直行ないし僅かに内弯する深鉢形土器          文 様：無紋である。          器面調整：ナデを施すが、条痕が若干残るものもある。          土器型式：黒川式土器</p>	
D	4	<p>器 形：口径が胴部屈曲部径より小さい鉢形土器          文 様：無紋である。          器面調整：条痕を残さず、ナデ・ミガキを施す。          土器型式：黒川式土器</p>	
粗製土器	5	<p>器 形：口肩部を肥厚させた深鉢形土器          文 様：無紋である。          器面調整：ナデを施すが、条痕が若干残るものもある。          土器型式：黒川式土器干河原段階</p>	
	6	<p>器 形：口縁部下位及び胴部屈曲部に 2 条の刻目突帯          文 様：刻目突帯文、沈線          器面調整：内外面共にナデ          土器型式：刻目突帯文土器</p>	
	7	<p>器 形：口縁部下位及び胴部屈曲部に 2 条の刻目突帯          文 様：刻目突帯文、沈線          器面調整：内外面共にナデ          土器型式：刻目突帯文土器</p>	
	8	器 形：1 ~ 8 に属さない口縁部をもつ深鉢形土器	
	9	器 形：胴部片を一括した。	
	10	器 形：底部片	
E	-	<p>器 形：明瞭な底部をもたないボール状の器形          器面調整：外面に組織圧痕、内面にミガキが施される。          土器型式：半粗半精製土器に属する。</p>	
F	1	<p>器 形：口縁部が短く直立する。沈線が施されているものは玉環状の口部縁を呈する。胴部が屈曲して底部に至る。          土器型式：入佐式土器</p>	

大分類	小分類	<p>器 形：器形・底部形態・口縁部形態などを表記する。          文 様：器面に施された文様とその施文原体を表記する。          器面調整：器面に行われる調整と原体を表記する。          土器型式：從来と言われている土器型式名を表記する。</p>	図：二渡船渡ノ上遺跡の代表的な土器実測図・拓本を提示する。 (スケール不統一)
	2	<p>器 形：口縁部は頸部まで緩やかに外反する。口縁部内外面に1条の沈線が施され、玉縁状の口縁部を呈する。          脊部は屈曲して底部に至る。          土器型式：黒川式土器</p>	
	3	<p>器 形：口径より脣部径が大きい。脣部が強く屈曲する。          文 様：沈線で玉縁状の端部とする。          土器型式：黒川式土器</p>	
F	4	<p>器 形：口縁- 頸部の間が短い口径より脣部径が大きい。          文 様：沈線で玉縁状の端部とする。          土器型式：黒川式土器</p>	
精製土器	5	<p>器 形：口縁部が内湾する。流水形の器形をもつ。          文 様：口縁端部・屈曲部・底部に顔料が入った沈線。          リボン・ヒレが多い。          土器型式：黒川式土器干河原段階</p>	
	6	<p>器 形：器高が浅い。脣部などに屈曲がない。          文 様：口縁部に沈線があるものもある。          土器型式：黒川式土器</p>	
	7	<p>器 形：口縁部が外反する。          文 様：無紋          土器型式：刻目突帯文土器の時期</p>	
	8	器 形：上記分類に属さないもの、底部破片	

## (2) 石器の分類

本遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代の土器が多く出土したV層から打製石斧を多く含む1,145点の石器が出土した。

器種は、石鎚・石匙・スクレイバー・使用痕剥片・二次加工剥片・石錐・石核・打製石斧・礫器・抉入状石器・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・砥石・石鍤である。

石器について分析していくにあたり、石材及び器種について可能なものについて分類を試み、その表を以下に示した。そこで、本報告書における石器に関する記述は、

以下の表を参照し述べていくこととする。

### ア 石材分類表

石材に関しては、県内有数の黒曜石産地に比較的近接することから、特に黒曜石の細分化を試み、以下のように分類した。

#### イ 石器分類表

石器は、同一器種内で属性による相違が明瞭で、一定量以上出土するものについて、グルーピングし、以下の

ように分類した。使用による折損や欠損等により他器種への転用が見られる場合は、最終用途をその石器の器種と捉えて分類した。

表5 石材分類表

岩石分類	概 要
黒曜石 (o b)	I 不純物を多く含み、澤面で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市川上平木塙、いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	II 光を通し、不純物を多く含むものを紹述した。鹿児島県の三船、伊佐市大口平出水の日東・小川内の五女木、鶴江町の長谷等の原産地資料に類似するが、組分を行うことはできなかった。
	III 鮎色～黒色を基調とし、不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留、伊佐市大口市の上青木の原産地資料や自然面が磨きガラス状を呈する露葉系の資料に類似するが、組分を行うことはできなかった。
	IV 黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市諸彦庄の資料に類似するが、一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系のものも含まれる。
	V 青灰色で不純物の少ないものを包括した。針尾町中野や長崎県佐世保市東浜、淀波等西北九州の原産地資料に類似するが、原産地不明の一例も含まれる。
	VI 不純物をあまり含まない灰色のものを包括した。佐賀県椎葉川周辺のものを原産地資料とするが、原産地不明の一群も含まれる。
	VII 原産地不明のものを包括した。
安山岩	数mmの長方形をした黒(角閃石や輝石)や白(斜長石)の結晶(晶石)が点在するものを包括した。淡灰色～黒色で著しく多孔質・細粒緻密やガラス質、摩擦は大・小まで様々なものがある。黒色を呈し、硬質なサヌカイトが有名。
蛇紋岩等	蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し、光沢がある。石材不明資料中、蛇紋岩に類似した資料を含めた。
頁岩	泥や粘土の固結した岩石で、平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが、褐色系の色のものもある。非常に細粒で、肉眼では粒子の識別出来ないものが多い。粒度均質。さひか付するものも特徴である。
砂岩	砂粒・石英粒が集合して団圓った堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。
瑪瑙系	瑪瑙・玉髓・石英・タンバク石・鉄石英・水晶・石英板岩・珪岩などを総称して、本類に含めた。
ホルンフェルス	泥岩や砂岩などの堆積岩が熱により変成したもの。片理や握開(がな)粒程から粗粒の緻密な変成岩である。
チャート	珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。

表6 石器分類表

器種分類	概 要
剥片石器	剥片を素材として両側縁間に周面から押圧剝離を施してある小型から中型の三角形状の石器群
	I 全体の形状が正三角形を呈するもの
	II 全体の形状が二等辺三角形を呈するもの
	III 先端が尖り側縁が緩やかに曲線を描くもの
	IV I～IIに該当しない特殊を呈するもの
	V 未製作や欠損品
	石片 剥片を素材として刃部及びつまみ部を作出し、つまみ部に着紐して携帯する石器群
	スクレイパー 剥片の縁辺部などに二次調整を行い、刃部整形を施してあるもの
	使用痕削片 刃片の縁辺部などに肉面で使用痕と考えられる刃こぼれが観察される。
	二次加工剥片 剥片の縁辺部などに二次調整を行い、刃部整形が認められないもの
礫石器	石錐 削片の縁辺部を削し、主張剥離面と底面面をつみ削くとする。
	石核 原石から石器製品作出のための剥片を探求した既成石器本類に分類した。
	I 明確な抉り跡をたずさない、矩形形(長方形)の器形を有する。
	II 基底部・刃部を境界を作り、刃部を持ち、ラット付きを呈する。有肩石片と呼称される。
	III 中型から小型で、縦身の外形を有するもの。
	IV 中型から小型で、左側・右側のどちらかが勾曲しているものである。
	V 分類不可肩なし及び未製品
	抉入狀石器 深めのある剥片の両側面に二次加工を施し、抉りが入るため、外削が弯曲したものの器底が厚く、重量感がある。刃部は他の形態を有し、器形は長方形形状を呈する。
	磨製石斧 器底が厚く、重量感がある。刃部は他の形態を有し、器形は長方形形状を呈する。
	磨器 素材剥片の縁辺部に刃部調整が施される。
磨石器	I 全面的にもしくは部分的に磨面を有し、側縁に明確な歯打痕が連続して見られる。
	II 全面的にもしくは部分的に磨面を有し、側縁に明確な歯打痕が見られる。
	III 長範の該部や側縁に明確な歯打痕が見られる。
	敲石 磨面・凹面を有する。磨石とセット間にあり、木の実を砸り漬したりするためと考えられる。
	石皿 砕石の礫状材を利用し、主として長軸方向に削ぎ走り、深い凹面を有することが多い。
	石鍤 左右1対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に歯打痕等は確認できない。
石製品	上記石器に該当せず、利器としての用途が不明なもの。

## 第2節 層序

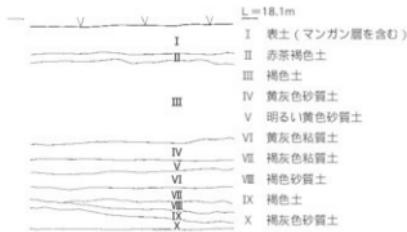
二渡付近の地質を概観すると、基盤層は四万十累層群であり、その上層に約30万年前から約2万5千年前の火砕流堆積物、川内川及びその支流の作用による砂屑物の沖積層が覆う。

本遺跡は川内川右岸の標高約20mの自然堤防上と後背地に位置する。自然堤防上は、広範囲にわたり安定した沖積層の堆積が確認できた。

一方、後背地においては、耕作によると思われる削平が部分的に調査前の現況で確認できた。また、トレンチ調査を進めていく途中でIV層とV層が確認できない範囲が存在した。特にD・E・4・5区付近において砂質土の間に粘質土が堆積している状況を確認した。この範囲は川内川及びその支流の影響と耕作等に土地を利用されたことによって、遺跡が消失したものと考えられる。

また、山崎橋付近のf-23-k-27区においては、砂質土と砂層の堆積が著しく、包含層を確認することができなかった。

### ① E-5区

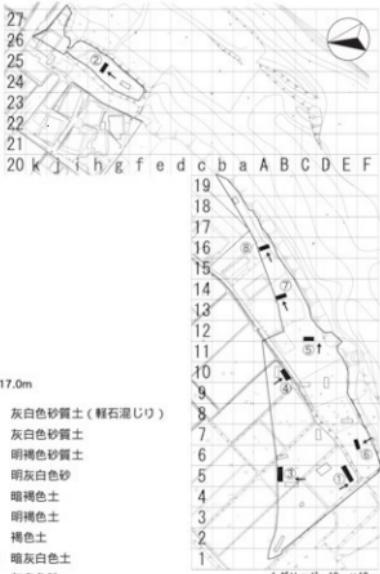
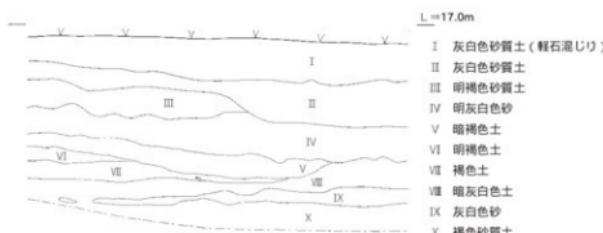


なお、三度の調査によって得られた層序の情報を核検し、本遺跡の基本的な土層の堆積状況を次のとおりにまとめた。

表7 二渡船渡ノ上遺跡基本土層

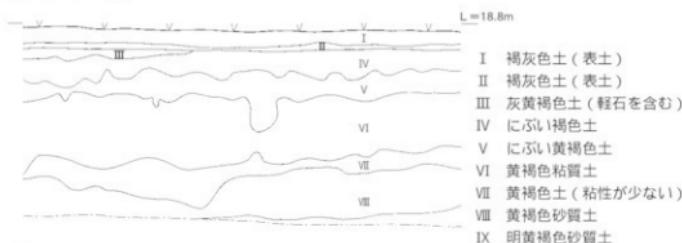
I 层	表土
II 层	表土
III 层	灰褐色土
IV 层	赤茶褐色土 古代～近世遺物包含層
V 层	褐色砂質土 縄文時代晚期～古墳時代遺物包含層
VI 层	黄褐色砂質土 縄文時代中期遺物包含層
VII 层	灰褐色砂
VIII 层	褐色砂
IX 层	褐色砂と灰褐色砂の葉理(雲母片を含む)

### ② h-25区

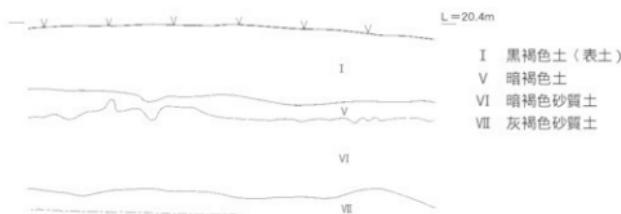


第7図 土層断面図（1）及びトレンチ位置図

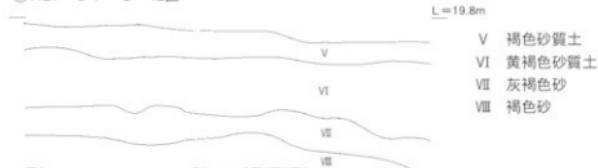
③ 3 T B-5区



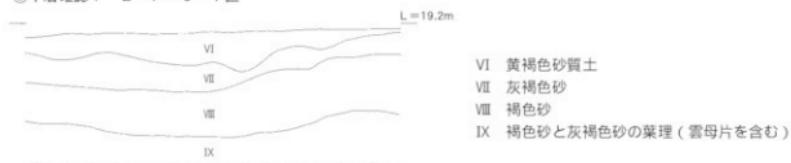
④ H19-6 T B-10区



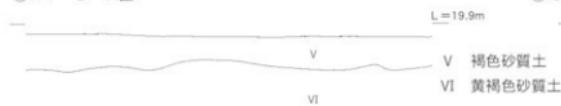
⑤ H21-6 T C-12区



⑥ 下層確認 T E + F - 6 + 7区



⑦ 11 T B-14区



⑧ 10 T A-16区



第8図 土層断面図(2)

### 第3節 調査成果

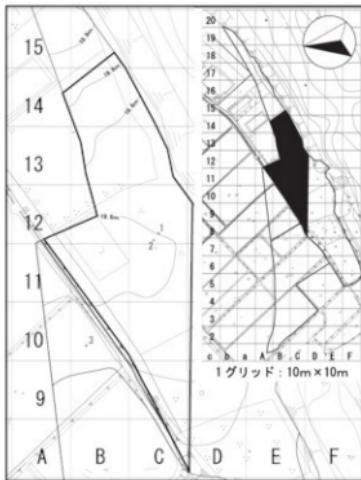
#### 1 繩文時代中期（VI層）の調査成果

##### (1) 概要

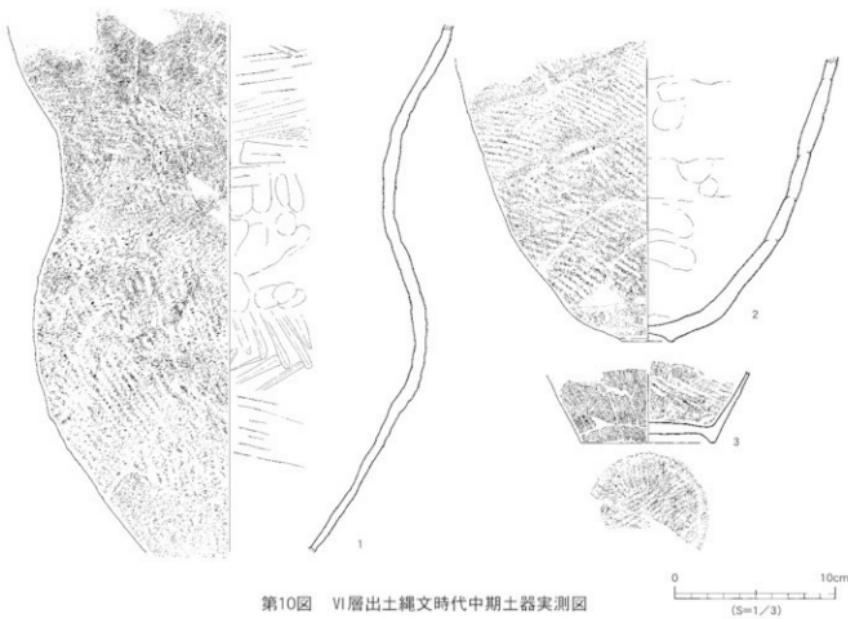
C - 12区において、V層調査後に下層確認のため2×5mのトレンチ調査を開始したところ、VI層から2個体分の当該期深鉢破片が集中して出土した。そのため、トレンチを拡張し、調査を行ったが、それ以上の遺構・遺物は発見できなかった。調査面積は約700m<sup>2</sup>である。

##### (2) 遺物（第10図1～3）

出土遺物は土器だけで、全てを掲載した。1と2は、トレンチ内でそれぞれ集中して出土し、接合で2個体となつた。1は、口縁部と底部は凹落しているが、残る胴部から口縁部下位の形状はいわゆるキャリバー状を呈し、胴部上位で明瞭に縮れる。外面は、RLの縄文が全面に施される。内面は荒いヘラナデを基調とし、肩部に指頭の跡が見られる。2は、胴部から底部に近づくにつれて急にすぼまる。そして、直径34mmの小振りな上げ底の底部となる。外面の調整は、RLの縄文が全面に施される。内面の調整は、指頭による作りだしの跡が顕著に見られ、ケズリ・ナデ等の調整が少ない。そのため、輪積みの接合痕が観察できる。3は、V層出土の上げ底の底部である。器壁が薄く貝殻による調整痕が特徴である。



第9図 VI層調査範囲及び土器出土状況図



第10図 VI層出土縄文時代中期土器実測図

表8 繩文時代中期土器観察表

構図	番号	区	層	取上番号	分類	部位	文様	調 整		色 調		石英	長石	角閃石	雲母	小纖	赤鉄	備考
								外	内	外	内							
1	C	12	V1	4308	深鉢	胴部	縄文	RL撚糸	ヘラ・指ナデ	黒褐・明黄褐色	暗黃褐色／にぶい黄褐色	○	○	○	○			
10	2	C	12	V1	4289	深鉢	胴～底部	縄文	RL撚糸	指ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	○		
10	3	B	10	V	1239	深鉢	底部	条文	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	褐色	○	○	○	○	上げ成	

## 2 繩文時代晩期（V層）の調査成果

## (1) 概要

調査範囲の中でも、川内川により近く、標高が周囲に比べて高い自然堤防上において表土直下のV層から遺構・遺物を発見した。調査範囲は約3,300m<sup>2</sup>である。

## (2) 遺構

## ア 土坑（第12・13図）

V層上面において灰褐色の円形プランの土坑9基を検出した。複数の土坑からは、繩文時代晩期に該当する遺物が出土し、それらの一部を資料化した。

## 1号土坑（第12図、第13図4）

A~16区で検出した。平面形は円形で、直径は約0.9mである。埋土は2枚に分層できた。土器片6点が埋土内から出土した。4が出土遺物である。浅鉢形土器の胴部で内外両面にミガキが施されている。

## 2号土坑（第12図、第13図5・6）

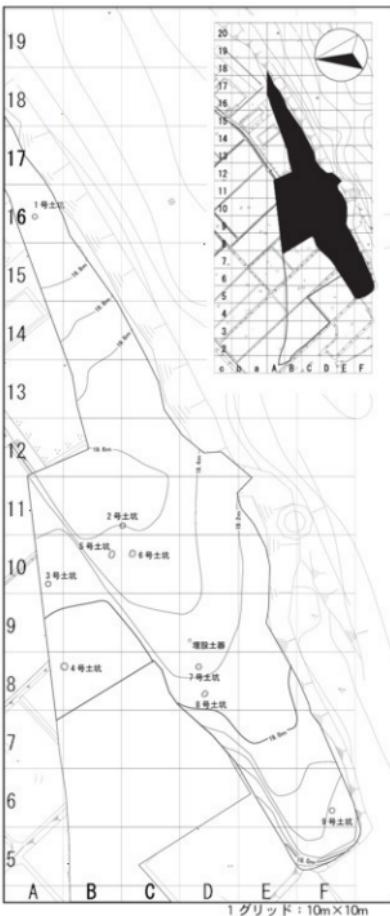
B・C~11区で検出した。平面形は略円形で、直径は約1mである。土器片が8点、石器・剥片等9点が埋土内から出土した。5・6が出土遺物である。5は深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、包含層遺物のA 2類に該当する。6は砥石で3面に作業面が確認できる。

## 3号土坑（第12図、第13図7~第14図15）

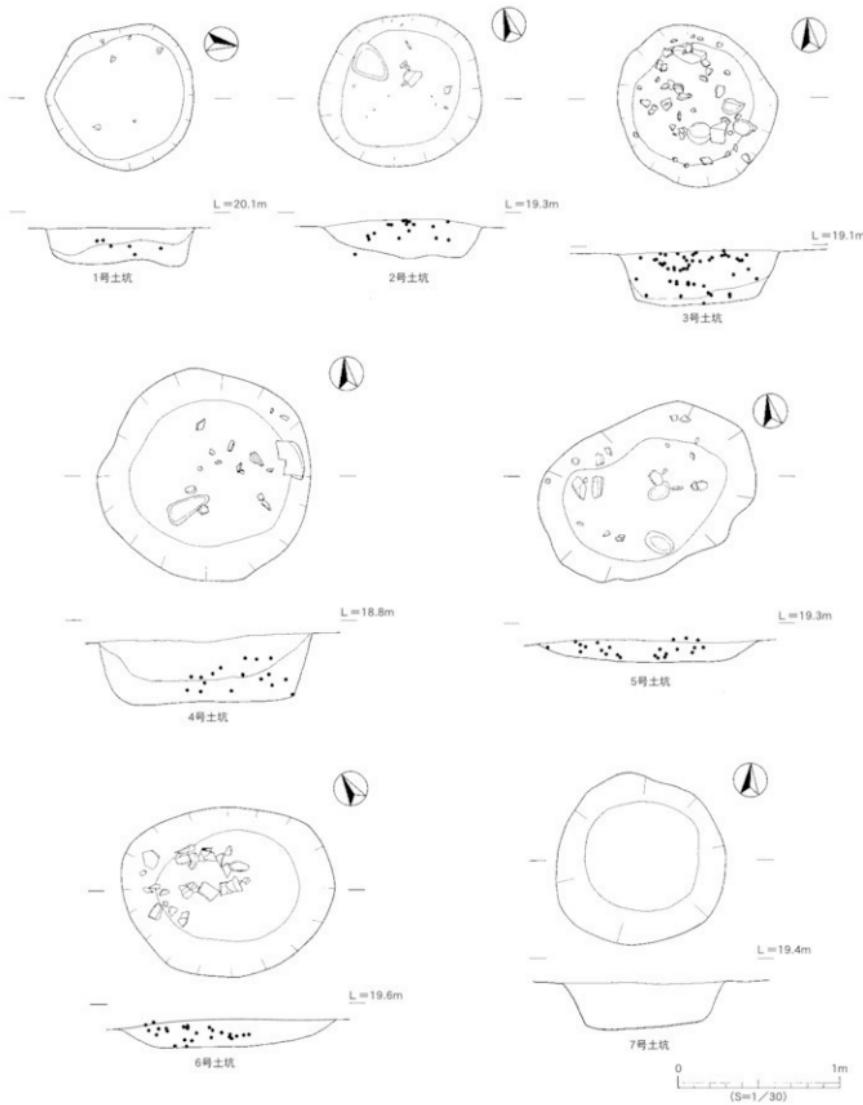
A~10区で検出した。平面形は円形で、直径は約1mである。埋土は2枚に分層できた。土器片45点、石器3点が埋土内から出土した。7~11が出土遺物である。7~11は深鉢形土器の口縁部で、包含層遺物のC, D 1・2類に該当する。12は深鉢形土器の底部である。13~14は精製の浅鉢形土器口縁部である。F 6類に該当する。15は磨石である。

## 4号土坑（第12図、第15図16・17）

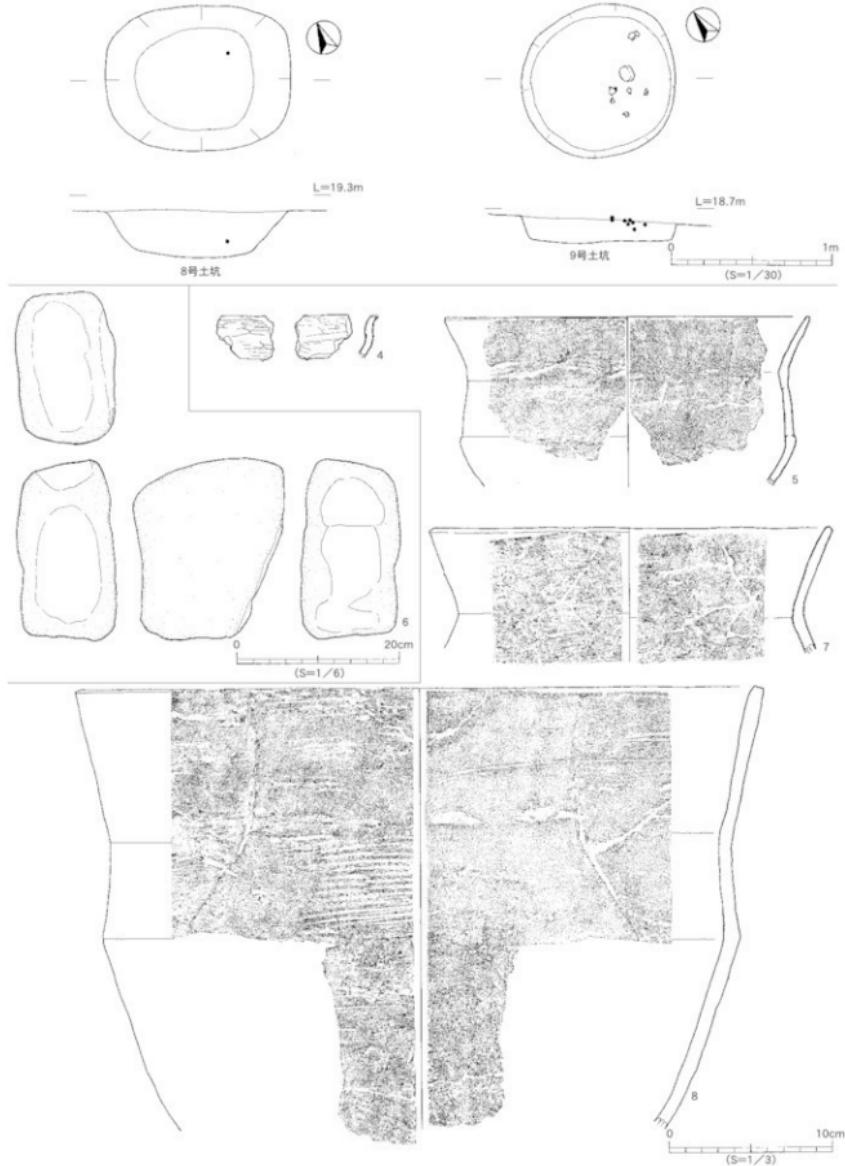
A・B~8区で検出した。平面形は円形で、直径は約1.3mである。埋土は2枚に分層できた。土器片14点と石器等3点が埋土内から出土した。16・17が出土遺物である。16は精製の浅鉢形土器でF 4類に該当する。17は砥石で1面のみ作業面が確認できる。



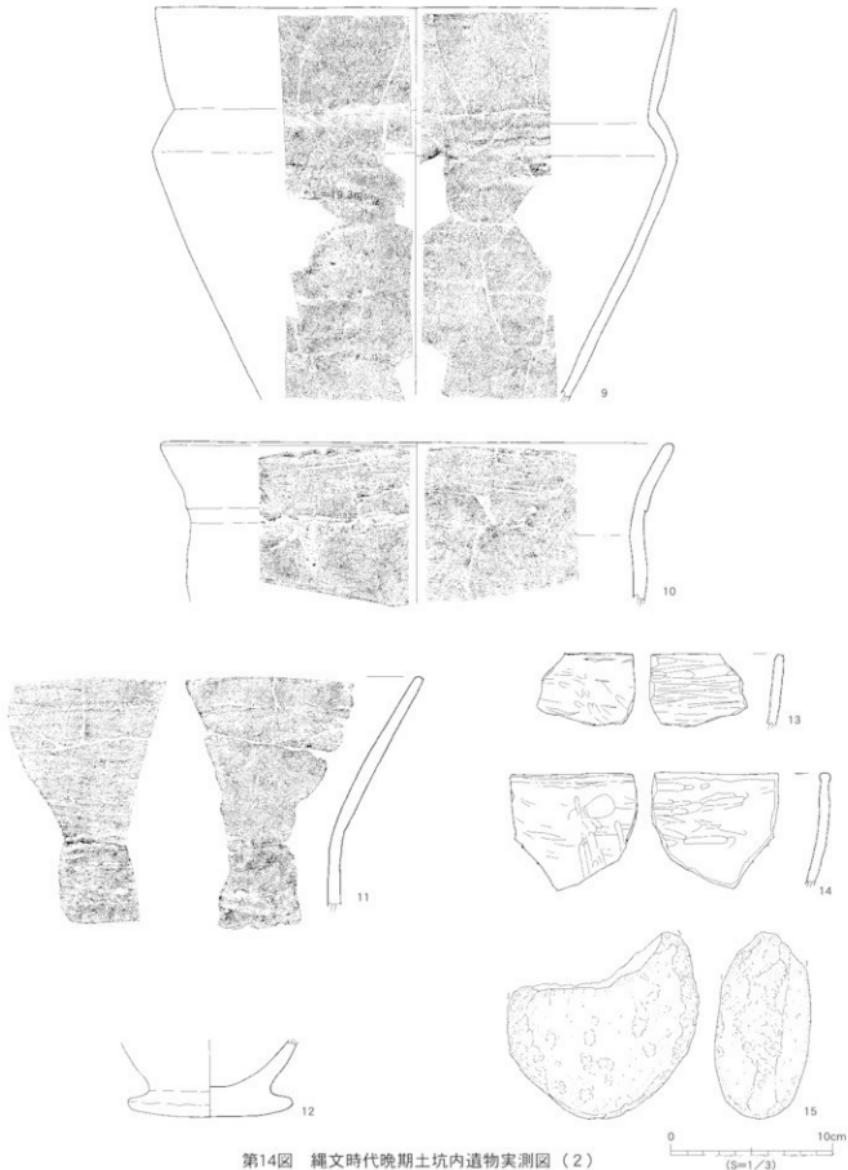
第11図 V層調査範囲及び遺構配置図



第12図 V層検出縄文時代晩期土坑実測図（1）



第13図 V層検出縄文時代晩期土坑実測図（2）及び土坑内遺物実測図（1）



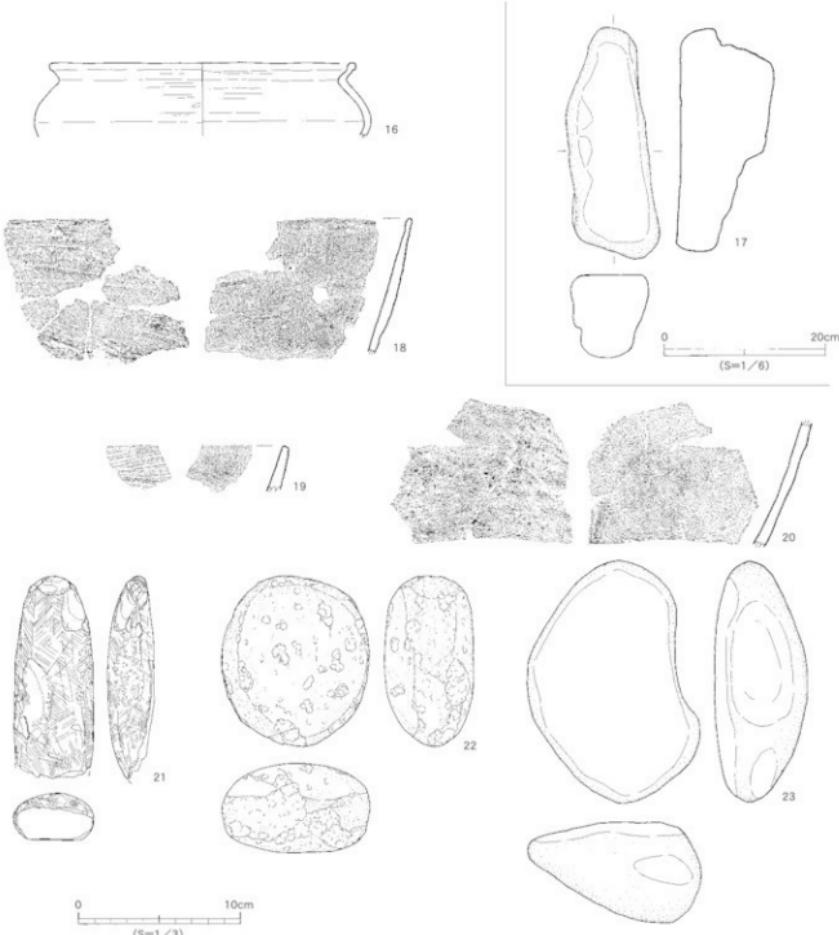
第14図 繩文時代晩期土坑内遺物実測図（2）

5号土坑（第12図、第15図18～23）

B-10区で検出した。平面形は楕円形で、長径約1.4m、短径約1mである。土器片15点と石器・剥片・礫6点が埋土内から出土した。18-23が出土遺物である。18・19は深鉢形土器の口縁部で、18はD4類に該当する。20は深鉢胴部である。21はホルンフェルスの磨製石斧である。22・23は磨石である。

6号土坑（第12図、第16図24～26）

C-10区で検出した。平面形は楕円形で、長径約1.3m、短径約1mである。土器片25点、礫1点が埋土内から出土した。土器片は口縁部・底部の占める割合が多い。24-26が出土遺物である。24は口縁部から胴部下位までの破片、25は口縁部から底部までの破片で後元ができる。いずれも口縁部が肥厚する特徴があり、包含層遺物のD1類に該当する。26は粗製の浅鉢底部である。



第15図 繩文時代晩期土坑内遺物実測図（3）

#### 7号土坑（第12図）

D-8区で検出した。平面形は円形で、直径は約1.1mである。遺物は埋土内から出土しなかった。

#### 8号土坑（第13図）

D-8区で検出した。平面形は梢円形で、長径約1.2m、短径約0.9mである。胴部土器片1点が埋土内から出土した。

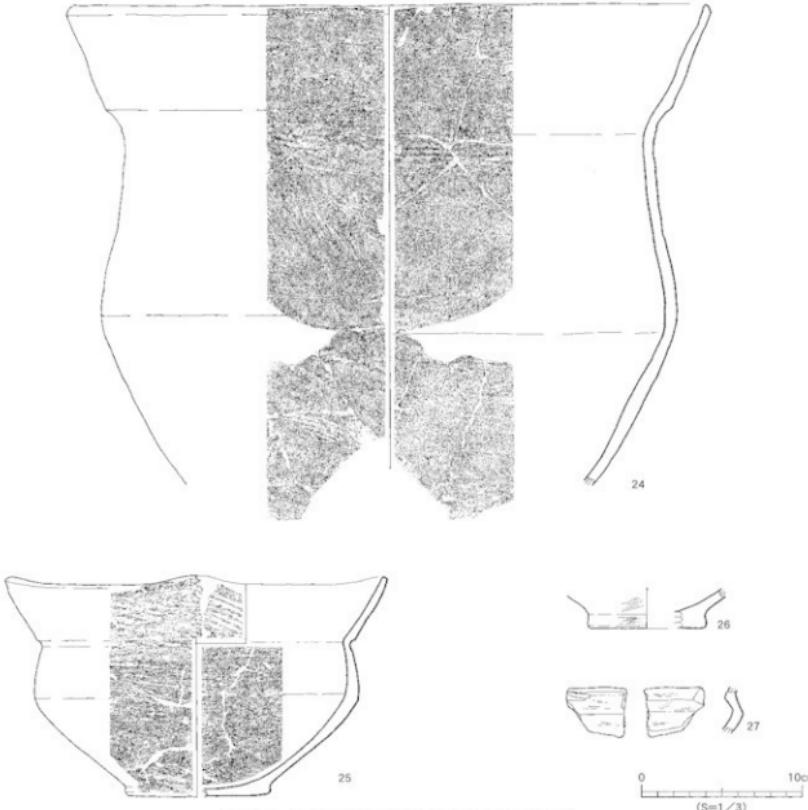
#### 9号土坑（第13図、第16図27）

F-6区で検出した。平面形は円形で、直径は約1mである。土器片6点・石器1点が埋土内から出土した。27が出土土器で浅鉢胴部片である。

#### イ 埋設土器（第17図28）

D-9区V層で検出した。頸部から上位は削平によつて欠損し、やや上下に潰れた状態であった。土器周囲の検出面でのプラン、断面での掘込みは確認できなかった。また、土器内部の土壤においても、肉眼での観察ではV層との違いを見いだすことができなかつた。そのため、遺構の用途を明らかにする目的で土壤分析を試みた。その結果リン・カルシウムを多く含まないことが明らかになつた。詳細については、第5章自然科学分析の第5節を参照されたい。

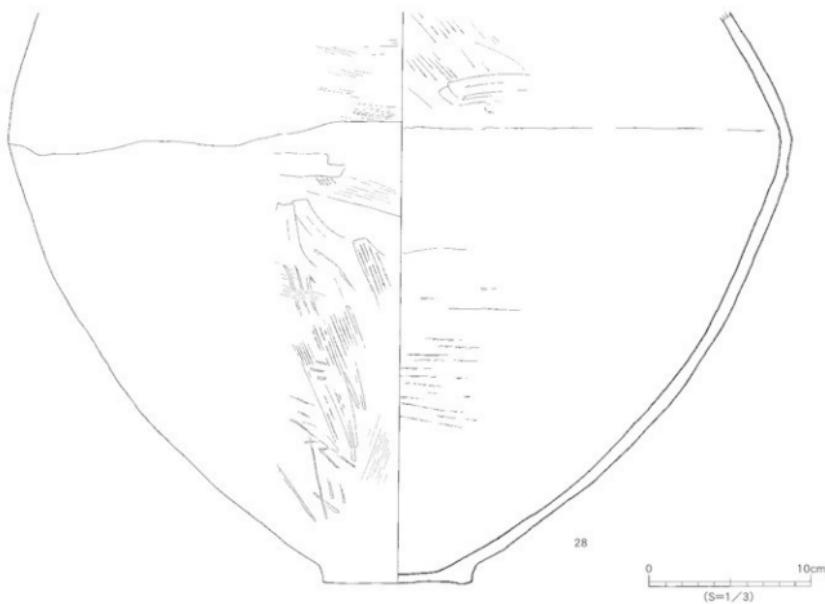
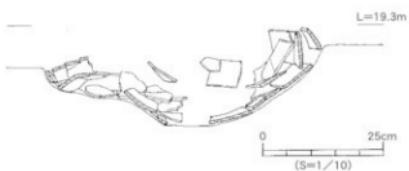
28の深鉢は復元を試みたものである。大きさは胴部最大径が約50cm、底部直径が約9cmである。底部の打ち欠きは見られない。D1類ないしD2類に属すると考えられる。



第16図 繩文時代晩期土坑内遺物実測図（4）



埋設土器半截状況



第17図 繩文時代晩期埋設土器検出状況図及び土器実測図

(3) 遺物

ア 土器

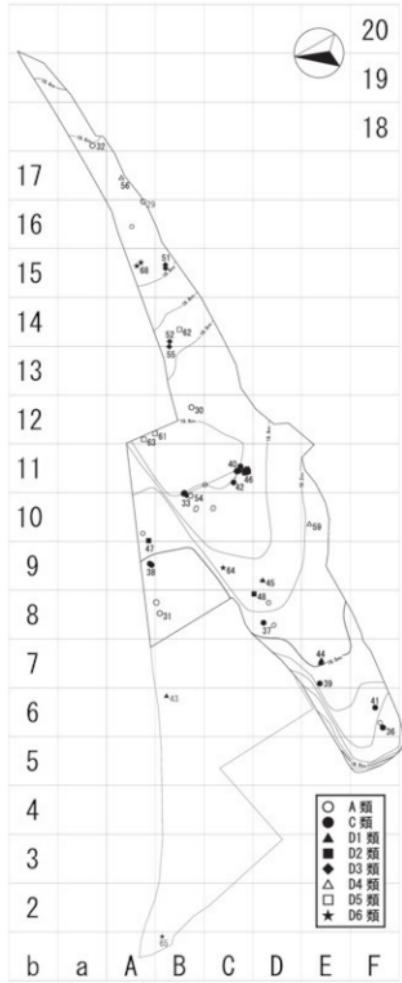
概要

縄文時代晩期に属する土器は、平成21年度の調査区全域と平成19年度の調査範囲の一部で出土し、A～F類の6つに分類した。それぞれの類別の出土状況は第18・27図である。D類（粗製土器）は深鉢・鉢、E類（半粗半

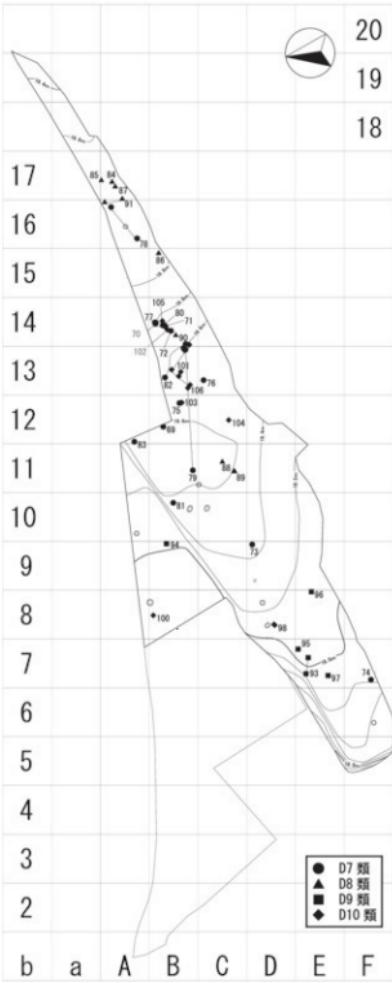
精製土器）は鉢、F類（精製土器）は浅鉢からなり、それぞれの類の中において器形などの特徴から細分を試みた。内容については各項目で詳述していくこととする。

A類（第19図29～33）

口縁部が肥厚して内窵し、数条の沈線・凹線を巡らすものを一括した。総数で17点出土し、そのうち5点を図



第18図 縄文時代晩期土器出土状況（1）



化した。29は、内弯する口縁部の外面に凹線が2条施される。30~33は、口縁部外面に沈線が数条施されている。30は、内外面にミガキが明瞭に確認できる。32は、破断面で口縁部下位の屈曲部の接合痕が明瞭に確認できる。

#### B類（第19図34）

口縁部が内弯し、数条の沈線が巡るものである。総数で4点出土し、そのうち1点を図化した。34は、器壁が薄く、内外面はミガキの調整が入る。口縁部外面に沈線による文様があり、赤色顔料の残存が確認できる。

#### C類（第19図35~第20図42）

口縁部が肥厚し、外に開くものである。また、口縁部下位に段を有する。総数で20点出土し、そのうち8点を図化した。35は、やや内弯する口縁部の外面に沈線が施される。36~38は、外傾する口縁部をもつ。38は、横位の沈線が不規則に施される。39は、波状口縁を呈し、波頂部へ向かうように沈線が施されている。40は、口縁部の下端に段を有し、やや膨らむ胴部へ至る。41は、貝

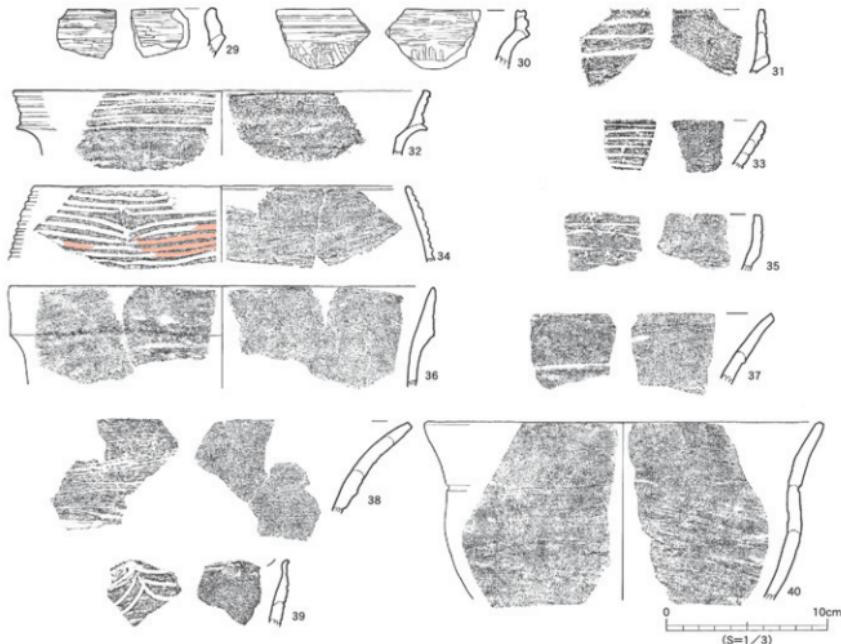
殻条痕の残る口縁部の下端に段を有し、強く屈曲する胴部へ至る。42は、外反する口縁部の下端に段を有する。

#### D 1類（第20図43~45）

口縁部が肥厚せずに外傾し、胴部が屈曲するものを一括した。総数で18点出土し、そのうち3点を図化した。43は、貝殻条痕の残る口縁部が外傾し、胴部で屈曲する。44は、口縁部上位が欠損のため不明であるが、口縁部下位から胴部まで外面全面に貝殻条痕が残り、胴部でやや屈曲する。45は、頸部から胴部の破片である。胴部上位は、ナデの調整で貝殻条痕が残らない。胴部の強い屈曲部より下位の胴部に丁寧な貝殻条痕が確認できる。

#### D 2類（第21図46~50）

口縁部が緩やかに外反し、胴部が膨らむものを一括した。総数で68点出土し、そのうち5点を図化した。46は、底部の形状が欠損のため不明であるが、外面全面に貝殻条痕が見られる。一部ナデも見られるが、極めて調整は粗い。また、胴部内部にも貝殻条痕が残る。47は、不規

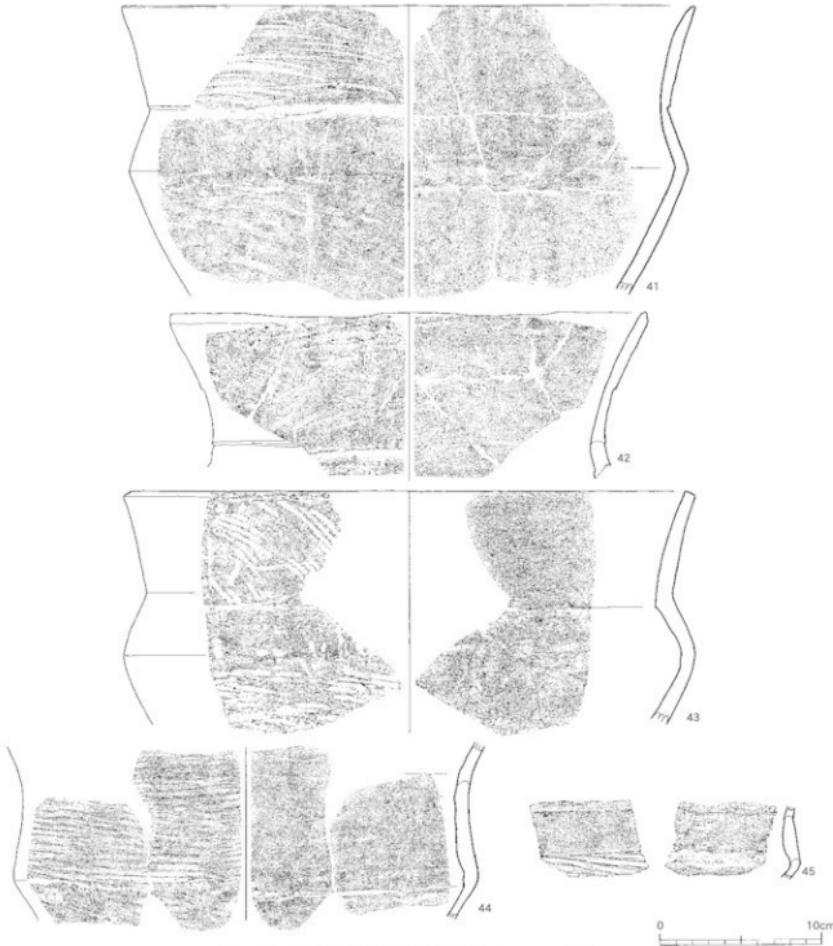


第19図 繩文時代晩期土器実測図（A～C類）

則に交差する貝殻条痕が口縁部外面に残る。器壁は厚く、平たい口唇部をもつ。48は、口縁部外面をナデで調整しているが、若干の貝殻条痕が残る。器壁は厚く、口唇部の断面雖は丸みを帯びる。49・50は、内外面共にナデ調整が不完全で、全面にわたって貝殻条痕が残る。49は、口唇部の形成が丁寧でない。50は、口唇部に対して交差する方向に二枚貝でナデたと思われる貝殻条痕が残る。

#### D 3 類 (第22図51~55)

口縁部が直行し、胴部は僅かに屈曲するものを一括した。総数で13点出土し、そのうち5点を図化した。51・52は、口縁部内外面に貝殻条痕が残る。その口縁部下端で小さく屈曲し、底部へ向かう。53~55は、内外共にナデ調整が施される。口縁部下端で小さく屈曲し、底部へ向かう。器高はやや低いと思われる。55は、平たい口唇部をもつ。



第20図 繩文時代晩期土器実測図 (C ~ D 1 類)

D 4 類 (第22図56~60)

口縁部が直行ないし僅かに内弯するものを一括した。総数で61点出土し、そのうち5点を図化した。56・58は、直行する口縁部をもつ。56・57は、内面に若干貝殻条痕を残す。57は、平らな口唇部をもち、58は、薄く尖る口唇部をもつ。59・60はやや内弯する口縁部をもつ。59は厚い器面の内面に、60は、薄い器面の外面上に、若干の貝殻条痕が残る。

D 5 類 (第22図61~63)

口径が胴屈曲部径より小さい鉢形を一括した。総数で7点出土し、そのうち3点を図化した。61は、内傾した口縁部の下端で強く屈曲する。62・63は、外反しつも内傾する口縁部をもつ。62は、胴部屈曲が強く、63は、緩やかに屈曲し、内面に炭化物の付着がある。

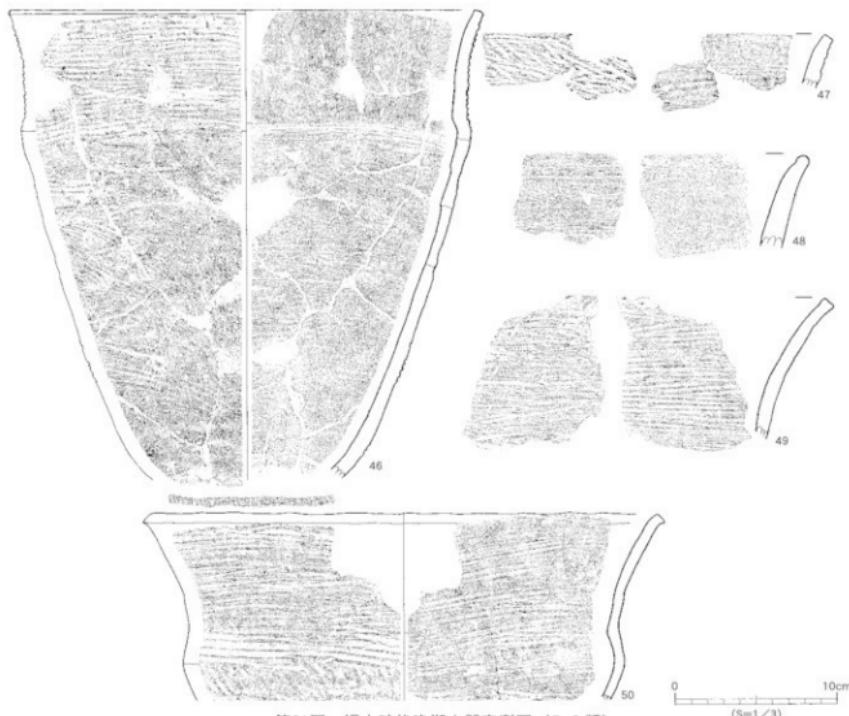
D 6 類 (第22図64~第23図68)

口縁部上端を肥厚させたものを一括した。総数で58点

出土し、そのうち5点を図化した。64~66は、外反する口縁部をもつ。64は、口唇部近くが約8mmの幅で肥厚する。65・66は、口縁部の上端が約20mmの幅で肥厚する。66は、口縁部下端で屈曲し胴部へ至る。67は、内傾する口縁部の上端が24mmの幅で肥厚し、その部分に1条の沈線が巡る。68は、直立する口縁部の上端が21mmの幅で肥厚する。また、内面に貝殻条痕が明瞭に残る。

D 7 類 (第23図69~第24図83)

口縁部下位及び胴部屈曲部に2条の刻目突帯を有するものを一括した。総数で35点出土し、そのうち15点を図化した。69~75は、外傾する口縁部が屈曲せず胴部に至る器形をもつ。69・70は、口縁部下位に上下2条の刻目突帯が巡る。71は、2条の突帯が口縁部外面を単純に巡るのではなく、横長の方形の文様を構成する。72は、ヘ



第21図 繩文時代晩期土器実測図 (D 2 類)



第22図 縄文時代晩期土器実測図 (D 3～D 6 類)

ラの側面で突帯に深い刻みを入れている。73・74は、外面に条痕が残り、73の突帯は、下から上へ押し上げるように刻みを入れたため突帯の頂部が波形を描く。75は、刻目突帯に2条の沈線による山形文を組み合わせている。76～83は、内傾する口縁部をもち、屈曲して胴部に至る器形を呈する。76～78は、口縁部下端で強く屈曲する。上下2条の刻目突帯が巡り、下の突帯は屈曲部のところに巡る。79・80は、口縁部下端で屈曲せずに緩く胴部が膨らむ器形をもつ。2条の刻目突帯が横長の方形の文様を構成する。さらに方形の文様内に沈線による山形文を組み合わせている。80は、右上に刺突のある浮文が施され、すぐ近くに補修孔も穿たれている。81・82は、無刻突帯が2条施されている。82は、突帯の間に沈線による山形文を組み合わせている。83は、2条の沈線に巻き貝の殻頂部を使って刻みを入れている。

#### D 8類（第25図84～92）

D 1～D 7類に属しない口縁部をもつものを一括した。総数で16点出土し、そのうち9点を図化した。84～88は口縁部に突起があるものである。84～86は、リボン状突起が付く。なかでも85・86は、口縁部を肥厚させている。

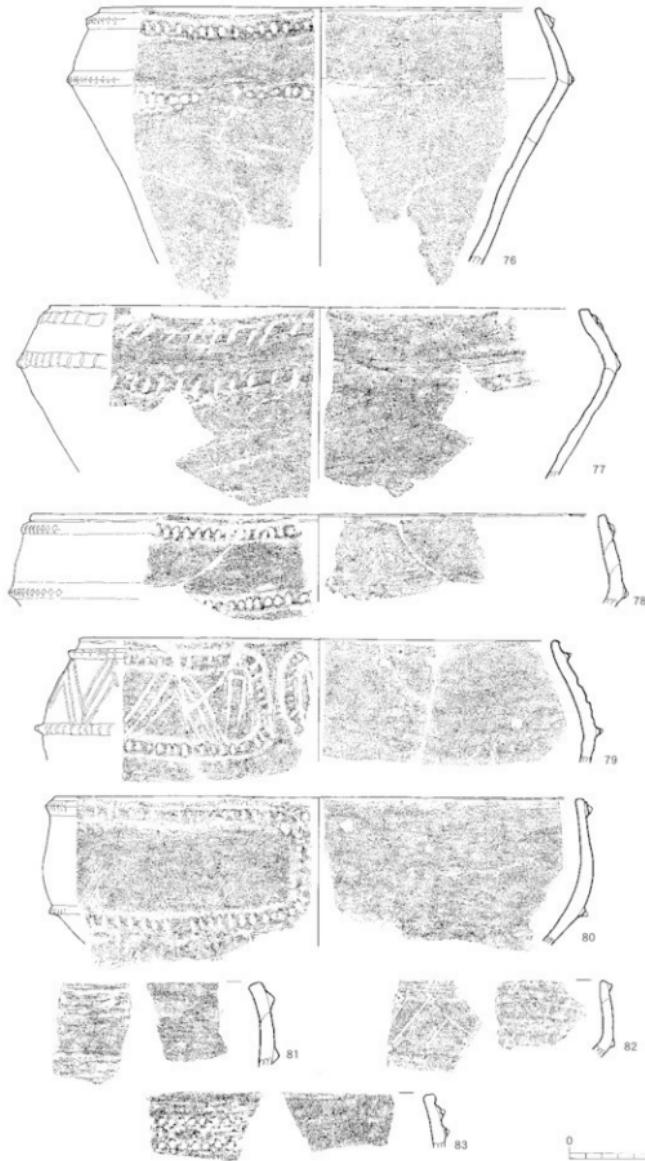
87は、口縁部を肥厚させ、山形の突起が付く。88は、口縁部より厚みのある横長の方形状の突起が付く。89は、波状口縁で、口縁部を肥厚させている。口縁部下端外面に段を有し、その段の位置にリボン状突起を付けている。器形は、緩やかな「S」字カーブで口縁部から底部に至る。90は、外反する波状口縁で、波頂部に1か所「U」字の刻みが入る。91は、大きく外傾した口縁部であることから粗製の浅鉢の可能性がある。焼成後に穿たれた補修孔が確認できる。92は、外傾する口縁部で口唇部が薄く作られている。その口縁部に外面から内面方向に押し込まれているところがある。その場所は、上面體で口唇部が内側に弯曲するのが確認できる。

#### 胴部片（D 9類）（第25図93～97）

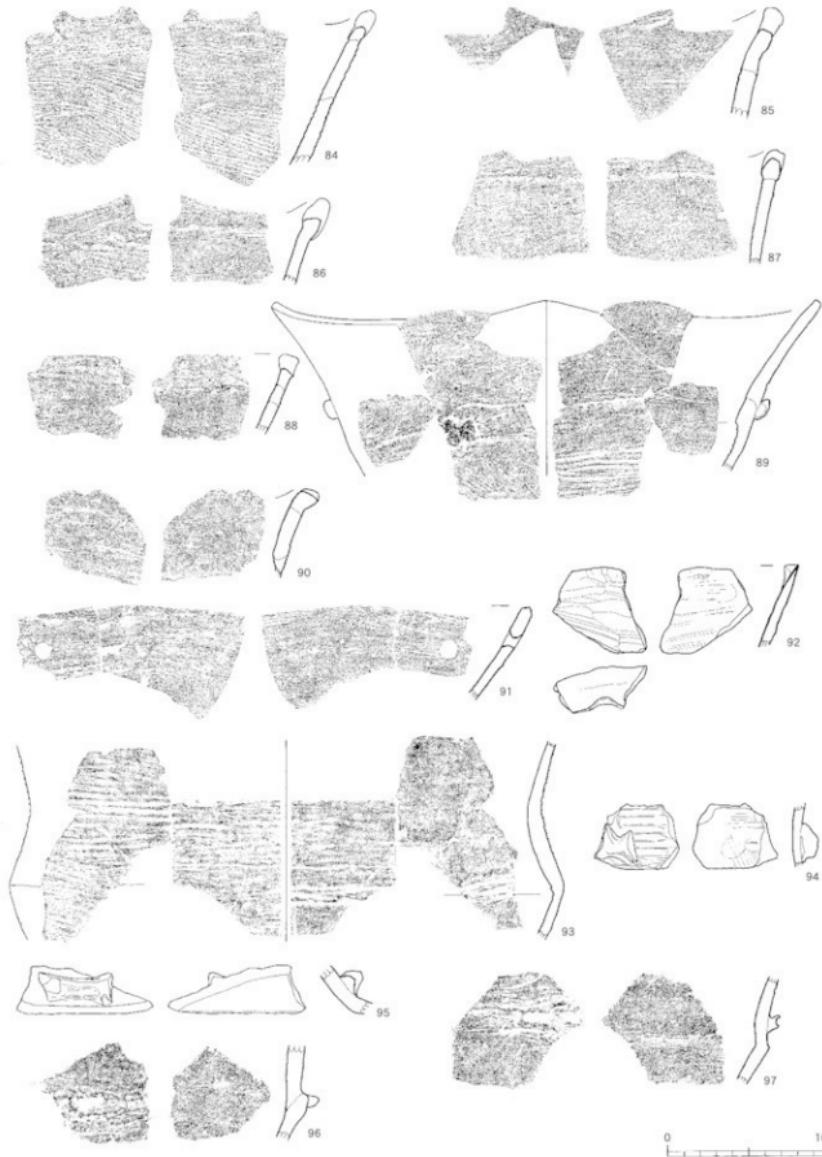
胴部片を一括した。総数で12点出土し、そのうち5点を図化した。93は、外面に貝殻条痕の残る胴部片で、屈曲が見られる。口縁部の特徴は不明であるが、D 1類に属する可能性がある。94・95は、胴部が括れているところにリボン状突起が付く。94のリボン状突起は左右対称でなく、左が大きい。96・97は、不規則な突帯状の突起が付く。96は、屈曲部に段を作り、そこに突起が付く。



第23図 繩文時代晩期土器実測図（D 6・D 7類）



第24図 繩文時代晩期土器実測図 (D 7類)

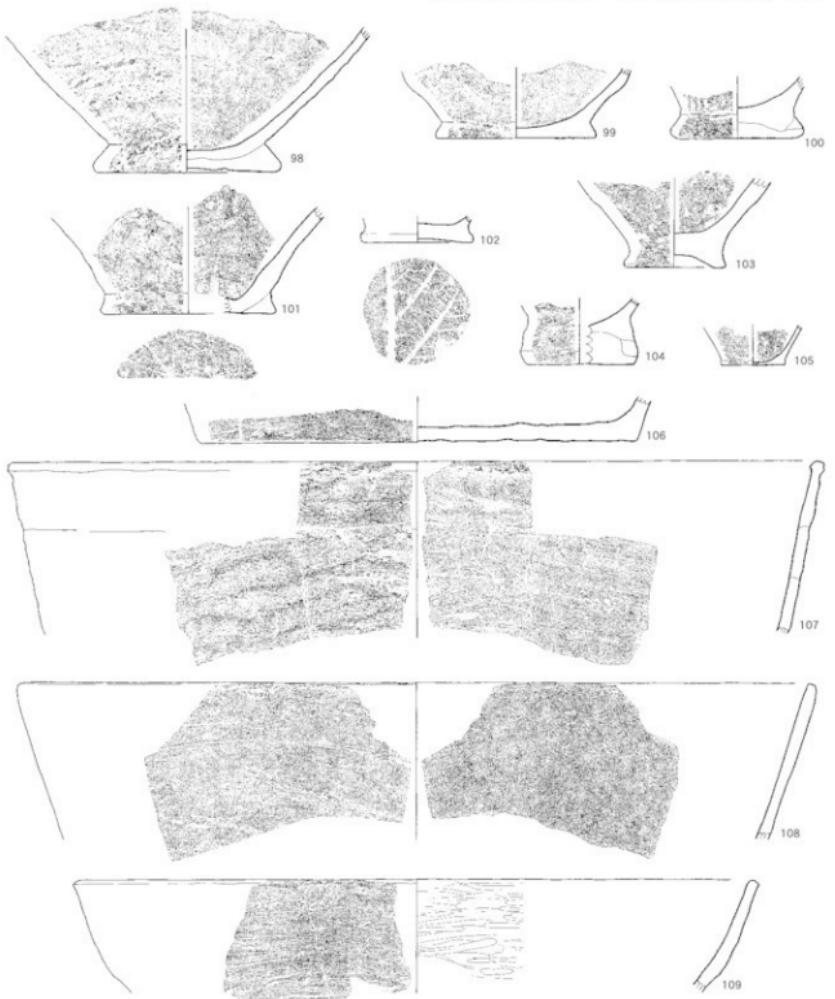


第25図 繩文時代晩期土器実測図 (D 8・D 9類)

突起の断面は丸い。97は、屈曲部より上位の上縁部に粘土紐が貼り付く。それをつまみ上げるような成型で、突起中央が凹み、上端が上方を向く断面が成了ったと思われる。

底部片（D10類）（第26図98～106）

底部片を一括した。総数で54点出土し、そのうち9点を図化した。98～102は、平底で底部外縁が外へ開くものである。101・102は、葉脈の圧痕が底に見られる。103は、上げ底で、104は、充実高台である。105は、器壁が薄く、外縁が外に開かない平底の底部で、器形が小さい。



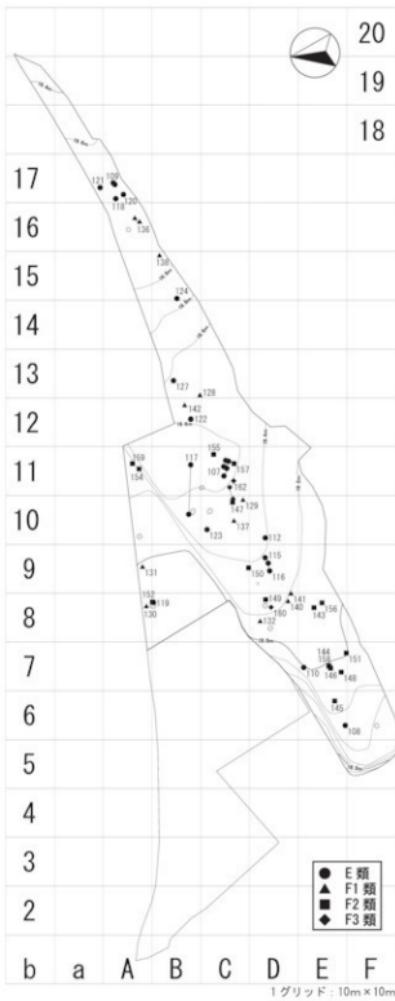
第26図 縄文時代晩期土器実測図（D10類，E類）

0 10cm  
(S=1/3)

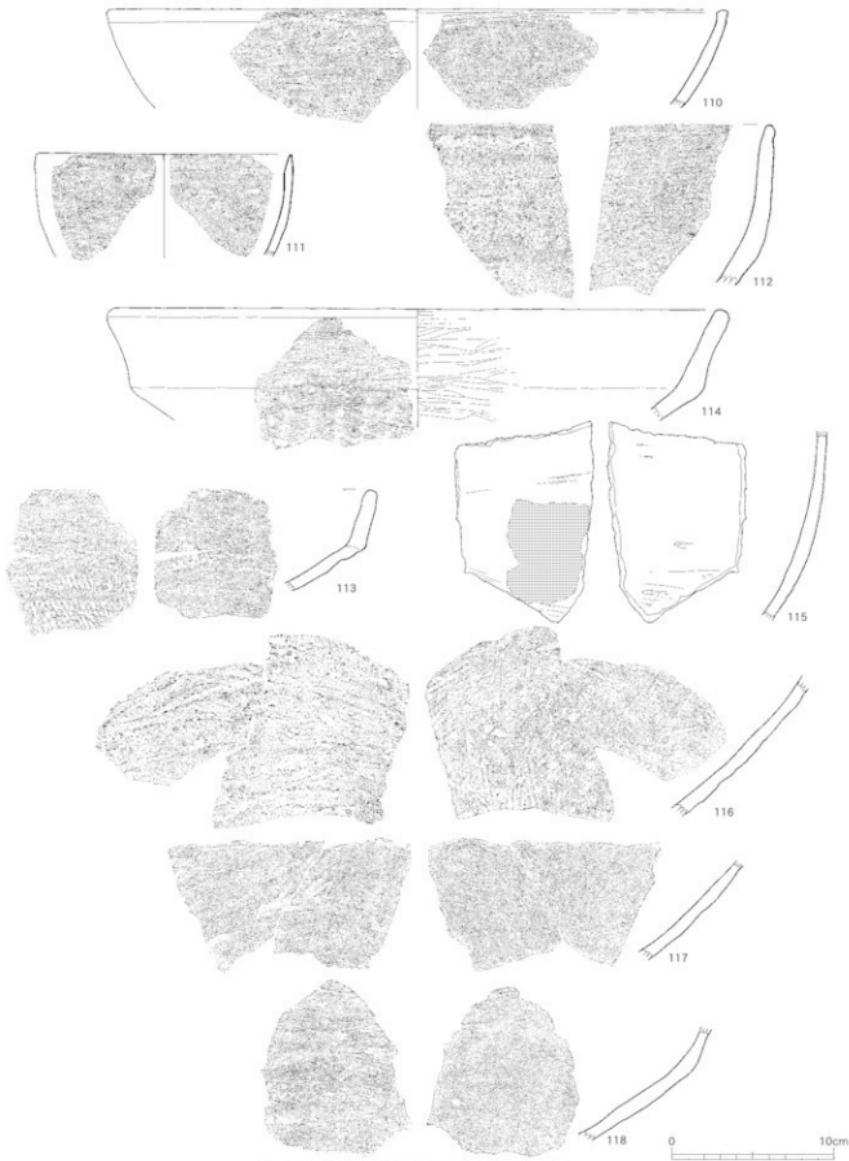
106は、直径約28cmの平底である。類例がなく、器形を推測できない。

#### E類（第26図107～第29図127）

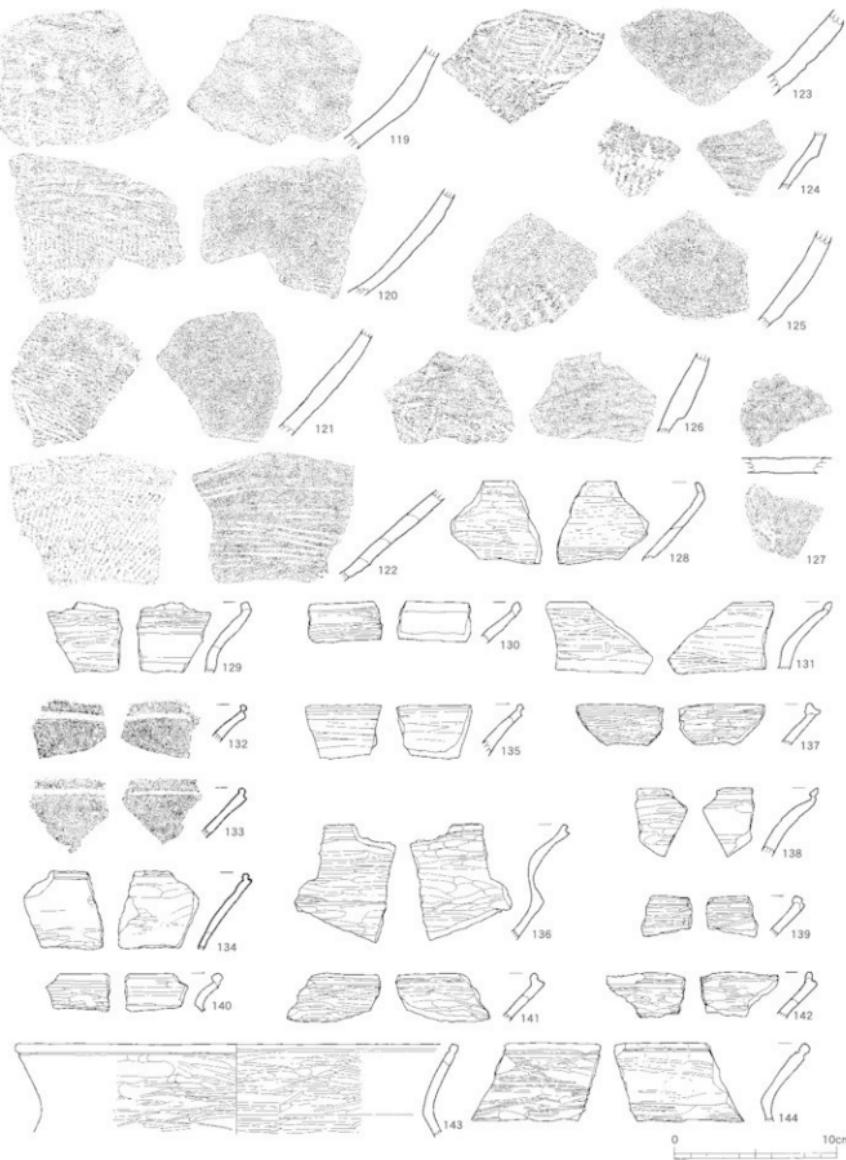
該期の土器群のうち内面にミガキを施し、外面に条痕やナデなどが施されるものを半粗半精製土器として位置づけ、E類とした。出土状況は第27図に示す。その範囲で主に出土し、総数51点であった。そのうち21点を図化した。107～110は、直径が30cmを越える大型の器形をもつ。口縁部から屈曲せずに胴部へ至る。107は、粗い作りであるが、玉縁口縁のように仕上げられている。また外傾も弱く、他に比べ器形が高いと思われる。110は、口縁部内面上端が内に反る。111は、小型の器形をもつ。112～114は、口縁部から屈曲して胴部に至る器形をもつ。112は、緩やかに屈曲するタイプである。113・114は、112に比べ屈曲が明瞭である。また、屈曲部下位に組織痕をもつ。113は粗い織りの布目、114は、編布圧痕が確認できる。115～119は胴部片である。115～117は、屈曲部を確認できない。115は、外面に炭化物が約2mmの厚さで付着している。116の内面は、貝殻条痕後に丁寧なナデの調整を施し、極めて平滑に仕上げてある。117の内面は、貝殻条痕後にミガキを施している。118・119は、器面に僅かであるが屈曲が確認できる。119は、指頭圧痕と思われる窪みが複数確認できる。また、指頭と異なる不可解な窪みも複数確認できる。120の外側は、上位が横ナデ、下位に布目が付く。内面は平滑にミガキが入る。121・122は、粗い織りの布目の圧痕が確認できる。122は、4本の粘土紐が積まれていることが外面の観察から確認できる。また、内面はミガキが入るが、貝殻条痕が明瞭に残る。123は、編布圧痕が確認できる。124は、外面の器面調整が行われていない粗い胴部片である。外面全体に粘土のしわが入る。ただし、外面に段を有し、その段の下位に布があてられていたのではないかと思われる組織痕が僅かに確認できる。内面はヘラナデが粗に入る。125は、内外面共に風化が激しく、器面調整は不明である。しかし、外面の下位に斜位連続する編布圧痕が確認できるのでここに掲載した。126は、外面に段を有し、その下位に物の特定はできないが圧痕が確認できるのでここに掲載した。127は、外面に非常に細かく編まれた布目が確認できる。詳細については、第5章自然科学分析の第8節で述べているので参照されたい。



第27図 繩文時代晩期土器出土状況（2）



第28図 繩文時代晩期土器実測図 (E類)



第29図 繩文時代晩期土器実測図（E類，F1・F2類）

## F類

該期の土器群のうち精製土器をF類とした。さらに口縁部・胴部等の特徴からF 1～F 8類に細分した。それぞれの類別の出土状況は第27・30図である。

### F 1類（第29図128～142）

口縁部が短く直立し、胴部が屈曲して底部に至るものの一括した。総数で35点出土し、そのうち15点を図化した。128～131は、外傾する口縁部の上部が屈曲し、短く直立する。130は、外面調整がミガキであるが、内面調整は風化のために不明である。131は、内外面の色調が明赤褐色を呈し、化粧土の可能性がある。132～141は、外傾する口縁部の口唇部近くにおいて内外面に1条の沈線が施される。そのため玉縁状の口縁部を呈する。136は、口縁部が緩やかに外反する。また、胴部が強く屈曲し、器壁の厚さに大きな変化が見られる。142は、口縁部外面に1条の沈線が施され、玉縁状の口縁部を呈する。

### F 2類（第29図143～第31図159）

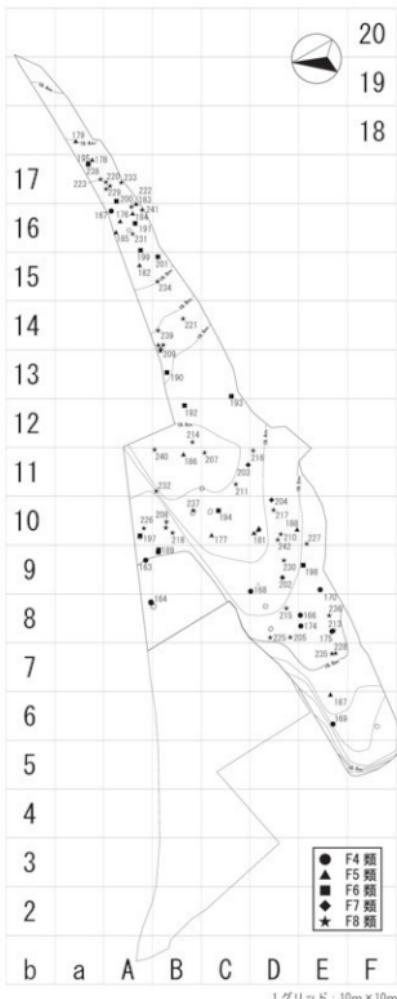
口縁部内外面に1条の沈線が施され、玉縁状の口縁部を呈する。口縁部は頸部まで緩やかに外反し、屈曲して底部に至るものの一括した。総数で74点出土し、そのうち17点を図化した。143～150は、器壁がやや厚く、内外面に巡る1条の沈線が口唇部からさほど離れていない位置で施されている。そのため玉縁状の口縁部断面が正方形もしくは円形に近い。148は、胎土のきめが細かく、砂粒がほとんど含まれない。151～156は、内外面に巡る1条の沈線が口唇部からやや離れている位置で施されている。そのため玉縁状の口縁部断面が梢円形に近い。152・154は、他の資料と比べ器高が低い。155・156は、器壁は薄く、156は口縁部下位外面に段を有する。157は、内外面に施される1条の沈線の位置にずれがあるため口縁部断面が「S」字形になる。また、胎土のきめが細かく、砂粒がほとんど含まれない。158は、口縁部内面のみに沈線が巡る。159は、器壁が厚く、器面で砂粒を多く確認できる。

### F 3類（第32図160～162）

口縁部内外面に1条の沈線が施され、玉縁状の口縁部を呈する。また、口径より胴部径が大きく、胴部が強く屈曲するものを一括した。総数で7点出土し、そのうち3点を図化した。160は、上胴部がやや膨らむ。161は、玉縁状の口縁部がやや直立する。162は、口縁部の内面にミガキが確認できるが、頸部以下の内面は、粗いナデで調整が済まされている。

### F 4類（第32図163～175）

口縁部内外面に1条の沈線が施され、玉縁状の口縁部



第30図 繩文時代晩期土器出土状況（3）

を呈する。また、口縁・頸部の間が短く、口径より胴部径が大きい。胴部の屈曲は丸みを帯びる程度で、F 3類のように強く屈曲しないものを一括した。総数で86点出土し、そのうち13点を図化した。163～168は、器壁は厚く、大きな玉縁状の口縁部をもつ。164の外面調整は、ミガキと考えられるが、剥落が激しく断定できない。167は、非常に短い口縁部をもつ。また、内面の風化が激しい。168は、口縁部の形状に変化が見られることから突起を有する可能性がある。169～175は器壁が薄く、小さな玉縁状の口縁部をもつ。170・171の外面調整は、ミガキと考えられるが、風化で表面が荒れているため断定できない。174・175は、短い口縁部に明瞭な沈線が巡るため凹凸の変化が激しい玉縁状の口縁部を有する。

#### F 5 類（第32図176～第33図188）

口縁部が内寄気味に立ち上がり、胴部が外反する流水形の器形を呈する。胴部は屈曲しないタイプも存在する。底部は、立ち上がりが丸みを呈する平底である。波状口縁が大半を占め、赤色顔料が残存する沈線が口縁部、胴部屈曲部、底部近くに巡る。また、リボン状突起・ヒレ状突起が付く資料が多い。総数で17点出土し、そのうち

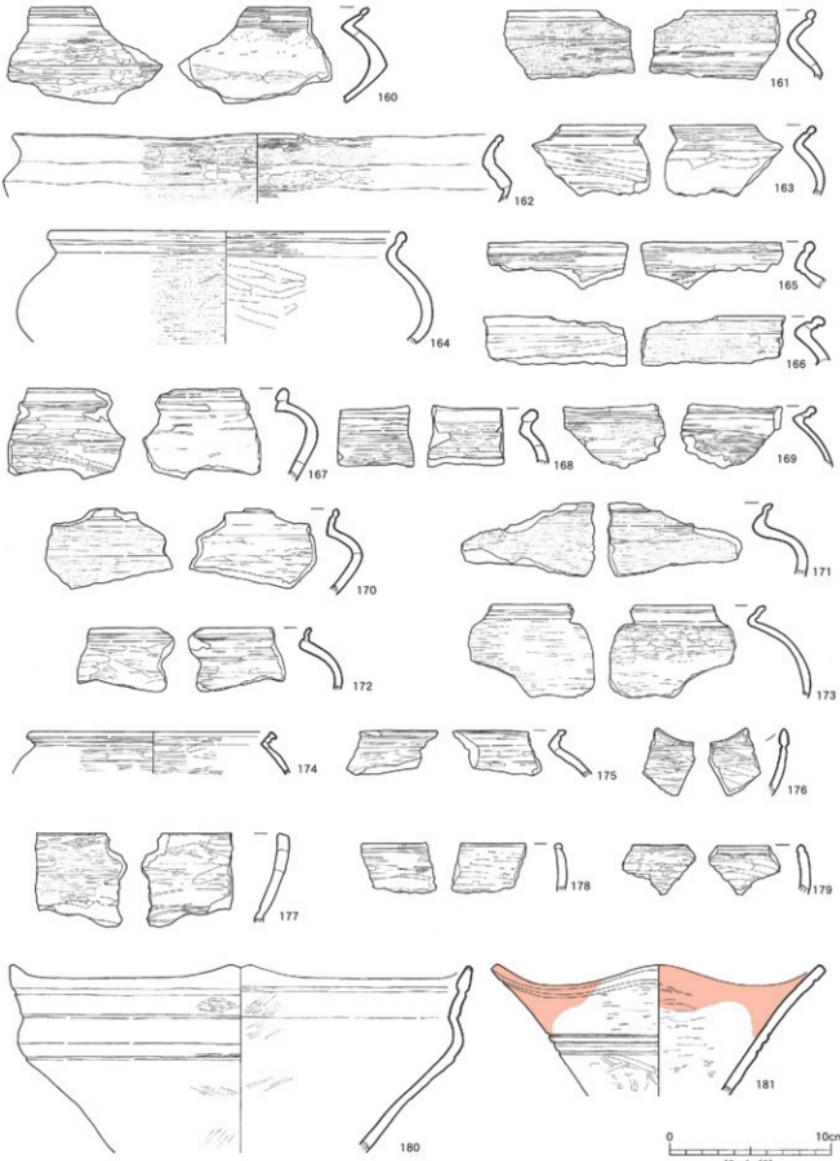
13点を図化した。176～179は口縁部破片である。176は、リボン状の突起が口縁部に付く。180は、胴部が外反する流水形の器形を呈するタイプである。器面は粗れているために調整方法の断定はできない。181は、胴部が屈曲しないタイプである。内外面に赤色顔料の付着が広く確認できる。182～185は胴部破片である。いずれも沈線が施されている。182・183は、沈線に赤色顔料を確認した。185は、沈線の施されている位置から底部近くの破片と思われる。186～188は底部もしくは底部付近の破片である。187は、外面に段を有する。その他は沈線が施されている。

#### F 6 類（第33図189～201）

器高が低く、胴部などに屈曲がないものを一括した。総数で54点出土し、そのうち13点を図化した。189～193は、口縁部に沈線がない。190・191は、口縁部が僅かに内寄し、直立気味である。194は、口縁部内面に浅い沈線が見られる。195は、口縁部外面に沈線が見られる。196～199は、口縁部外面に明瞭な沈線が巡り、玉縁状の口縁部を呈する。200は、口縁部内外面にごく浅い凹線が見られる。201は、外面の調整が粗く、凹凸が確認できる。



第31図 繩文時代晩期土器実測図（F 2類）



第32図 繩文時代晩期土器実測図 (F 3 ~ F 5類)

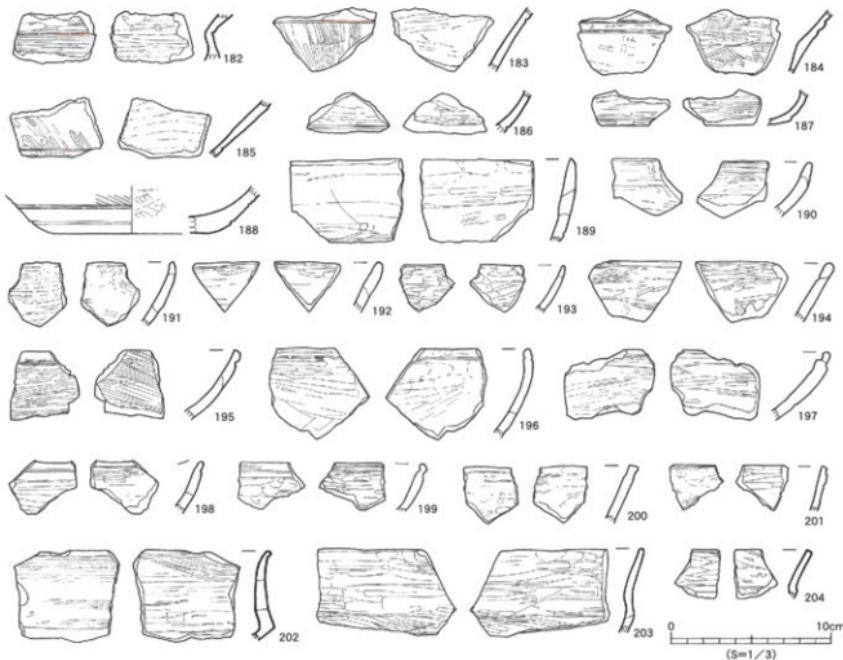
#### F 7類（第33図202～204）

外反する口縁部をもち、口縁部下位で屈曲し、底部に至るものを一括した。刻目突帯文土器が出現する時期の浅鉢である。総数で3点出土し、そのうち3点を図化した。202は、大きく外反する口縁部をもち、口縁部下位で強く屈曲する。203は、口縁部下位の屈曲が緩やかである。204は、203と同様の形態的特徴をもち、小型の器形をなすものと考えられる。

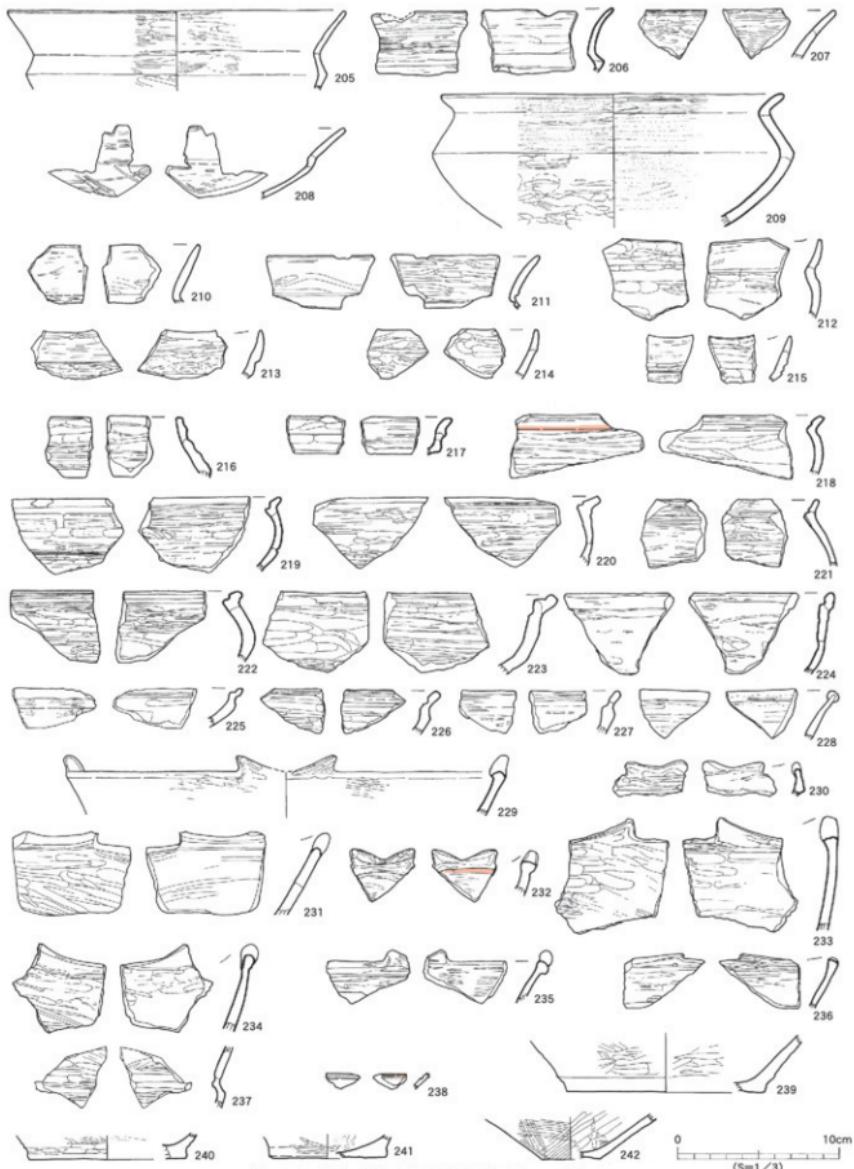
#### F 8類（第34図205～242）

分類を試みたが、F 1～F 7類に属させることができ困難だった口縁部及び胴部片と底部を一括した。205～208は、口縁部が外反し、胴部で屈曲する。器形はF 2類とほぼ同じであるが、口縁部に沈線が巡らないところに違いがある。208は、他と比べて器高が低い。209は、短い口縁部に胴部の強い屈曲をもつ。器形はF 3類とほぼ同じであるが、口縁部に沈線が巡らないところに違いがある。210と211は、外傾し、肥厚した口縁部をもつ。211は、口縁部下位外面に段を有する。212～214は、口縁部下位

に段を有する。215は、段の下位に1条の沈線が施されている。216・217は、口縁部外面に凹線が施されている。218～222は、短い口縁部に大きく膨らむ胴部をもつ。器形はF 4類とほぼ同じであるが、口縁部内面のみに沈線が施されている点で異なる。そのため玉縁状の口縁部ではない。218は、頸部に沿って約5mm幅の赤彩が確認できる。219は、胴部に1条の沈線が施される。220は、下胴部が肥厚し、外面に段を有する。223・224は、短い口縁部の内面に沈線が施されたマリ状の器形を想定する。225～227は、短い口縁部の内面に沈線が施され、口縁部外径より小さい胴部は屈曲する。228は、緩やかに外反する口縁部で、沈線による形成でない玉縁の口縁部をもつ。229～236は、口縁部にリボン状突起をもつものである。232は内面に赤彩が確認できる。237・238は胴部片である。237は、口縁部下位内面に沈線が施される。238は内面の沈線に赤色顔料の付着が確認できる。239～242は、底部である。239～241は、平底であるが、242は上げ底である。ただし、242については、形態的特徴から縄文時代後期土器の可能性を否定できない。



第33図 縄文時代晩期土器実測図（F 5～F 7類）



第34図 繩文時代晩期土器実測図 (F 8類)







## イ 石器

### 石鎌（第38図245～264）

70点が出土し、そのうち20点を図化した。245～247は、正三角形で、基部に顯著な抉りが見られない。248～254は、長身形で、基部に緩やかな抉りが見られる。255は、基部の明瞭な抉りを持つ。しかし、この抉りと先端の方向軸が一致せず、均整がとれてない。256は、両側が反るため中央横幅が細くなる。257～261は両側に突起もしくは屈曲を持つ。特に、257～259は抉りと脚部の作り出しから基部の正面観が「W」の字のようになっている。262～264は、石鎌の製作過程にあるものと想定した。262は、先端部の作り出しは十分であるが厚みがあり過ぎる。263・264は、先端部の作り出しが不十分であるため、使用に耐えられるとは思えない。

### 石匙（第38図265）

2点が出土し、そのうち1点を図化した。横広剥片の両面に粗い二次加工を施したもので、つまみ部の抉りは浅く、刃部がやや斜めに作られている。

### スクレイバー（第39図266）

2点が出土し、そのうち1点を図化した。大型の横長剥片に手を加えたもので、全幅10.8mmを図る。明確な刃部加工は認められないが、使用による剥離痕が下縁部に残される。

### 使用痕剥片（第39図267）

31点が出土し、そのうち1点を図化した。縦長剥片の上端を除く部分に微細な剥離が見られる。

### 二次加工剥片（第40図268～270）

112点が出土し、そのうち3点を図化した。いずれも刃器として有効であると考えられる。268は、外形が二等辺三角形で、すべての辺に正面からの押圧剥離が見られる。269も268と同様に正面からの押圧剥離が見られるが、外形が複形である。270は、左側に表裏からの交互の押圧剥離が施される。

### 石錐（第40図271）

2点が出土し、そのうち1点を図化した。厚みのある体部に短く小さい錐部が作出されている。

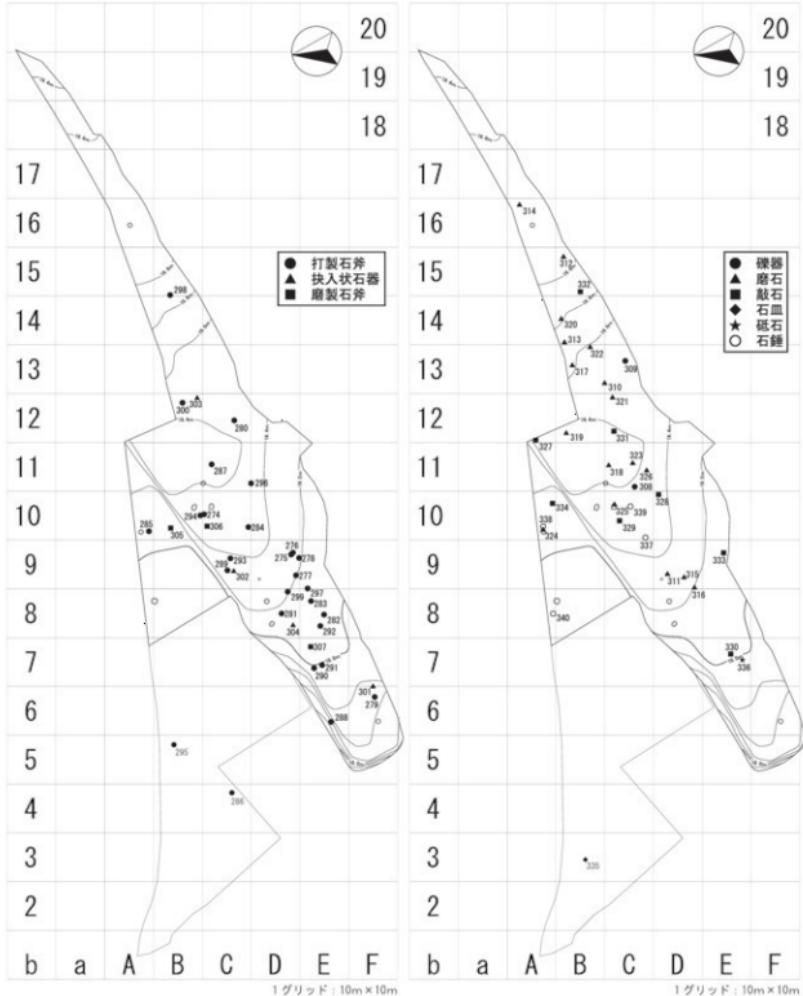
### 石核（第40図272・273）

145点が出土し、そのうち2点を図化した。272は、作業面を一定とせず、多方向から剥片を剥いでいる。273は、平坦な礫面を打面とし、左側縁、正面、右側縁部を作業面とし、連続して剥片を取り出している。

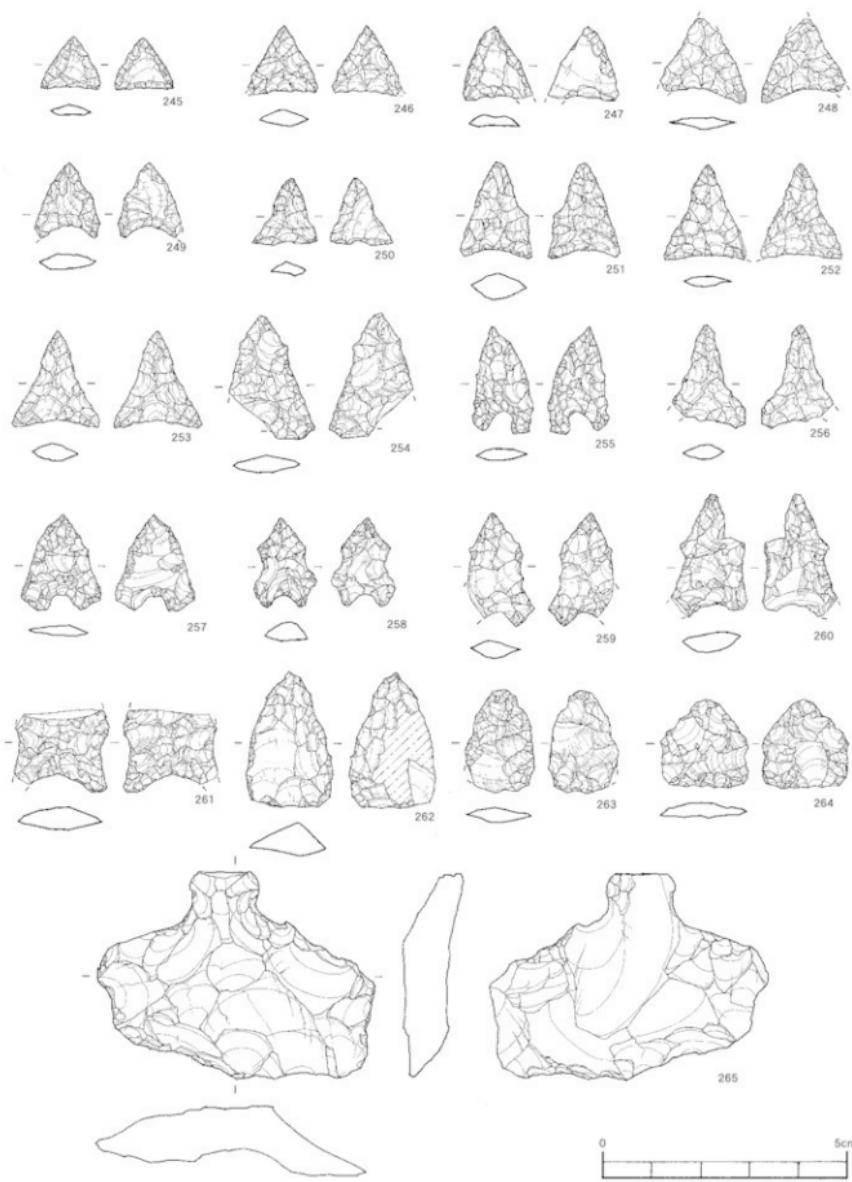


1グリッド : 10m × 10m

第36図 縄文時代晩期石器出土状況（1）



第37図 繩文時代晩期石器出土状況（2）



第38図 繩文時代晩期石器実測図（1）

#### 打製石斧（第41図274～第43図300）

299点出土し、27点を図化した。274～281は、外形が撥形である。274は、最大長20.9cmを測る。大型の打製石斧であるが厚みは薄い。275は、刃部を水平に作出している。279は、剥離が両側縁に連続し、单一の剥離で作出された下縁をそのまま刃部としている。281は、薄い礫に若干の手を加えて撥形を作出している。282～291は基部の左右に抉りを有するものである。282は、礫皮面を有する横長剥片を縱にし、基部に大きな抉りを作出している。284は、刃部が斜めに作出される。285は、基部の両側縁部に比較的細かい剥離が密に見られる。288は、厚みのある比較的大きな剥片を用い、抉りで基部を作出している。基部から下位は幅広になり、下縁の刃部が水平にならない。289～291は、刃部が欠損しているが、残存する部分から両側縁が下縁に向かってすぼまり、先端が尖ると思われる。292～298は、中型から小型で、縦身の外形を持つものである。292は、外形が両側縁の中央付近で幅が狭くなっている。294は、礫皮面を有し、厚みのある剥片を素材としている。298は、比較の小さい剥片を素材とし、下縁部を尖らせている。299・300は、側縁が弯曲しているものである。

#### 抉入状石器（第43図301～第44図304）

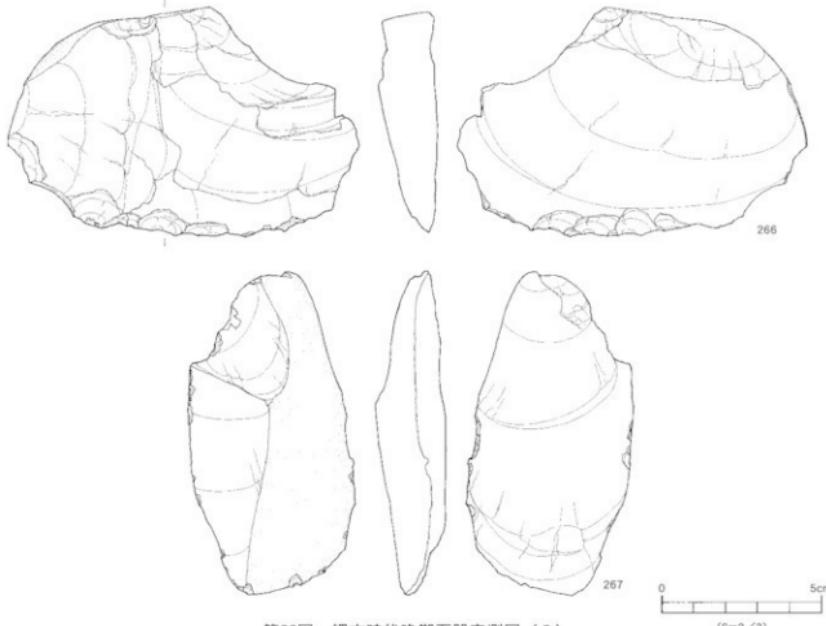
厚みのある剥片の両側辺に二次加工を施し、抉りが入るため、外形が弯曲したものの一括した。打製石斧の可能性も否定できない。301は、右側の抉りの下位から下縁部に刃部確認できる。302は、右側に弯曲し、左側下位に使用に伴う刃こぼれが確認できる。303は、緩やかに右側に弯曲する。縁部は304は、抉りで左右に弯曲し、下端が欠損している。

#### 磨製石斧（第44図305～307）

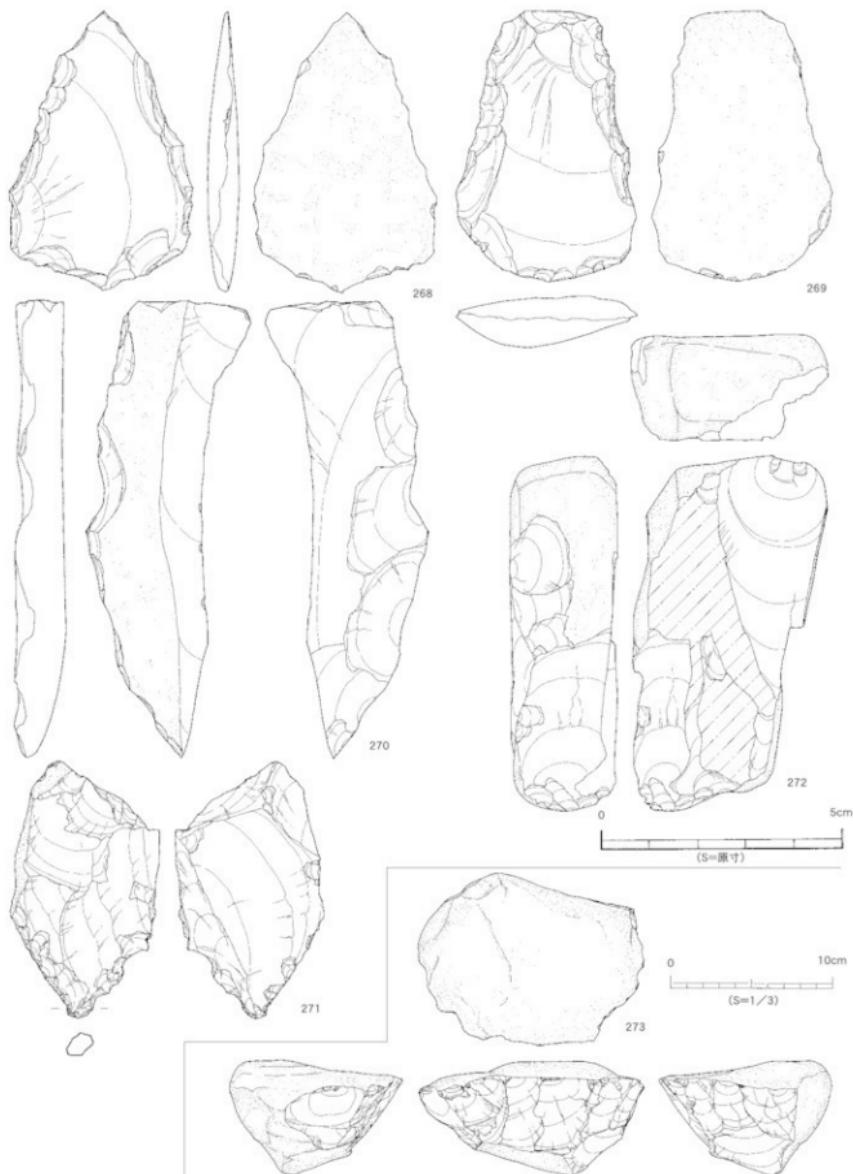
7点出土し、3点を図化した。305は、基部に集中して敲打による整形が明瞭に残る。306は、使用による刃こぼれが少ない。刃部を研いでほとんど使用していないと思われる。307は、基部であるが、整形が不完全で大きな剥離の面が残存する。

#### 硯器（第44図308・309）

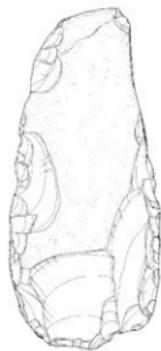
37点出土し、2点を図化した。308は、右側と下端を使用したと考えられる。309は、左側と下端を使用したと考えられる。



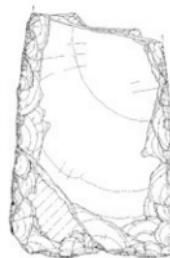
第39図 繩文時代晩期石器実測図（2）



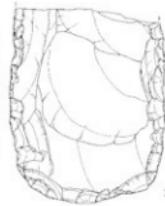
第40図 繩文時代晩期石器実測図（3）



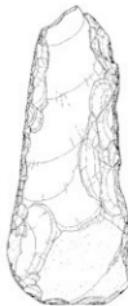
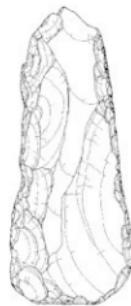
274



275



276



277



278



279



280



281

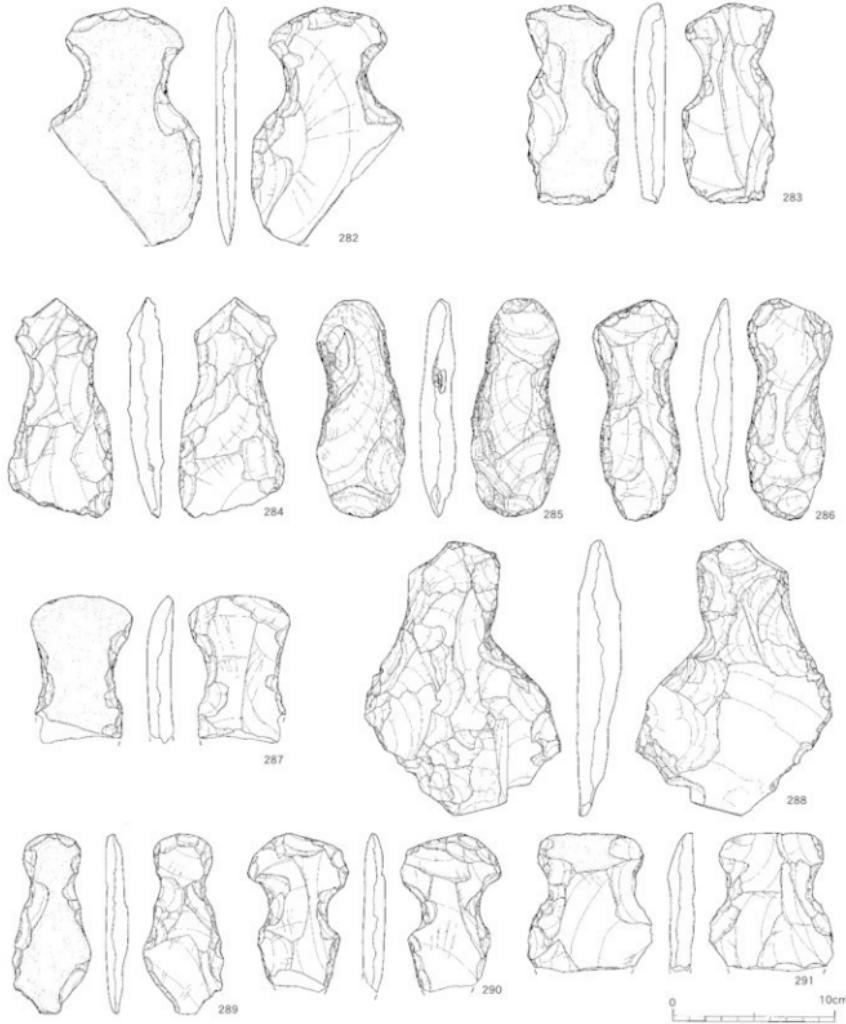
0 10cm  
(S=1/3)

第41図 繩文時代晩期石器実測図（4）

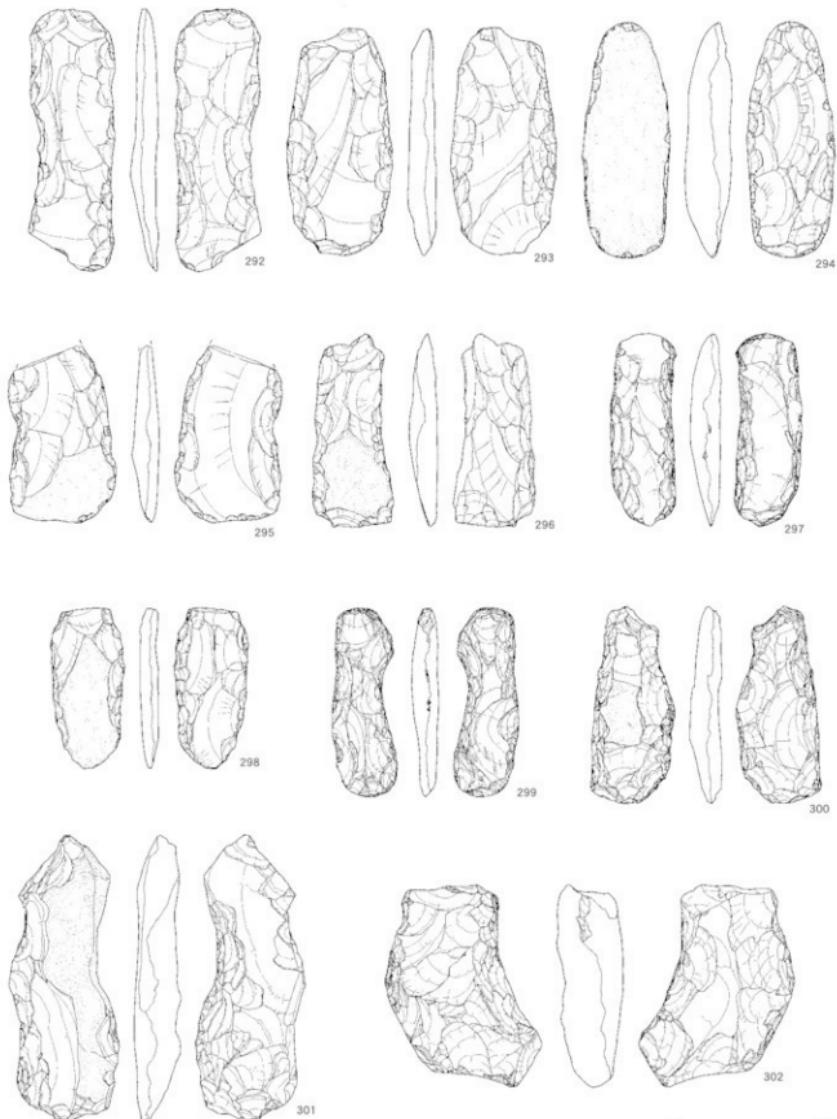
磨石（第44図310～第46図326）

159点出土し、17点を図化した。310・311は、縁辺部に切れ間なく明瞭な敲打痕を有する。さらに、311は、表裏の作業面以外が赤化し、所々煤の付着が見られる。312～321は縁辺部に明瞭な敲打痕が確認できるが連続し

ない。313は、左側縁と下縁が欠損し、敲石への転用も考えられる。315は、直径が約60mmの小型の磨石である。317は、作業面が明瞭に確認で、使い込まれた印象を受ける。



第42図 繩文時代晩期石器実測図（5）



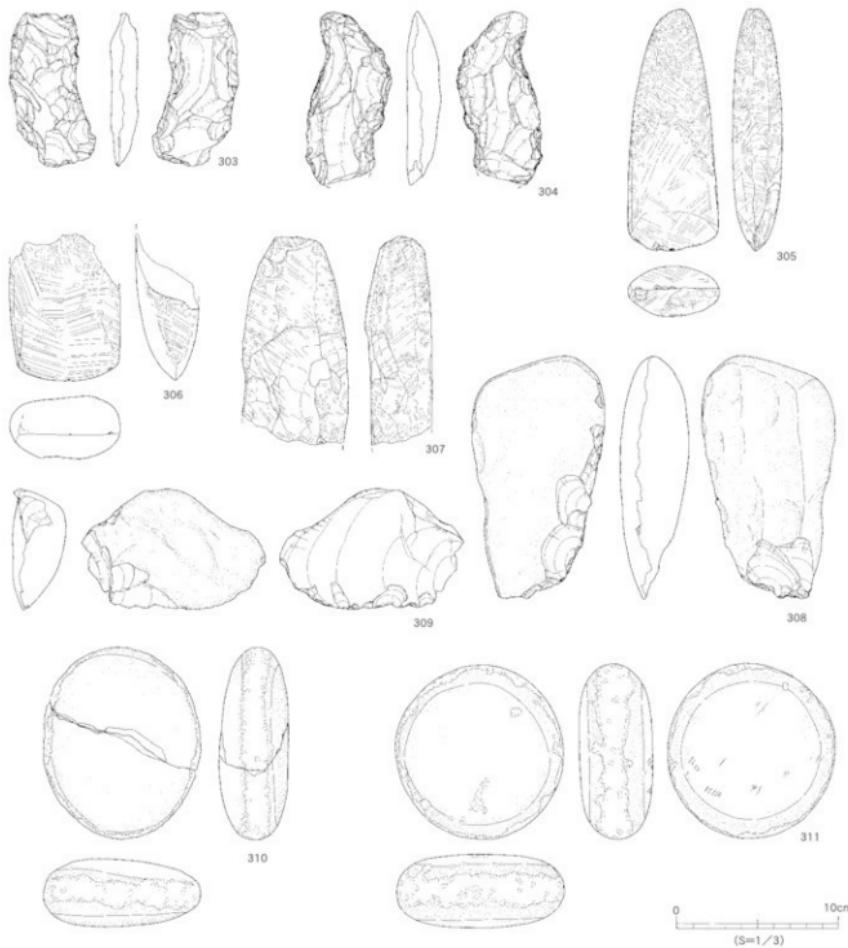
第43図 繩文時代晩期石器実測図（6）

319の表裏と320の表は、作業面が著しく平滑である。322～326は、縁辺部に僅かに敲打痕が確認できる。

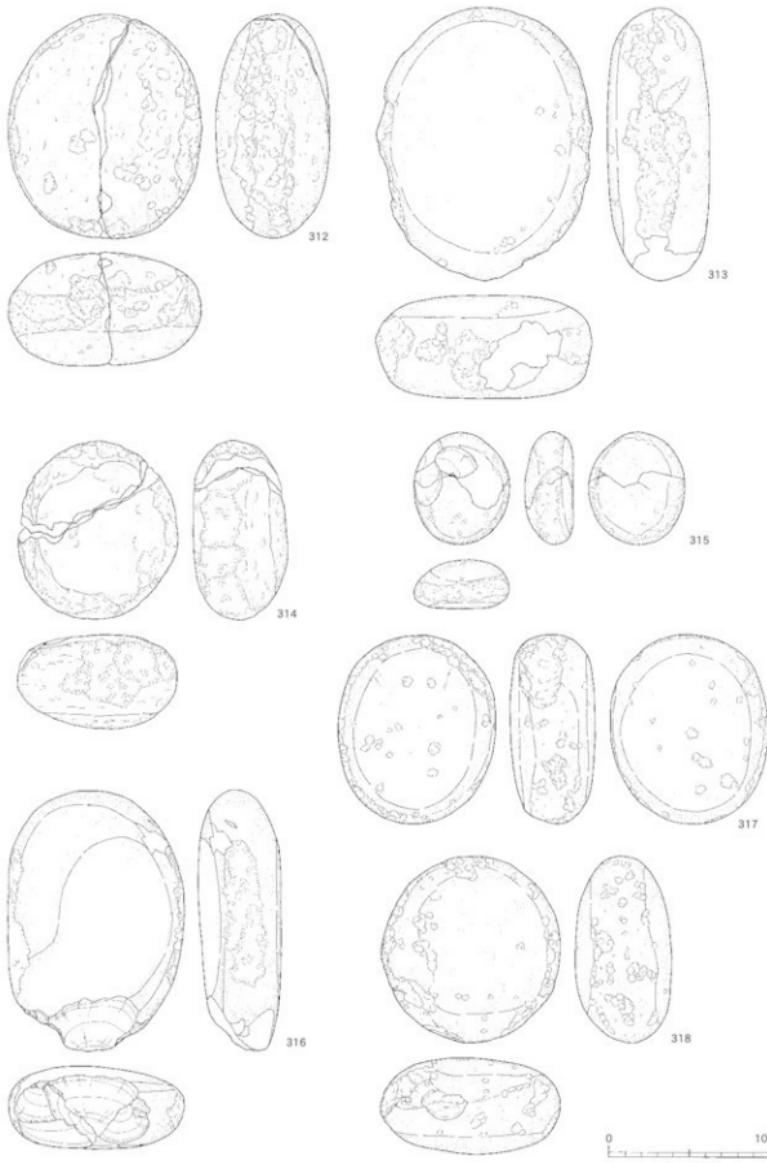
#### 敲石（第47図327～第48図334）

151点出土し、8点を図化した。327～329は、重量が約2～3kg超の大型の敲石である。327は、上下端部に明

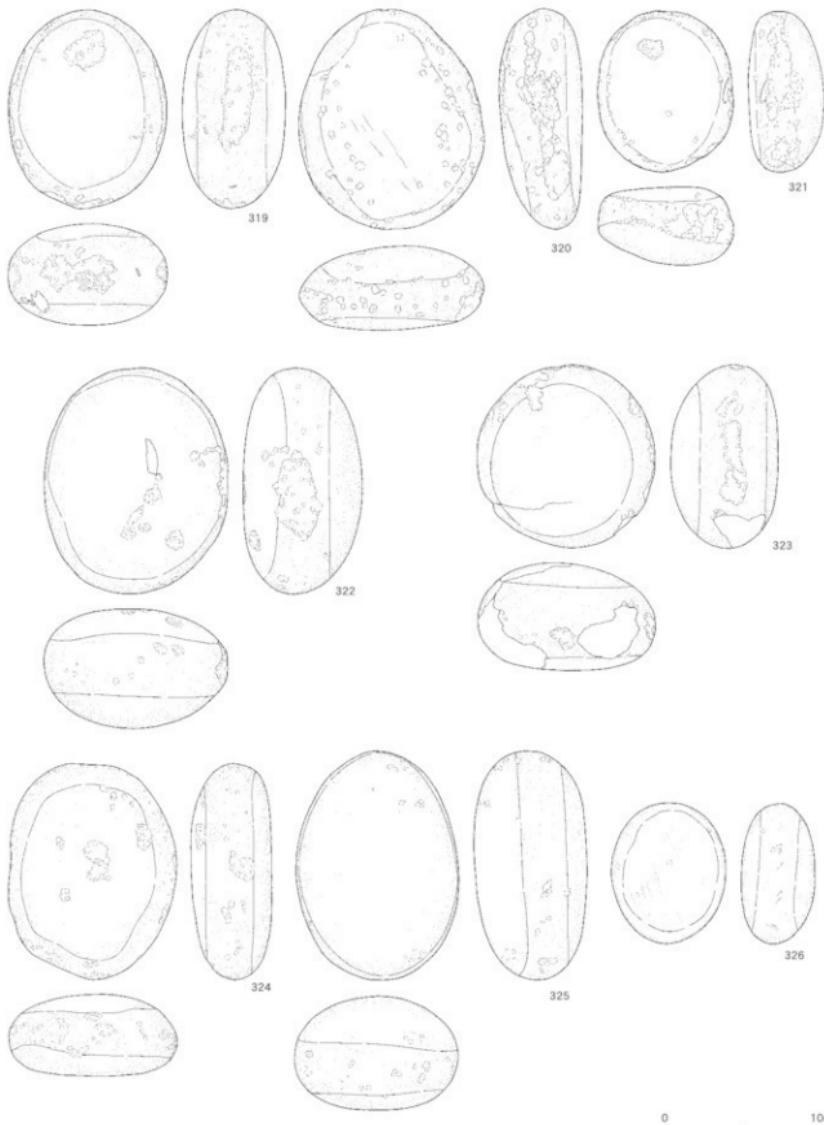
瞭な敲打痕が確認できる。328は、最大長が約27cmで重量も敲石の中で最も重い。下端部に明瞭な敲打痕が確認できる。329は、右側辺の角に明瞭な敲打が見られる。一般的な敲石の用途と異なる可能性がある。330～334は、小型の敲石である。333は縁辺部に連続して、他4点は端部に敲打痕をもつ。



第44図 繩文時代晩期石器実測図（7）



第45図 繩文時代晩期石器実測図（8）



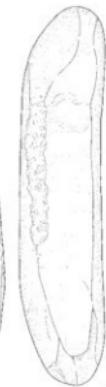
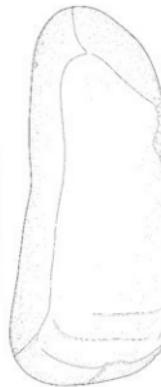
第46図 繩文時代晩期石器実測図（9）



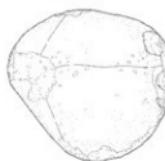
327



328



329



330

第47図 繩文時代晩期石器実測図 (10)



石皿（第48図335）

93点出土し、1点を図化した。小型の石皿で作業面が傾斜している。その作業面の最も低い端に直径約50mmの窪みをもつ。

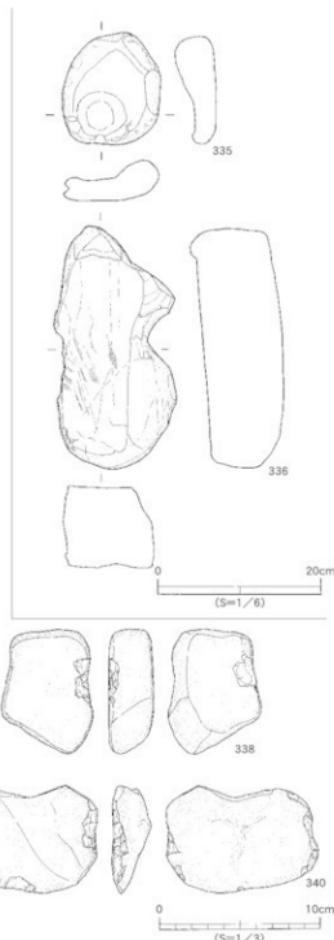
砥石（第48図336）

13点出土し、1点を図化した。縦横の断面がいずれも四角形で安定して作業が行える形状をもつ。節理面を作業面として使用している。



石錐（第48図337～340）

18点出土し、4点を図化した。337・338は、縦横比がほぼ同じで、左右を打ち欠き、結束の位置を造り出している。339は長軸方向の両端を打ち欠き、結束の位置を造り出している。340は、長軸方向に加え、短軸方向においても結束の可能性が伺える。



第48図 繩文時代晩期石器実測図（11）



### 3 弥生時代の調査成果

#### (1) 概要

平成21年度の調査範囲( A ~ C - 10 ~ 18区 )において , V層から該期の土器片が出土した。遺構は、確認できなかった。

#### (2) 土器

##### ア 早期

壺(第50図341~353)

突帯が口唇部に接して貼付される特徴をもつ。総数で65点出土し , そのうち13点を図化した。341 ~ 345は , 上胴部で屈曲する器形を呈する。343は , 無刻目突帯文が口唇部につく。344は , 刻み目の無い断面三角形の突帯が2条巡る。345は , 巻き貝の殻頂部を用いた刺突が施される突帯が方形の区画を作る。346 ~ 349は , 上胴部で屈曲しない砲弾形の器形と考えられる。347は , 外面に炭化物の付着が確認され放射性炭素年代測定を試みた。その結果 , 紀元前800年から紀元前751年の年代が示されている。詳細については , 第5章第3節と第6章第1節3に記載した。350 ~ 353は , つまみ出しで突帯を作り出し , 細かい刻み目が入る。

鉢(第51図354~359)

総数で28点出土し , そのうち6点を図化した。354 ~ 356は , 口唇部を外につまみ出し , 口縁部が内傾し , 上胴部で強く屈曲する器形である。355・356は , 内外面共にミガキ調整が確認できる。357 ~ 359は , 上胴部での屈曲がなく緩やかにすばまり底部へ至る器形である。357は , 口唇部が薄く , 口縁部が内弯する。358は , ナデ調整 , 359は , ミガキ調整が施される。

##### イ 前期

壺(第51図360・361)

総数で3点出土し , そのうち2点を図化した。360・361は大きな断面三角形の突帯が平坦な口縁部を形成する。360は , 突帯に刻み目が入る。

壺(第51図362~366)

総数で77点出土し , そのうち5点を図化した。362・363は , 肩部破片である。いずれも4条 , 2条の沈線が巡る。364 ~ 366は , いずれも肩部に沈線が巡り , その沈線の下位胴部の状況がわかる。364は , 左上から右下に引かれた複数の沈線によって鋸歯状の文様が描かれている。365は 3条の沈線によって重孤文が描かれている。366は , 肩部沈線下位に文様が描かれていらない。



第49図 弥生時代土器出土状況



第50図 弥生時代土器実測図（1）

ウ 中期

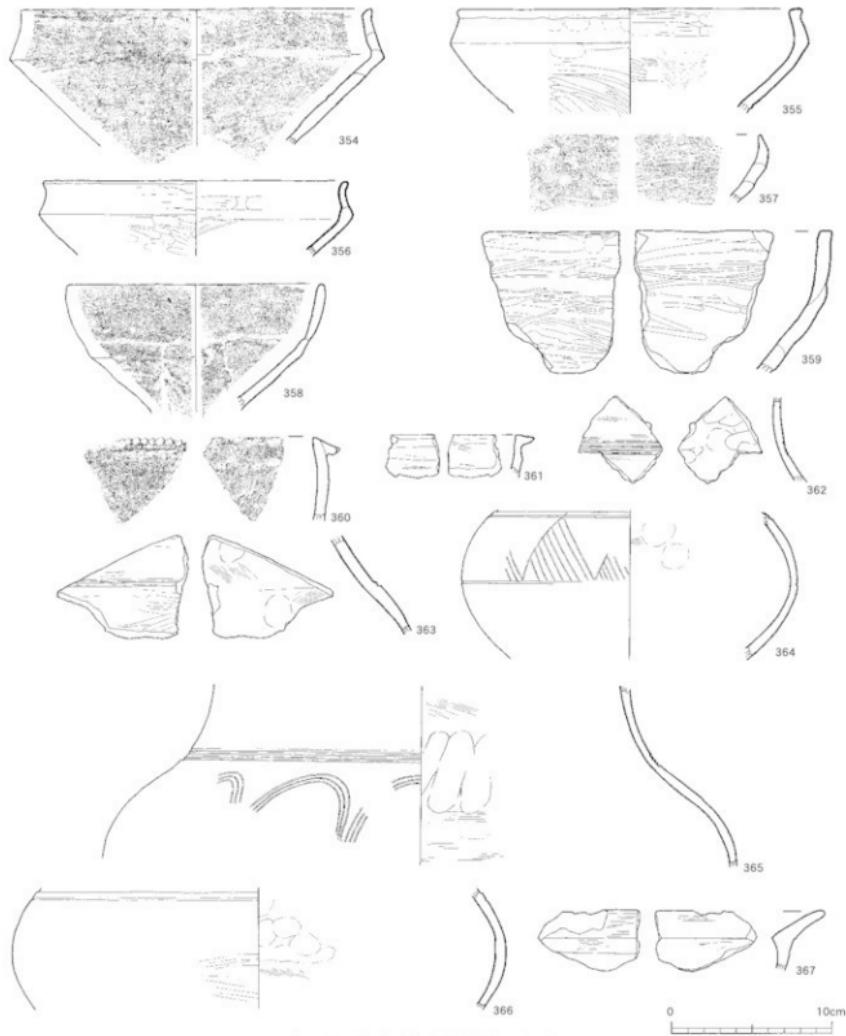
甕 (第51図367)

総数で4点出土し、そのうち1点を図化した。367は、口縁部上面が上方へ反り、内面に強く張り出す。黒髮式

の甕と考えられる。

鉢 (第52図368)

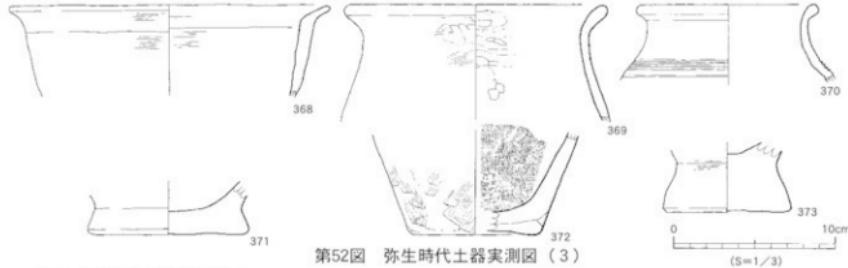
368は、胎土に砂粒を多く含む。胴部下位の器壁が薄い特徴をもつ。



第51図 弥生時代土器実測図（2）

### 壺（第52図369・370）

総数で5点出土し、そのうち2点を図化した。369・370は口縁部である。短い口縁部で長い頸部をもつ器形を呈する。370は、頸部下位に沈線をもつ。弥生時代中期前葉のものと考えられる。



第52図 弥生時代土器実器測図（3）

表14 弥生時代土器観察表

標 号	区	層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		石 英 長 石 青 玉 小 石 赤 鉄 地成	備考		
							外	内	外	内				
341	B	14	V	7574	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○	炭化物		
	B	14	V	7575										
342	B	14	V	8699	早期壺	口縁～胴部	短いハラナデ	短いハラナデ	褐色	暗褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	14	V	8700										
343	B	14	V	9045										
	B	13	V	6897	早期壺	口縁部	短いハラナデ	短いハラナデ	灰黄褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
345	B	13	V	6898	早期壺	口縁部	短いハラナデ	短いハラナデ	灰黄褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	13	V	7017										
346	B	12	V	5796	早期壺	口縁～胴部	短いハラナデ	短いハラナデ	に赤い黄色	灰オリーブ色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	12	V	5713	早期壺	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○	文字文		
346	B	14	V	7504	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	14	V	8537										
50	A	15	V	8298	早期壺	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	暗赤褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	14	V	8691										
348	B	13	V	8699	一括	口縁部	ナデ	指觸印付	ナデ	指觸印付	褐色	○ ○ ○ ○ ○		
	B	12	V	6936	早期壺	口縁部	短いハラナデ	短いハラナデ	黒褐色	に赤い赤褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好		
	B	12	V	5721										
350	B	12	V	5726	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	指觸印板	明褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	12	V	6670										
	B	13	V	6812										
351	B	13	V	6887	早期壺	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	14	V	7129	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	褐色	に赤い赤褐色	○ ○ ○ ○ ○			
352	B	14	V	7195										
353	C	12	V	6610	早期壺	口縁部	短いハラナデ	短いハラナデ	褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	13	V	7407										
354	B	14	V	8697	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	明褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○			
355	B	13	V	8760	早期壺	口縁～胴部	ミガキ	ナデ	に赤い黃褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
356	F	7	V	12913	早期壺	口縁～胴部	ミガキ	ナデ	に赤い黄褐色	明褐色	○ ○ ○ ○ ○			
357	B	13	V	9194	早期壺	口縁部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	14	V	7454										
	B	14	V	8691										
358	B	12	V	8696	早期壺	口縁～胴部	ナデ	ナデ	指觸印板	褐色	○ ○ ○ ○ ○			
	B	13	V	8697										
	B	14	V	8698										
	B	14	V	8699										
	B	14	V	9099										
	B	14	V	9823										
51	359	A	11	V	9681	早期壺	口縁～胴部	ミガキ	ミガキ	褐色	黒褐色	○ ○ ○ ○ ○		
	C	12	V	6505	前期壺	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
361	B	13	V	6967	前期壺	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○			
362	B	13	V	8843	前期壺	肩部	丁寧なナデ	丁寧なナデ	に赤い赤褐色	に赤い赤褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好		
363	B	13	V	8832	前期壺	肩部	沈継	ミガキ	ナデ	指觸印板	褐色	○ ○ ○ ○ ○	不良	
364	B	14	V	7497	前期壺	胴部	沈継	ミガキ	指觸印板	灰褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好	
	B	14	V	9017										
	B	13	V	8843										
365	B	13	V	8645	前期壺	肩部	ミガキ	ミガキ	ナデ	指觸印板	褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好	
	B	13	V	9025										
366	B	13	V	7143	前期壺	胴部	沈継	ナデ	ミガキ	ナデ	指觸印板	褐色	に赤い黄色	○ ○ ○ ○ ○
	B	13	V	8751										
367	C	4	Nb	初	中期壺	口縁部	ナデ	ナデ	淡青褐色	灰白色	○ ○ ○ ○ ○	不良		
368	B	2	Na	一括	中期壺	口縁部	ナデ	ナデ	水色	黒褐色	○ ○ ○ ○ ○	不良		
369	B	12	V	5638	中期壺	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐色	に赤い黄褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好		
370	B	14	V	8509	中期壺	口縁部	沈継	ナデ	ナデ	褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○		
371	C	2	Nb	2504	底部	底部	沈継	ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○	不良	
372	C	12	V	3028	底部	底部	ナデ	ナデ	に赤い褐色	褐色	○ ○ ○ ○ ○			
373	A	12	Na	一括	底部	底部	ナデ	ナデ	褐色	に赤い褐色	○ ○ ○ ○ ○	不良		

#### 4 古墳時代の調査成果

##### (1) 概要

本遺跡では古墳時代の遺物包含層は確認されていない。また、遺構の検出もできなかつたが、古代の遺物包含層であるIV層、縄文時代晩期の遺物包含層であるV層から少量出土しているので記録することとした。

##### (2) 土器

###### ア 頸 (第53図374～378)

総数で26点出土し、そのうち5点を図化した。374は口縁部破片である。375・376は胴部破片である。375は、刻み目を有する突帯をもつ。376は、貼り付けの薄い突帯をもつ。377は脚部破片である。378は口縁部から胴部下位までの破片である。口縁部が外反し、胴部はやや膨らむものである。胴部外面に広く煤が付着している。

イ 壺 (第53図379・380)

总数で23点出土し、そのうち2点を図化した。379は、口縁部から胴部までの破片である。口縁部は直行気味で、胴部は球形状に膨らむ。380は、底部破片である。

###### ウ 高杯 (第53図381)

総数で5点出土し、そのうち1点を図化した。381は、高杯の脚部破片である。

###### エ 増 (第53図382・383)

総数で3点出土し、そのうち2点を図化した。382・383は、口縁部である。口径と器面調整から壺の口縁と判断したが、小型土器の可能性も捨てきれない。

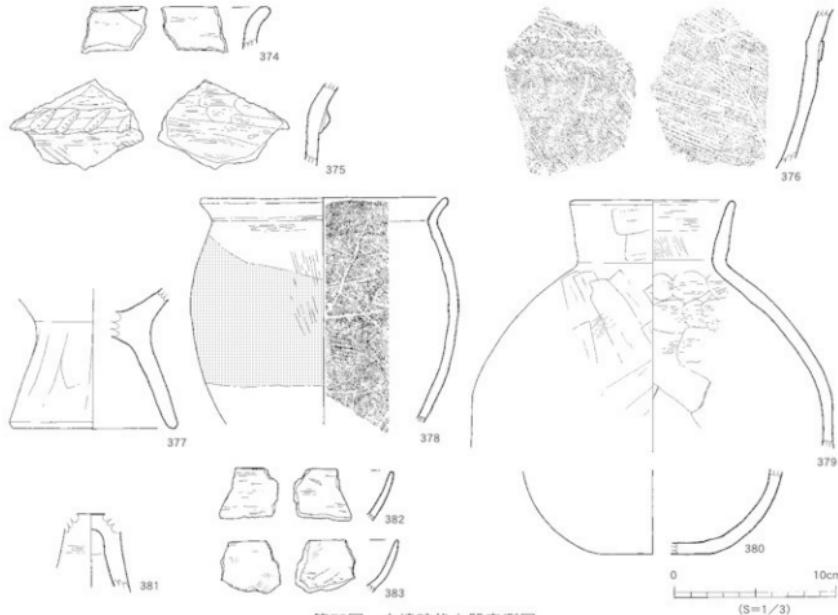


表15 古墳時代土器観察表

第53図 古墳時代土器実測図

図 番 号	区	層	取上番号	分類	部位	文様	調査		色調	石器	長 石	青 銅	青 母	小 鉛	赤 鉛	焼成	備考
							外	内									
374	B	13	V	一括	壺	口縁部	ナデ	ナデ	にない黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	
375	C	11	V	3312	壺	胴部	安帝	ナデ ハケ目	にない黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	
376	D	6	Va	一括	壺	胴部	安帝	ハラナデ	暗褐色	○	○	○	○	○	○	○	
377	B	2	Bb	2892	壺	脚部	ナデ	明赤褐色	浅黃褐色	○	○	○	○	○	○	○	不良
	B	2	Bb	11903～11906													
53	378	E	7	V	一括	口縁～胴部	無紋	ハケ目	ケズリ ハケ目	橙色	○	○	○	○	○	○	備考
					12547												
					12519												
					12520												
379	C	10	V	3237	壺	口縁～胴部	無紋	ハラナデ	黒褐色	にない黄褐色	○	○	○	○	○	○	
380	B	3	Va	一括	丸底壺	底部	ナデ	小明	黄褐色	○	○	○	○	○	○		
381	B	13	V	3755	高杯	脚部	ナデ	ハケ目	暗褐色	○	○	○	○	○	○		
382		N		10040	壺	口縁部	ナデ	ナデ	暗褐色	○	○	○	○	○	○		
383	C	8	V	4686	壺	口縁部	ナギ	ナデ	にない黄褐色	○	○	○	○	○	○		

## 5 古代の調査成果

### (1) 概要

平成19年度の調査範囲( A ~ D - 1 ~ 7 区 , B · C - 8 区 ) である自然堤防の後背地部分において、古代の遺物包含層であるIV層から遺構・遺物が見つかった。B · C - 3 · 4 区において土坑 5 基と調査範囲全域において柱穴状遺構( ピット ) 78基を検出し、土師器、須恵器、青磁、土製品が出土した。ただし、調査当初にIV層は a , a' , b と細かく分層されていたが、調査の進捗で各層において同じように古代の遺物が出土した。また、調査箇所において分層できない状況が確認できたのでIV層として一括りにした。また、平成21年度の調査において遺物包含層は確認できなかった。

### (2) 遺構

#### ア 土坑

IV層上面において遺物包含層より暗い色調の円形ないし橢円形プランを 5 基検出した。調査の結果、形態・埋土状況・出土遺物に差が見られたが、いずれも土坑と認

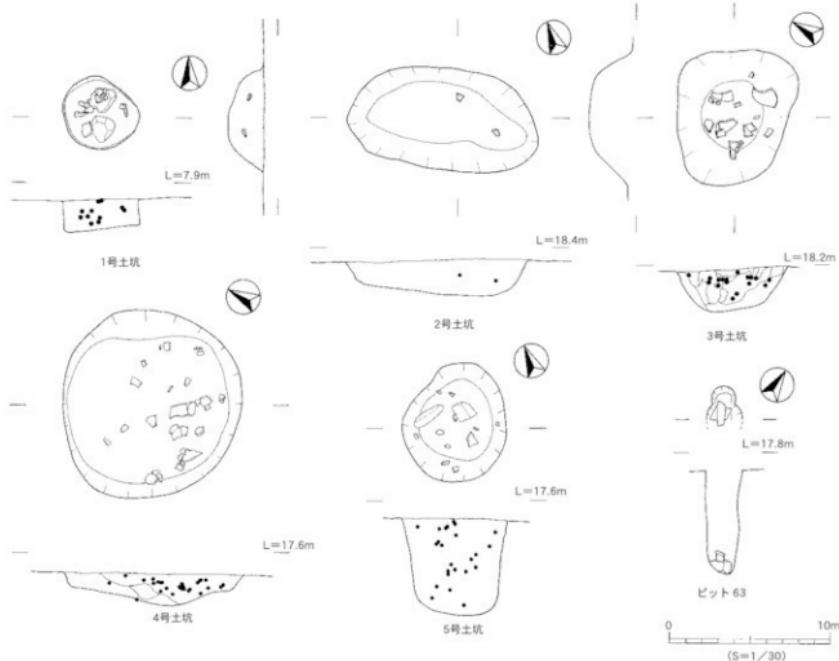
定できる遺構であった。また、古代に該当する土器片等が埋土から出土し、それらの一部を資料化した。

#### 1号土坑( 第54図、第56図384 )

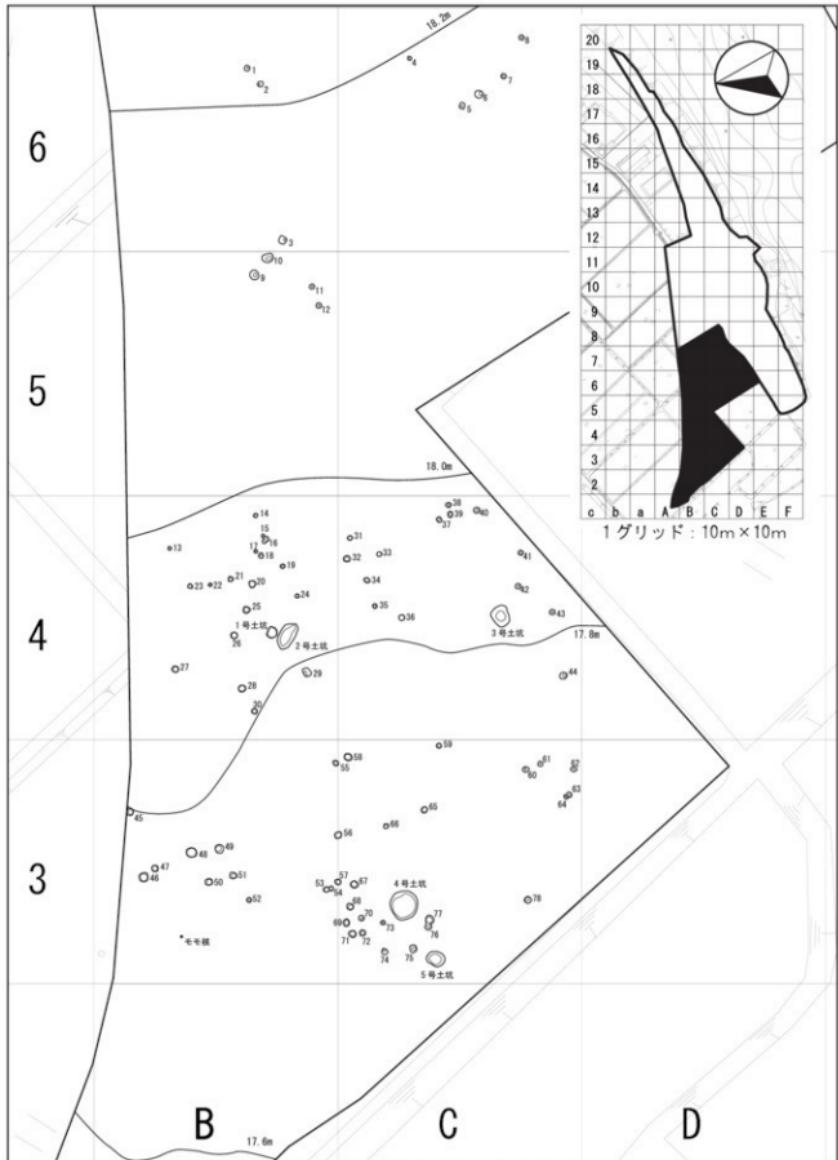
B - 4 区 IV 層で検出した。平面形は若干歪みが見られるが円形で、直径は 45cm である。また、検出面からの深さは、約 20cm であった。埋土は灰褐色粘質土である。土器片が 9 点出土した。384は、土師器の口縁部である。口縁部は逆「 L 」字に近く外反し、胴部はあまり張らない。内面は口縁部近くまで明瞭なヘラケズギが認められる。

#### 2号土坑( 第54図 )

B - 4 区 IV 層で検出した。平面形は橢円形で、長径約 1.2m , 短径 0.7m である。また、検出面からの深さは、約 22cm であった。埋土は灰褐色粘質土である。土器 1 点と磚 1 点が出土した。小破片であったため、図化できなかった。



第54図 IV層検出古代土坑・ピット実測図



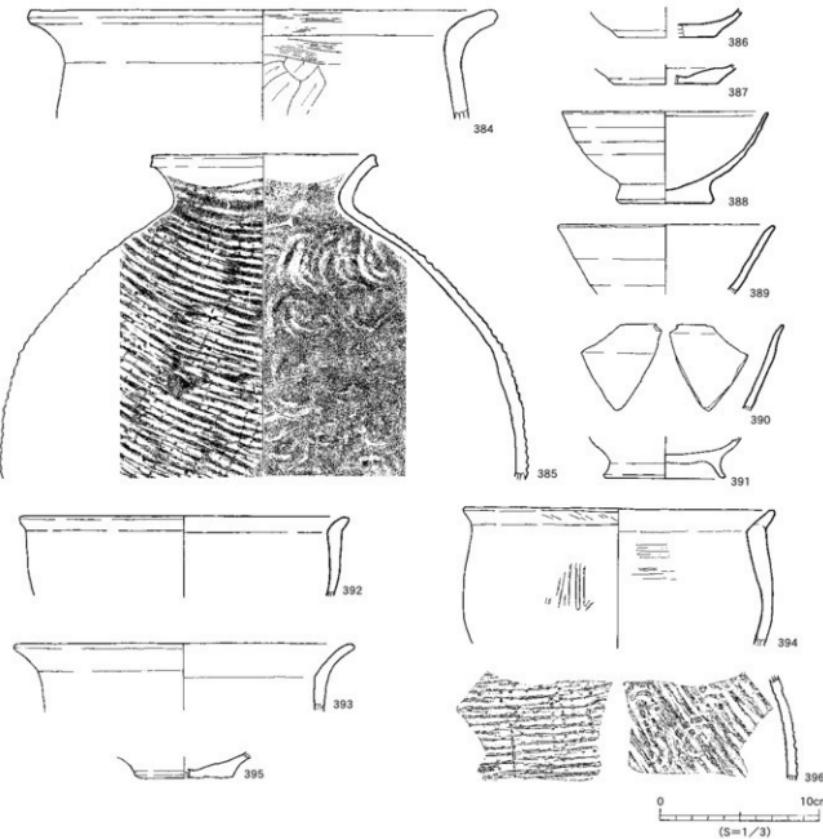
第55図 IV層検出古代土坑・ビット配置図

3号土坑（第56図、第56図385）

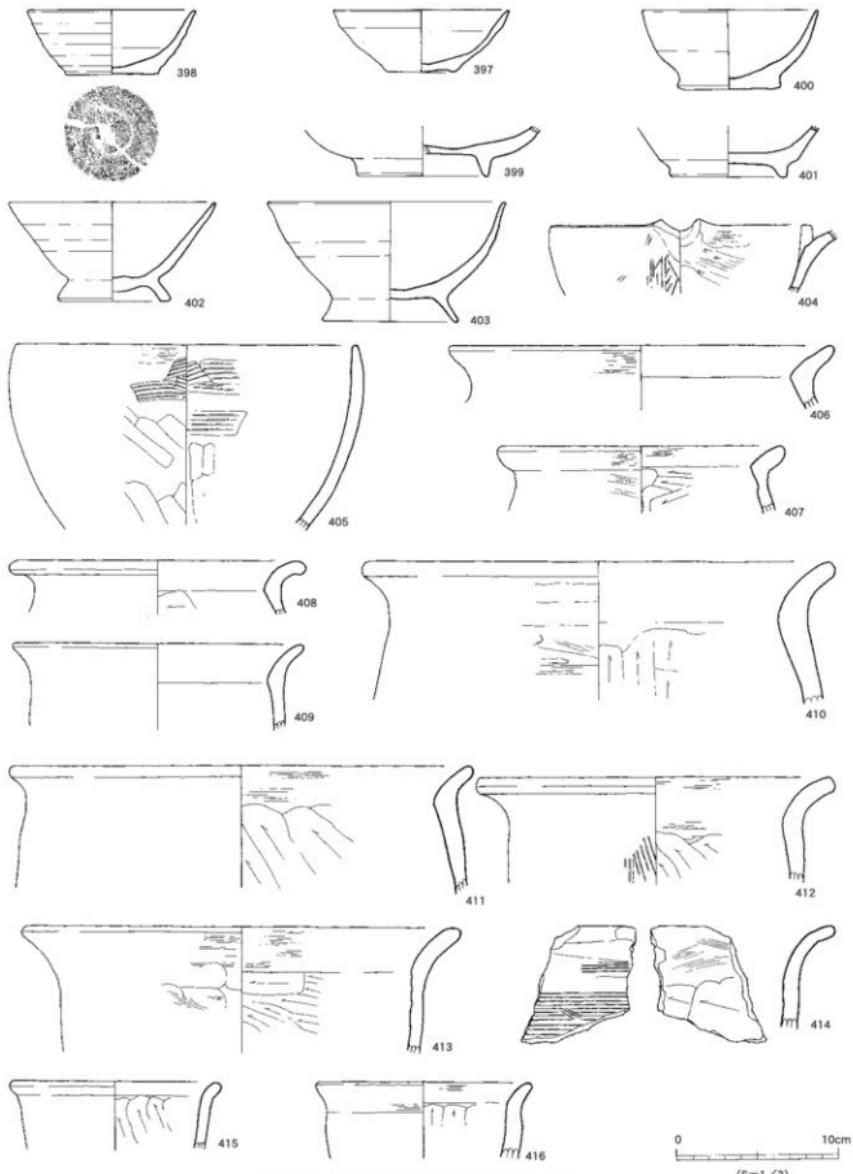
C-4区IV層で検出した。平面形は略円形で、直径が約0.8mである。また、検出面からの深さは約30cmであった。調査の結果、暗褐色粘質土を埋土とし、そのなかに多くの炭化物と16点の須恵器を包括する土坑であることが判明した。385は、須恵器の縁の口縁部から胴部までの破片である。外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキが認められる。遺構の使われた年代の特定を目的に炭化物の<sup>14</sup>C年代測定を実施した。その結果、9世紀末から10世紀頃に使用された可能性の高いことが示された。なお、分析結果の詳細については、第5章第2節に記載した。

4号土坑（第56図、第56図386～394）

C-3区IV層で検出した。プランは直径約1.1mの円形である。また、検出面からの深さは約20cmであった。埋土は3枚に分層できた。土師器・須恵器の破片が28点出土した。埋土中には炭化物も含まれていた。386・387は、土師器の縁の底部である。388～391は、土師の底である。388は口径12.6cm、器高5.6cmを測る。底部は充実高台気味で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部へ至る。392～394は土師器の口縁部である。



第56図 古代土坑内遺物実測図



第57図 古代包含層出土遺物実測図（1）

5号土坑（第54図、第56図395・396）

C-3区IV層で検出した。プランは直径約0.7mの略円形である。また、検出面からの深さは約60cmであった。埋土は、暗灰色粘質土に炭化物とIV層の明褐色土のブロックが混入しており、自然堆積は見られなかつたことから、土坑が一気に埋められたものと考えられる。土師甕破片など20点と表面が赤化した軽石2点が出土した。395は、土師器の壺の底部である。396は、須恵器の甕の胴部上部である。外面は格子目タタキ、内面は平行タタキと同心円あて具痕が認められる。

イ ピット（柱穴状遺構）（第54図）

ピット（柱穴状遺構）は、78基確認した。いずれもIV層で検出した。検出位置は第55図に示したとおりである。

全数のピットを半裁し、埋土状況と断面形状を調査した。C-3区で検出した1基のピットに根石を確認した。また、B-3区のピットからは該期の遺物が出土した。形状計測の記録については、表16の観察表を参照されたい。

(3) 遺物

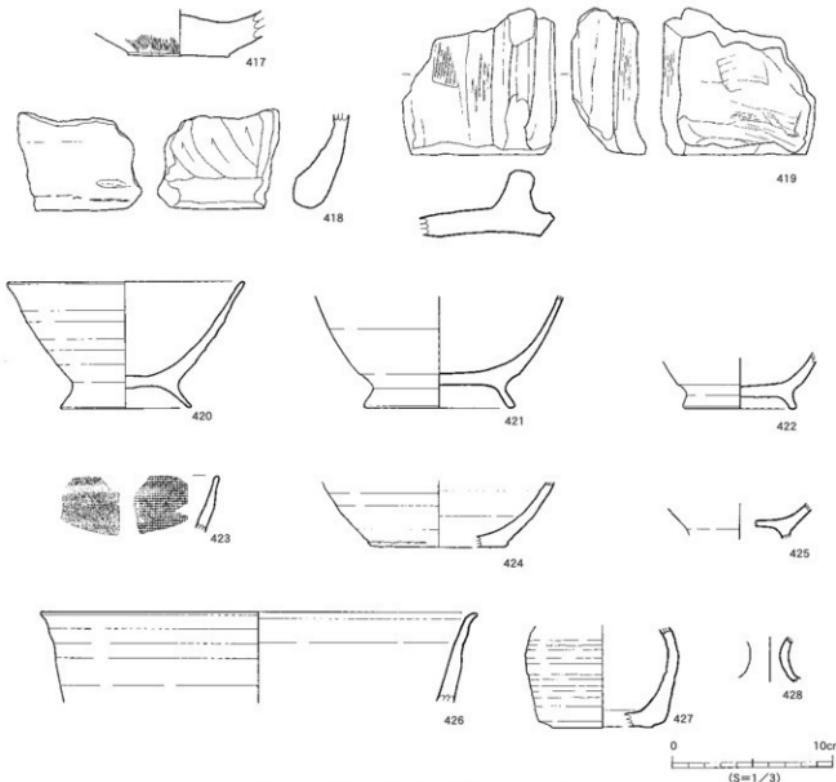
ア 土師器（第57図・第58図）

壺（第57図397・398）

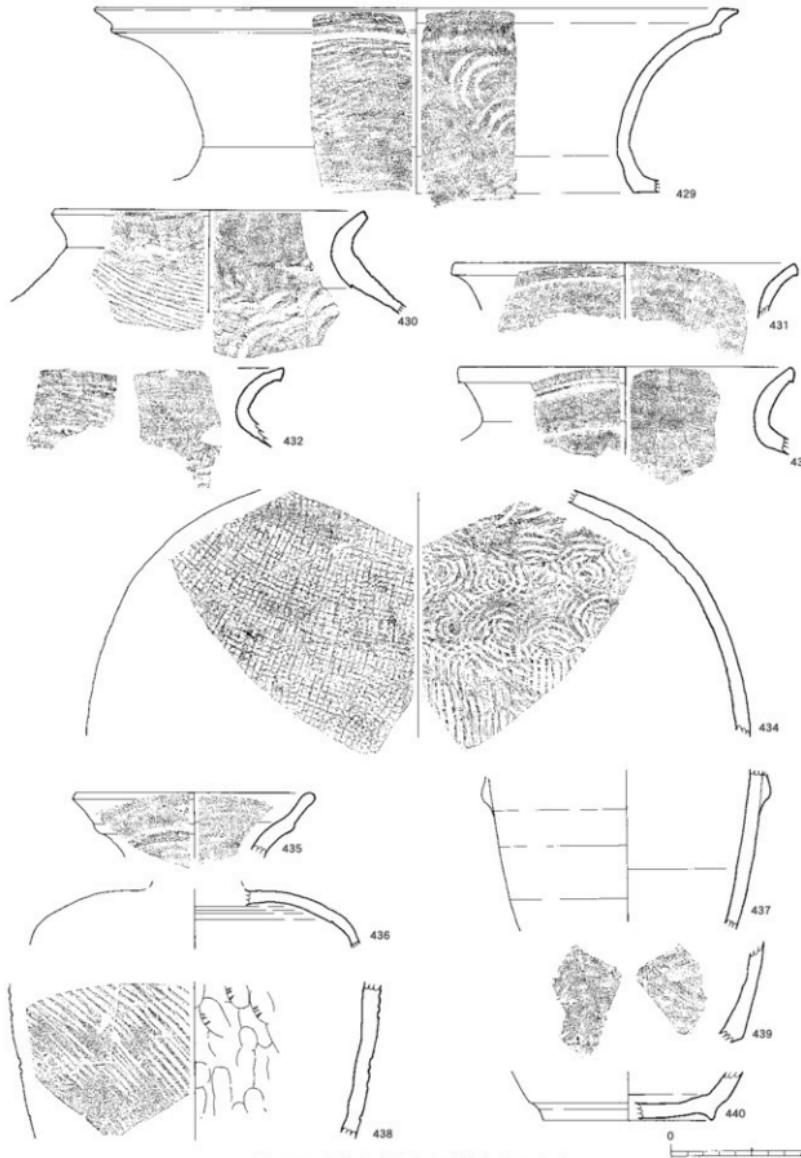
総数で10点が出土し、そのうち2点を図化した。397は、低い高台をもつ。398は、充実高台で、ヘラ切りの底部をもつ。

壺（第57図399～403）

総数で55点が出土し、そのうち5点を図化した。399は、体部と比較して見込みの厚みが薄い特徴をもつ。400は、



第58図 古代包含層出土遺物実測図（2）



第59図 古代包含層出土遺物実測図（3）

充実高台をもつ。401は、低い高台をもつ。402・403は、高台の脚部が外へ聞く。402は見込みの厚みが膨らむ。403は高台脚部が体部の厚さと比較して薄い。

#### 鉢（第57図404・405）

総数で7点が出土し、そのうち2点を図化した。404は片口の注ぎ口がある。405は内外面にハケ目が残る。

#### 甕 I類（第57図406～409）

総数で12点が出土し、そのうち4点を図化した。406・407は、内面で健状に屈曲する口縁をもつ。408は、内面で屈曲し、大きく外反する口縁をもつ。409は、内面で屈曲し、小さく外反する口縁をもつ。

#### 甕 II類（第57図410～第58図417）

総数で27点が出土し、そのうち8点を図化した。410・411は、胴部が膨らむ。412～414は、口縁部が如意

状に開き胴部があよそ直立する。415・416は小振りな甕である。417は、底部である。類は不明である。

#### 瓶（第58図418）

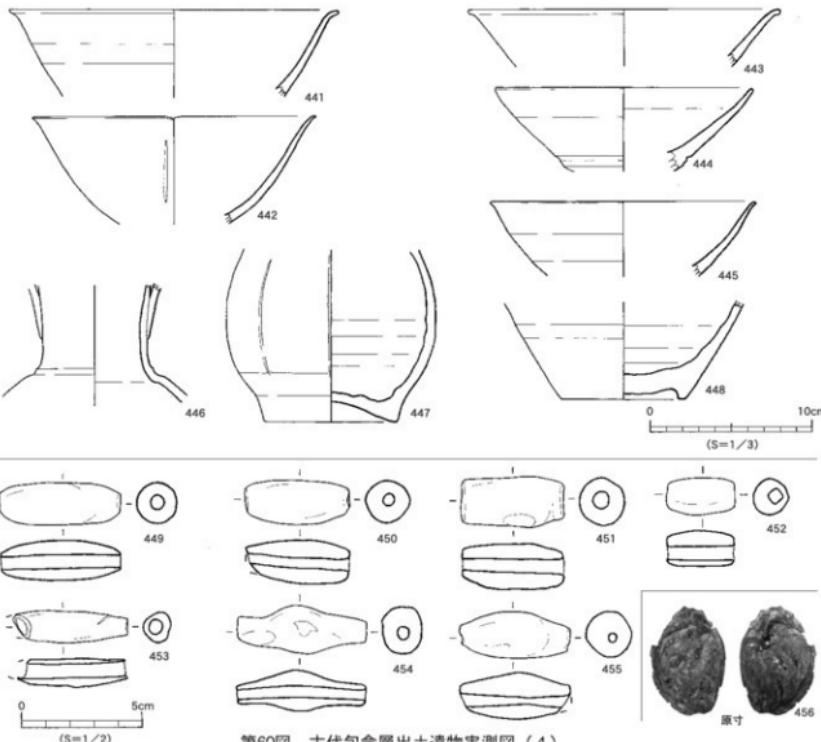
総数で2点が出土し、そのうち1点を図化した。下端の破片である。

#### 甕（第58図419）

総数で2点が出土し、そのうち1点を図化した。移動式窓の正面観で確認できる焚き口左側下端部の破片である。

#### イ 内黒土師器（第58図420～422）

総数で54点が出土し、そのうち3点を図化した。420は、見込みがやや膨れ、外に聞く高台が薄手で高い。421は、見込みが扁平で、外に聞く高台が厚く高い。422は、外に聞く高台が厚く低い。



第60図 古代包含層出土遺物実測図（4）

ウ 須恵器（第58図423～第59図440）

坏（第58図423・424）

総数で3点が出土し、そのうち2点を図化した。423は、口唇部に向かうにつれて急に薄くなる口縁部である。424は、胴部から底部にかけての破片で、平安時代の須恵器と思われる。

碗（第58図425）

総数で2点が出土し、そのうち1点を図化した。425は、B-7区の水田と思われる遺構埋土から出土した。平安時代の須恵器と思われる。

鉢（第58図426）

総数で2点が出土し、そのうち1点を図化した。426は、口唇部が小さく外反する。平安時代の須恵器の鉢である。

小型壺（第58図427・428）

総数で3点が出土し、そのうち2点を図化した。427は、B-7区で出土した底部である。428は、頸部破片である。いずれも平安時代の須恵器と思われる。

壺（第59図429～434）

総数で327点が出土し、そのうち6点を図化した。429～434は、口縁部破片である。434は、胴部上部の破片である。

表16 古代ピット計測表

遺構 番号	Ⅳ区	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)	床面標高 (m)	遺構 番号	Ⅳ区	長径 (c m)	短径 (c m)	深さ (c m)	床面標高 (m)
1	B-6	41	—	35,0	18,004	40	C-4	21	—	25,0	17,989
2	B-6	40	—	89,0	17,532	41	C-4	17	—	31,0	17,679
3	B-6	21	—	19,0	18,012	42	C-4	26	—	30,0	17,657
4	C-6	29	—	19,0	18,014	43	C-4	24	—	30,0	17,659
5	C-6	26	—	20,0	19,992	44	C-4	24	—	29,0	17,633
6	C-6	30	—	36,0	17,897	45	B-3	30	28	47,1	17,081
7	C-6	21	—	25,0	17,937	46	B-3	40	38	9,0	17,468
8	C-6	29	—	30,0	18,014	47	B-3	26	25	9,0	17,470
9	B-5	36	—	49,0	17,211	48	B-3	43	39	11,0	17,385
10	B-5	34	—	56,0	17,446	49	B-3	38	35	10,0	17,386
11	B-5	29	—	30,0	17,941	50	B-3	30	28	14,4	17,370
12	B-5	20	—	15,0	18,087	51	B-3	30	26	16,0	17,325
13	B-4	15	14	10,2	17,565	52	B-3	20	19	5,5	17,415
14	B-4	19	16	5,2	17,628	53	B-3	25	22	6,1	17,415
15	B-4	14	11	9,0	17,404	54	B-3	20	16	5,5	17,397
16	B-4	24	21	38,0	17,302	55	B-3	24	21	5,5	17,317
17	B-4	16	15	8,0	17,590	56	B-C-3	28	25	5,8	17,388
18	B-4	24	19	13,5	17,530	57	B-C-3	25	23	9,2	17,376
19	B-4	20	18	12,8	17,540	58	C-3	34	29	14,0	17,340
20	B-4	29	27	9,3	17,555	59	C-3	20	19	11,5	17,376
21	B-4	24	20	10,8	17,555	60	C-3	20	19	10,0	17,375
22	B-4	16	13	29,1	17,355	61	C-3	24	—	32,0	17,465
23	B-4	29	18	7,3	17,572	62	C-3	20	—	36,0	17,502
24	B-4	17	15	8,8	17,542	63	C-3	22	—	64,4	17,146
25	B-4	30	28	15,4	17,468	64	C-3	15	—	19,0	17,600
26	B-4	26	26	10,0	17,510	65	C-3	27	24	39,0	17,095
27	B-4	25	26	7,8	17,616	66	C-3	19	18	34,0	17,076
28	B-4	31	29	8,0	17,480	67	C-3	33	29	23,9	17,227
29	B-4	37	30	72,7	16,888	68	C-3	28	25	33,8	17,336
30	B-4	24	23	14,0	17,405	69	C-3	28	25	10,1	17,374
31	C-4	20	19	6,0	17,660	70	C-3	23	21	27,6	17,198
32	C-4	25	22	12,9	17,540	71	C-3	30	25	31,4	17,076
33	C-4	21	18	14,5	17,660	72	C-3	24	23	28,8	17,190
34	C-4	25	19	12,2	17,538	73	C-3	19	17	21,2	17,260
35	C-4	20	19	9,0	17,555	74	C-3	24	24	53,1	16,944
36	C-4	25	24	12,6	17,505	75	C-3	31	26	48,2	17,004
37	C-4	25	20	17,0	17,552	76	C-3	28	27	40,8	17,040
38	C-4	25	21	19,2	17,522	77	C-3	34	31	35,0	17,258
39	C-4	25	20	15,0	17,572	78	C-3	29	27	32,5	17,347

壺（第59図435～440）

総数で126点が出土し、そのうち6点を図化した。435は、口縁部破片である。436は、肩部破片である。外面は粗く、タタキが確認できない。437・438は、胴部破片である。439・440は、底部破片である。

工 青磁（第60図441～448）

総数で19点が出土し、そのうち8点を図化した。441～443は、越州窯I類と呼ばれる碗である。442は、口唇部に浅い切れ込みと外面に条が見られる。破片の状況から、この切れ込みと条は4セドトある輪花碗と思われる。444・445は、越州窯II類と呼ばれる碗である。446～448は、重である。446は、頸部肩部の破片で取っ手が確認できる。447・448は底部破片である。447は、胴部に条が確認できる。

オ 土錐（第60図449～455）

総数で75点が出土し、そのうち7点を図化した。449～452は、長さに長短あるが、中央と両端部の外径に差がなく均一でない。また、449～451は、孔の断面形状が丸い。452は、孔の断面形状が正方形である。453は、孔の大きさと外径の差が小さく、華奢な作りである。454は、中央に比べ両端部の外径が小さい。455は、孔の両端部に比べ中央が細く窄まっている。

カ 炭化種子（第60図456）

1点出土した。自然科学分析の結果、該期の桃核であることがわかった。詳細は、第5章第4節に記載した。



## 6 中世から近世の調査成果

### (1) 概要

主な調査範囲は、平成19年度に調査を行った自然堤防の後背地部分である。IV層が該期の遺物包含層である。礫集積4基を検出した。ただし、IV層下位において古代の遺構・遺物が該期の遺物と混在した。また、平成21年度の調査範囲において遺物包含層は確認できなかったが、該期相当と考えられる礫集積3基を検出した。遺物は、土器、陶磁器、石器、石製品が出土した。

### (2) 遺構（第62図）

#### ア 1号礫集積

自然堤防上のC-11区V層で検出した。長さ約85cm、幅約30cmの範囲に42個の角礫が積まれ、高さ約25cmになる。角礫の重さが最大で1900gであった。石材は、安山岩が最も多く、砂岩が次に続き、少ないが硬質安山岩が3個含まれる。須恵器破片が礫に紛れて出土している。

#### イ 2号礫集積

自然堤防上のD-11区V層で検出した。長さ約1m、幅約35cmの範囲に35個の角礫が積まれ、高さ約35cmになる。角礫の重さが最大で約24kgであった。石材は、安山岩が最も多く、砂岩が次に続き、少ないが凝灰岩、頁岩、滑石が含まれる。土器底部が礫に紛れて出土している。

#### ウ 3号礫集積

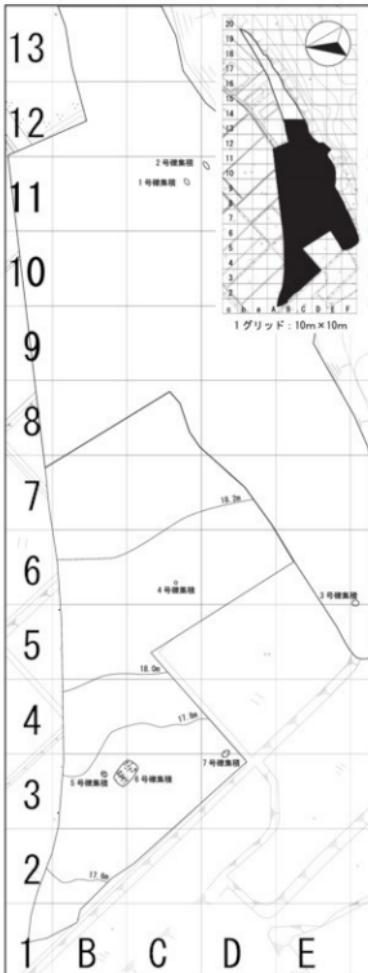
自然堤防上のF-5・6区V層で検出した。長径70cm、短径50cmのほぼ円形に扁平な礫を敷き詰める状態であった。礫の数は17を数えたが、明らかに破断しているために数が増えてしまっている。最初は6個程度であったと思われる。石材は、安山岩が最も多く、砂岩が次に続く。プランの検出を試みたが確認できなかった。礫の広がりは他の遺構と異なり、上面が平坦である。上部に重量物を安定しておくことができる状況であったと考えられる。

#### エ 4号礫集積

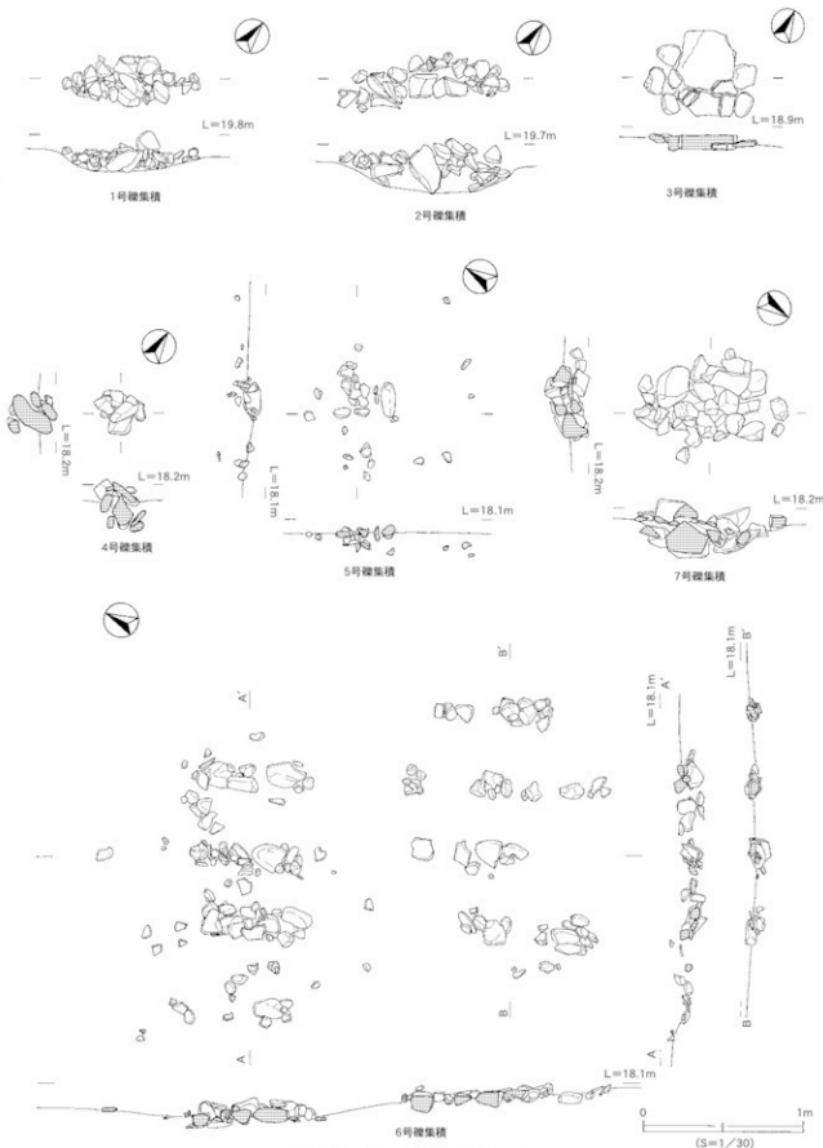
自然堤防の後背地でC-6区IVa層で検出した。縦横約30cm前後の範囲に10個の角礫が積み重なり、高さ約30cmになる。角礫の重さが最大で約5.8kgであった。石材は、砂岩が最も多く、礫岩・頁岩が同数であった。

#### オ 5号礫集積

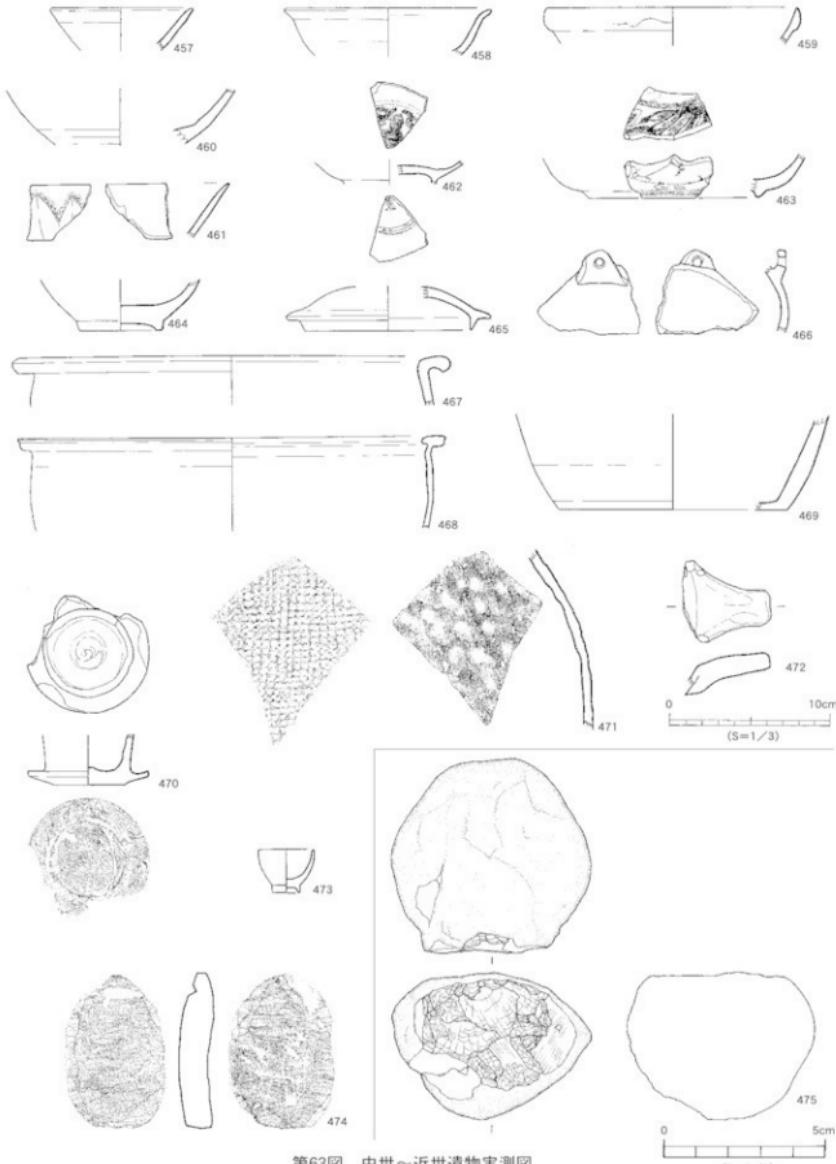
自然堤防の後背地でB-3区IVa層で検出した。縦横約1m前後の範囲に29個の角礫が散在し、最も礫が集中しているところで高さ約20cmになる。角礫の重さが最大で820gであった。石材は頁岩が1個で残りはすべて砂岩であった。須恵器破片が礫に紛れて出土している。



第61図 中世～近世遺構配置図



第62図 中世～近世遺構実測図



第63図 中世～近世遺物実測図

## 力 6号蝶集積

自然堤防の後背地でB・C-3区IVa層で検出した。縦横約3mの傾斜がほとんどない地形の範囲に、およそ南北方向に5条の角礫の並びを確認した。角礫の総数は159個、1個の重さが最大で約4.3kgであった。角礫が集中し最も高さがあるところで約20cmを測る。石材は、砂岩が最も多く、頁岩・礫岩が続く。また、角礫の表面が赤化しているものが多い。他にも土器師、須恵器の破片炭化物が角礫に紛れて出土した。

この遺構は、該期の遺構の中で最も規模が大きく、特徴的な要素を多く含んでいる。そのため、遺構の使われた時代を特定することを目的に、遺構内から出土した炭化物の<sup>14</sup>C年代測定を実施した。その結果、16世紀と17世紀頃の範囲が示された。なお、分析結果の詳細については、第5章自然科学分析を参照されたい。

## キ 7号蝶集積

自然堤防の後背地でD-3・4区IVa層で検出した。長さ95cm、幅70cmの範囲に40個の角礫が積まれ、高さ約45cmになる。角礫の重さが最大で約8kgを越える。石材は、砂岩の占める割合が9割で、残りは頁岩、安山岩、礫岩が見られた。

### (3) 遺物

#### ア 白磁 (第63図457~460)

総数で30点出土し、そのうち4点を図化した。457は、小型の皿で口唇部を尖らせ、口禿げになっている。458は、外反する口縁部をもつ皿である。時期は16世紀後半頃と考えられる。459は、玉縁口縁の特徴をもつ碗である。時期は11世紀後半~12世紀前半頃と考えられる。460は、459の口縁特徴をもつ碗の胴部破片である。

#### イ 青磁 (第63図461)

総数で26点出土し、そのうち1点を図化した。461は、鍋連弁の文様をもつ碗の口縁部である。時期は14~15世紀頃と考えられる。

表18 中世~近世遺物観察表

陶器等

辨別番号	区	層	取上番号	種別	分類	器種	产地	法量 (cm)	胎土の色	釉薬の種類	施釉部位	時期	備考
457	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	-	13.0	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	口禿げ
458	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	-	12.7	-	-	口沿部	13C後半~14C前半	外反口縁
459	C	4	7-B-a	器	白磁	盤	-	11.6	-	-	口縁部	13C後半~14C前半	玉縁口縁
460	C	2	7-B-a	器	白磁	盤	-	-	-	-	口縁部	13C後半~14C前半	459の破片
461	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	-	-	-	-	口縁部	13C後半~14C前半	直唇盤
462	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	10.8	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
463	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	10.6	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
464	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	10.1	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
465	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
466	D	6	7-B	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
467	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
468	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
469	C	8	V-3069	陶器	白磁	盤	窓	14.0	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
470	D	7	1	器	陶器	白磁	白磁窓盤	7.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	白磁窓盤
471	C	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
472	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
473	B	2	7-B-a	器	白磁	盤	窓	12.4	灰褐色	白磁	口沿部	13C後半~14C前半	直唇窓盤
石製品													
辨別番号	区	層位	取上番号	種別	器種	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重 量 (kg)	備考		
474	B	3	6-B-2995	剪方石製品	石材 I	滑石	滑石	9.58	6.27	2.04	213.00		
63	D	3	V-a	剪方石	石材 I	滑石	滑石	5.98	5.98	4.61	191.00		

## ウ 青花・染付 (第63図462・463)

総数で57点出土し、そのうち2点を図化した。462は、器形が碗で、見込みが賑れる蟹頭心の青花である。小野分類によるE類に属し、時期は16世紀後半と考えられている。463は、肥前系の皿で、時期は18世紀後半頃と考えられている。

## エ 陶器 (第63図464~470)

総数で107点出土し、そのうち7点を図化した。464は、蛇の目剥ぎがある龍門寺系の丸碗である。465は、土瓶の蓋である。466は、苗代川系の土瓶の胴部である。時期は18世紀後半~19世紀と考えられている。467は小壺の口縁で、468は片口の注ぎ口のある壺の口縁である。469は壺の底部である。470は、灯明皿受台である。

## オ 須恵質土器 (第63図471)

総数で8点出土し、そのうち1点を図化した。中世の壺の胴部である。

## カ 土師質土器 (第63図472)

総数で6点出土し、そのうち1点を図化した。焙烙の把手である。

## キ 白磁の小壺 (第63図473)

1点のみ出土した。肥前系の小壺で近世以降の新しいものと思われる。

## ク 石製品 (第63図474)

総数で43点出土し、そのうち1点を図化した。滑石製の舟形石製品と考えられる。石鍋を転用したもので右側に口肩部が確認できる。

## ケ 火打ち石 (第63図475)

総数で3点出土し、そのうち1点を図化した。円錐の一端を大きく割り、割れ口の端部一か所に火打ち金を当てていることが形状の観察からわかる。石材は、水晶と考えられる。

## 7 近代の調査成果

### (1) 概要

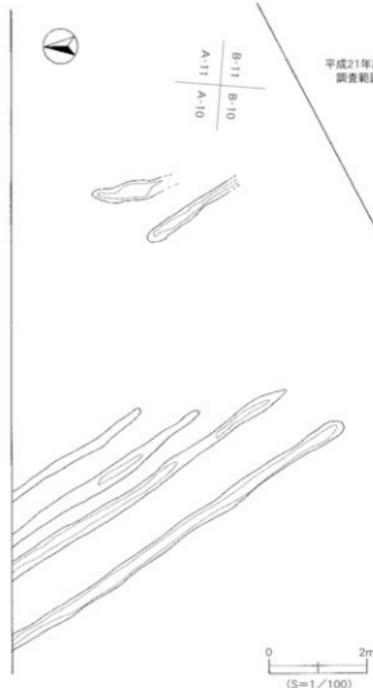
調査範囲は平成19年度に調査を行った自然堤防の後背地部分である。生活面は耕作等によってほとんど残存していない。遺物も表土から出土しているだけで、該期のみを包含する地層はない。遺構は表土直下のIV及びV層で検出した。居住に伴うような遺構等は検出できなかつたが、耕作等での土地利用がうかがわれる畝状遺構や水田跡などの遺構を検出できた。各遺構の配置は第67図のとおりである。

### (2) 遺構

#### ア 畝状遺構（第64図）

A・B-10区及びA-9区のV層で検出した。埋土は灰色土のⅢ層である。6つの畝間状の掘り込みが幅約7mにわたり、最長約8mから最短約1.5mで確認した。各畝間の伸びる方向は、およそ東西方向である。埋土を掘り下げたところ、いずれの遺構も底面が不安定で硬化面ではなく、凹凸が激しい状況であった。底面から検出面

調査区外



第64図 近代畝状遺構実測図

までの高さが著しく低いことから、後世の耕作等によって遺構上部は削平されていると思われる。遺物の出土は、土器の小片が数点のみで、特記するものはない。また、検出面と同じレベルの一部分においてマンガン分を含む水田基盤の広がりを確認した。

#### イ 水田跡（第67図）

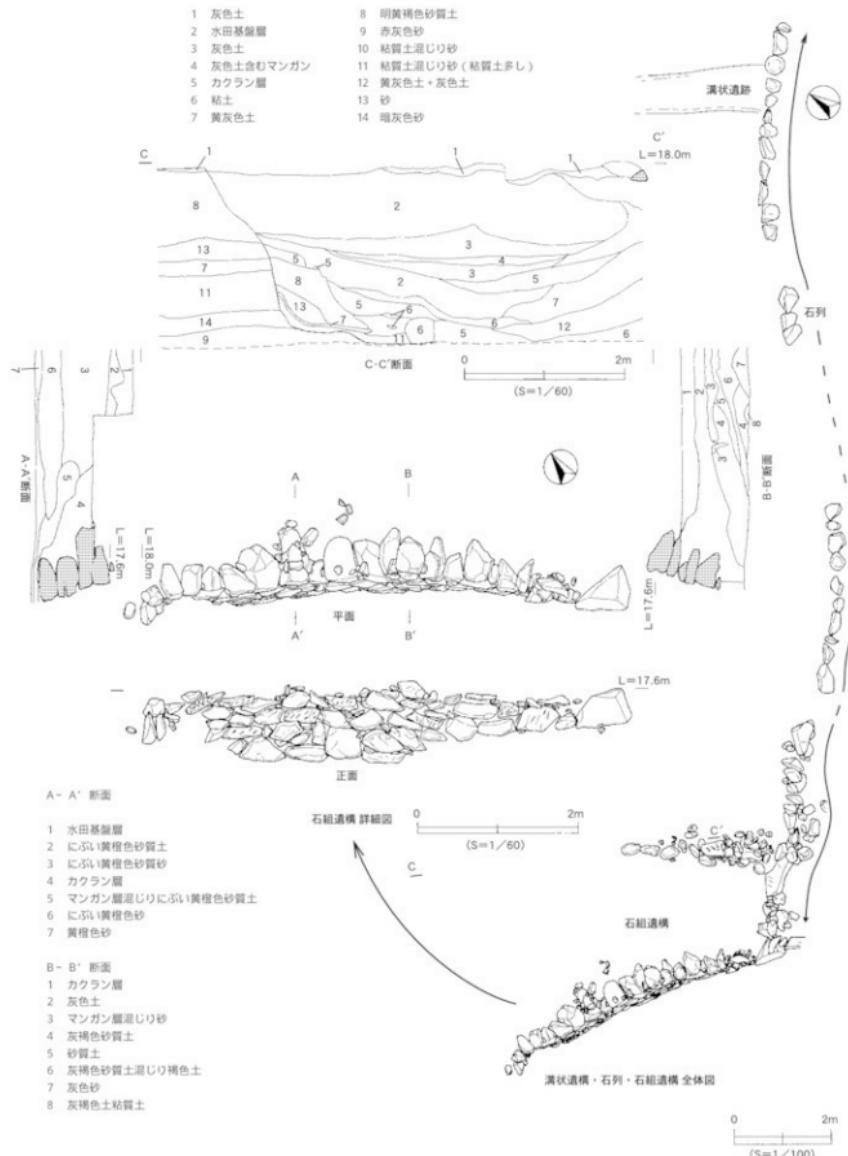
B・C-7・8区V層で検出した。埋土は灰色土のⅢ層である。埋土は、若干の水分を含み粒度が細かく均一で粘質が強い。プランはおよそ東西方向に15m、南北方向に8.5mを測る。プランの南端には後世の耕作等によって削平されたと思われる段差があり、調査前から確認していた。削平される以前はおそらく長方形の遺構であつたと思われる。ベルトを残して掘り下げるとき埋土内に埋土とは異なる土壤がブロック状に混在していることが明らかになった。また、底面近くには、マンガン分の多く含むと思われる基盤が安定して形成していることを確認した。これらのことからこの遺構は水田跡と判断した。また、北端は、レベルが南端に比べ若干高く、拳より大きめの円礫が北端近くに散在していた。これらの円礫は、おそらく北端に沿って並べてあったと思われる。遺構内からは若干の遺物が出土したが、縄文時代から近代のものが混在していた。

#### ウ 溝状遺構（第65図）

C-8区IV層で検出した。この遺構は、埋土上に石列が載っている状況にあり石列が作られる以前に存在していた遺構である。しかし、無色透明のガラス瓶の破片が出土した近接する畝間埋土と同じ色調の埋土であることから畝間と同時期で、なおかつ新しい時代の遺構と判断し、近代の調査に掲載した。

#### エ 石列・石組遺構（第65図）

C-8区、D-6・7区IV層において検出した。C-8区からD-7区にかけての約18mの石列部分とD-6区の幅約7m、高さ約1.6mの石組の部分で構成される遺構である。石列は、川内川の自然堤防とその後背地の境部分に沿うように並び、1つの石の大きさは、大きいもので50cmを越える。石組は、石列より川内川の下流方向に位置し、地形的に石列の位置から石組の位置へ緩やかに傾斜しているところに立地する。石組を構成している石のいくつかには鑿痕が確認できる。ただし、石組みの技法には規則性は見られず、野面積みに近い。石組の最下端は、中心部が深く、左右両端が浅い。最下端が水平にならない石組は、構築物として不自然な印象を受ける。石組の背後には、およそこぶし大の円礫が入れ



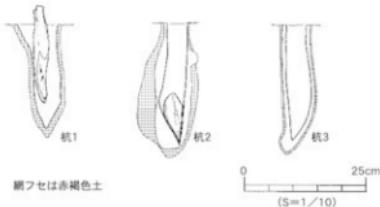
第65図 近代石組遺構実測図

られている状況を確認した。これらは、水分を含んだ土砂によって石組に働く圧力を弱め、石組の崩壊を防ぐために入れた裏込め石と思われる。さらに背後の土層を確認したところ石組の正面に対応する位置に不安定な地層が断面で確認できた。これらのことと総合的に考えると、この遺構は応急的な土木工事の手法によって構築された石組と判断した。なお、C-8区の石列部分の周辺から青色のガラス瓶破片が出土し、溝状遺構との関係から新しい時代の遺構と判断し、近代の調査に掲載した。

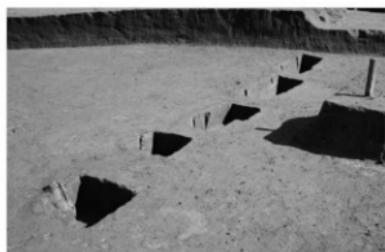
#### 才 杭痕（第66図）

表土剥ぎ直後に検出し、最下部はIV・V層上面に達していた。また、時代を示す遺物や他の遺構との関連が認められないことから、杭を打たれた時代の特定が困難であるため近代の調査に掲載した。

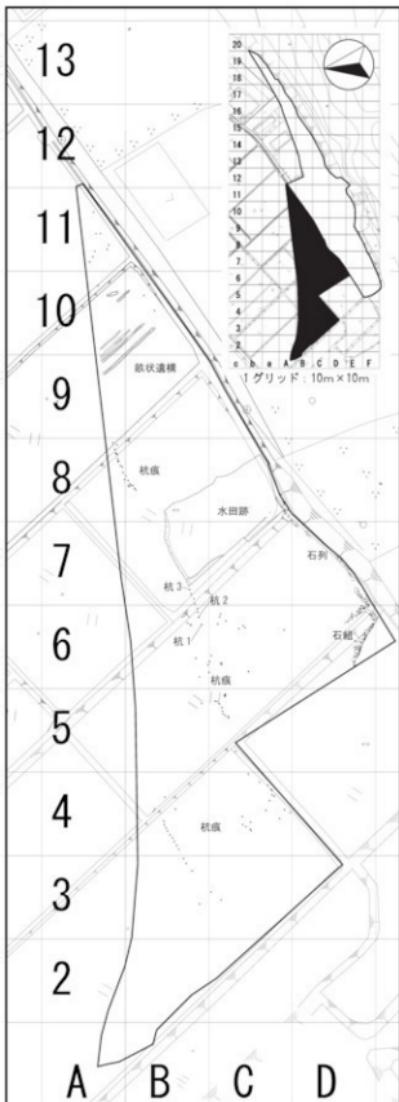
これらの杭は、平成19年度に調査した範囲全体にわたって直線上に並ぶような傾向が見られた。また、杭と杭の間隔は、およそ0.5m以上1m未満であった。さらに、杭の直径は、その痕跡から約5cm程度であると推定した。B-6・7区においては、8つの杭痕をほぼ直線上に検出し、半截を試みるなどして詳細な記録を行った。これらの中でも杭1・2の杭痕から杭が出土した。杭2は先端部のみであるが、どちらも木質の杭で、先端部を銳利に尖らせる加工が施されていた。



第66図 近代杭痕実測図



杭痕（手前が杭1）



第67図 近代遺構配置図

## 第4章 山崎野町跡Aの調査

### 第1節 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法

山崎野町跡Aは、およそ60mを隔てて調査区が南北に分かれている。両調査区を、それぞれ北側・南側調査区として、平成21年11月の試掘調査（計8トレンチ）結果をもとに、本調査を平成22年1月～3月と7月に実施した（実働58日）。

調査にあたっては、公共座標をもとにグリッドを設定し、10m単位で南から北方向に1, 2, 3 …、東から西方向にA, B, C …とした。座標の基準は山崎橋架け替え工事のために設定された道路基点223 K E 31- 2と225 N 13とし 同杭227 N 14で入力値及び測定値が正しいことを確認したのち、調査区内にグリッド杭を設置した。

それぞれの調査区を並行する形で調査を進めたが、1月～3月は北側を、7月は南側を重点的に調査した。

北側調査区では、近世以降の建築物の基礎や客土等の影響のため広い範囲で層が乱れていることや、礎石と思われる遺構があることが試掘調査で判明していたため、長軸方向に大きいくるんを設定し、遺構を検出したところから調査範囲を広げていった。

南側調査区は、北側に比べて層の乱れは少なく縄文時代の包含層が残っていることが判明していたため、層の色調や土質の差を見ながら層ごとに調査を進めた。

#### 2 遺構の認定と検出方法

北側調査区では、表土除去開始後すぐにまとまった石列やピットが現れた。平面で調査範囲を広げながら、色調の違いや土質の差を見極め、平板で配置を確認した上で掘立柱建物跡1棟、礎石建物跡3棟、布基礎2基（1基は大型の礎石建物跡の中に位置する。）を検出した。これらの遺構は、層位から建築時期を特定することはできなかったが、周辺の出土遺物をもとに掘立柱建物跡は中世、その他は近世の遺構と判断した。

南側調査区では北側調査区のような規模の大きい遺構の検出はなかったが、J- 8区で袋状口縁を持つ壺(662)が押しつぶされたような状況で出土した。周囲を精査したが掘込みは確認できなかった。

#### 3 発掘調査経過

調査経過については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で示す。

平成21年度

（1月）

調査開始、表土剥ぎ、両調査区掘下げ

公共座標値確認、グリッド杭打ち

（2月）

### 北側調査区

トレンチ設定（9T・10T）

掘下げ、土層断面写真撮影、実測

拡張掘下げ、出土状況写真撮影

縄文土器、近世遺物等取上げ

ピット群検出、周辺精查、配置実測、写真撮影

掘立柱建物跡検出、実測、半裁

井戸検出、実測、写真撮影、周辺掘下げ

石垣検出、写真撮影

P-16区石列検出

### 南側調査区

グリッド杭打ち、表土剥ぎ、掘下げ

（3月）

鹿児島大学森脇宏教授調査指導（3/8）

国交省川内川河川事務所との引渡し協議（3/18）

### 北側調査区

拡張掘下げ、井戸、礎石建物跡実測

集石写真撮影・実測

掘立柱建物跡完掘・写真撮影・実測

押型文土器出土状況実測

掘立柱建物跡配置実測

遺構配置図実測

空撮準備・空撮（3/12）

11T・12T掘下げ、土層断面実測

布基礎、礎石建物跡検出・実測

II層上面コンターデータ収集

完掘状況写真撮影

礎石建物跡実測

遺跡内、境界等養生

### 南側調査区

グリッド杭打ち、表土剥ぎ、掘下げ、遺物取上げ

遺跡内、境界等養生

### 平成22年度

（7月）

国交省川内川河川事務所との引渡し協議（7/22）

### 北側調査区

礎石写真撮影・実測

Q-15区下層確認トレンチ設定・掘下げ

埋戻し

### 南側調査区

グリッド杭打ち

下層確認トレンチ設定・掘下げ

II～III層掘下げ、遺物取上げ、写真撮影

K-8石斧出土状況写真撮影

土層断面図作成

IV層上面コンターデータ収集

埋戻し

#### 4 遺物の分類

##### (1) 土器

本遺跡では、縄文時代早期から古代にかけての土器2,000点あまりが出土した。遺物は、各時代の特徴を持つ土器が同じ層位に混在する状態で出土しており、明確

に分層することが困難であった。そのため、器形と文様などの特徴をもとに、縄文時代から古墳時代までの土器を16の類に分けて報告する。

表19 土器分類表

類	実測図	特徴	類	実測図	特徴
1		横円又は山形の縄文原体を回転施文する。 【押型文土器】	9		胎土に滑石を多く含み、銀色っぽい色調でなめらかな触感をもつ。指ナデ文様の間に二叉状の刺突具で押し引き文様を施す。 【並木式土器】
2		口縁部に貝殻等による連続刺突を施し、胴部に貝殻で余線や押引などの文様を施す。押引・點付けの有無で細分した。 【無し：塞ノ神式土器、有り：苦浜式土器】	10		指あるいは工具等を用いて太い沈線・凹線を描く。赤褐色系の胎土のものが多い。 【出水式土器】
3		櫛描き状の幾何学文様を器面全体に施す。 【曾須式土器】	11		断面が「く」字状の口縁を持ち、胴部に磨消し縄文が見られる。 【西平式土器】
4		貝殻による連点文や幾何学的な微細突帯による文様を施す。 【深浦式土器】	12		器面内外に貝殻条痕やナデなどの調整を施す。全体として粗いつくりである。深鉢が多い。 【粗製深鉢】
5		口縁端部内外面に粘土紐を貼付し、そこに「E」字状刺突を施す。また、肉厚の口縁上にも「E」字状刺突を施し、内面には縄文を描く。 【大歳山式土器】	13		内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。器種は浅鉢である。 【精製浅鉢】
6		内外面に貝殻による条痕を施す。 【条痕文土器】	14		口縁部から胴部にかけて、二条あるいは一条の刻目突帯を持つ。 【刻目突帯文土器】
7		キャリバー状の口縁を持ち、全体に粗く硬い燃りの織文を施す。口縁には刺突を施した突帯を有する。 【船元式土器】	15		上げ底の底部から胴部・口縁部にかけて直線的に広がり、内外面に工具によるナデ調整を施す。 【襄形土器】
8		貼り付け文、沈線、刺突による多色文様が描かれる。口縁部に突帯を巡らし、口縁部にも刺突を施す。 【春日式土器】	16		尖底の底部から胴部へ大きくふくらみ、綿まつ頭部を経て袋状の口縁を持つ。 【壺形土器】

### (2) 陶磁器類

陶磁器類は、主に北側調査区で約2,150点出土した。器類・器種・器形については、『四谷三丁目遺跡』別冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」(東京消防庁1991)を基本とし、細部については地域性や民族例を考慮して分類した。また、釉薬・胎土の色調については客観性を持たせるため『新版標準土色帖(2000年版)』農林水産省(農林水産技術会議事務所)を参考にした。

### (3) 石器

石器は、南北両調査区で約900点出土した。時代ごとの区分は層が乱れていることもあり困難であった。土器の出土状況を見ると北側調査区では大半が早期、南側調査区では早期ではなく、前期から晩期までの土器形式がII層からIII層にかけて混在する状況であった。そこで、北側調査区出土の石器は縄文時代早期として、南側調査区については前期から晩期までを一括して掲載した。

これらの石器を、器種により表20のように分類した。また、石材については石材產地を推定できる黒曜石については細分化を試み、表5に示すとおり分類した。

表20 石器器種分類表

器種	定義
打製石鏃	矢の先端に装着する狩猟具。ガラス質石材から安山岩まで多種の石材を使用し、素材剥片に押圧剝離により二次加工を施し整形しているもの。多様な形態がみられ細分できる。
石匙	つまみ部を有することを第一の特徴とする。素材剥片に押圧剝離により整形され刃部はていねいな二次加工が施されたもの。
スクレイバー	剥片の縁片に二次加工を施して刃部としたもの。多様な石材が使用され、形態も多種である。
二次加工剥片	剥片の縁辺の一部に二次加工が認められるもの。スクレイバーと判断した以外のもの。
石核	素材剥片を剥離したもの。礫素材のものや剥片素材のものがあり、打面と作業面との関係も含めて多種の形態がある。
石斧	全体あるいは刃部を剥離や研磨により形成した伐採具あるいは木材の加工工具。
敲石	河原の円錐等を使用し、敲打の結果と考えられる割れや敲打痕を持つもの。
磨石	河原の円錐等を使用し、「磨る」作業によってできたと考えられる平滑な面を持つもの。
石錘	扁平な小円錐の両端に敲打や小剥離による抉りをつけた石器。
石皿	植物質食料加工工具。磨石類により堅果類の製粉作業化に使用されたもの。厚みのある大型礫のほか、使用により中央部が皿状に凹むものがある。
輕石製品	輕石に穿孔や何らかの道具を使用して凹線などを施したもの。
礫器	扁平な礫の縁辺に、粗雑な剥離で刃部を形成したもの。

### 第2節 層序

山崎野町跡Aは、川内川の中流域で久富木川と合流する地点に所在し、三方を川で囲まれた河岸段丘上に位置する。

北側調査区は、20年ほど前に製材所の解体工事が行われた際も含め、過去に広範囲な擾乱を受けている。また、河川の氾濫による砂泥の堆積層が多数混在しており、遺物の出土状況も縄文時代から近世までの遺物がほぼ同レベルで検出される状況で、明確な分層が困難であった。一方南側調査区では、部分的に良好な堆積状況が見られたが、表土除去後すぐに縄文時代晩期相当の遺物がみられ、各層の土質や色調なども北側調査区とは異なる印象を受けた。そのため、平成21年度調査の概要報告では、遺跡全体をとらえて表土、淡黄褐色砂質土、淡灰褐色土、灰褐色砂質土の4層で報告していたものを、平成22年7月の調査結果を踏まえて、北側調査区と南側調査区をそれぞれ別のものとして表21のように設定した。

また、南側調査区の調査ではVI層に含まれる粒子中に火山灰と思われるものを確認した。この粒子は、科学分析によりアカホヤ火山灰と推定された。詳細は第5章で述べる。

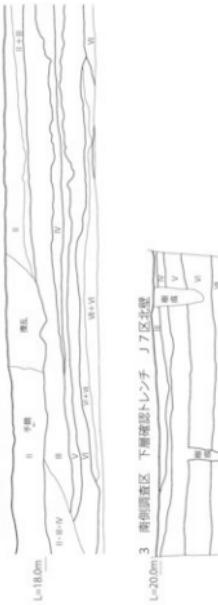


発掘作業の様子

1 北剖面調查区 南南西向



2 北剖面調查区 下層確認レシッチ U17区東縫



3 南剖面調查区 下層確認レシッチ J7区北縫



4 南剖面調查区 下層確認レシッチ K7・8区北縫



5 南剖面調查区 下層確認レシッチ K8区東縫



表21 山崎野町跡A基本土層

地質層	色調・土質	備考
I層	赤褐色土 砂質等の入る砂質	シラカシ シラカシの根が土中に付着
II層	黄褐色土 砂質等の入る砂質	砂質等 砂質等の入る砂質
III層	茶褐色の質土 砂質等	砂質等 砂質等
IV層	灰褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
V層	褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
VI層	褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
VII層	褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
VIII層	褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
IX層	灰土 砂質等	砂質等 砂質等
X層	褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
XI層	灰白色沙質土 アガベや夾山脈含む	アガベや夾山脈含む アガベや夾山脈含む
XII層	灰褐色沙質土 砂質等	砂質等 砂質等
XIII層	灰白色沙質土 ミナチ	ミナチ

0  
(5m/100)

第68図 土層断面図

### 第3節 調査成果

#### 1 繩文時代早期の調査成果

##### (1) 概要

縄文時代早期の遺構は集石1基のみで、遺物は北側調査区で出土した1類、2類の土器である。南側調査区では早期の土器を確認できなかったことや、北側調査区で出土した土器は早期がほとんどで、前期以降はわずかしか出土しなかったことから、早期の分布範囲は北側調査区内と考えた。石器については北側調査区のものを早期、南側調査区のものを前期から晩期の遺物として掲載する。

##### (2) 遺構（第70図）

###### 集石

R-17区で検出され、52個の石を確認した。被熱による赤変した石がみられたが、炭化物や鉛込みは確認できなかった。石材は主に安山岩で、転運が多い。礫は60cm × 70cmの範囲内に集中し、最大のものは15cm × 10cm、平均的なものでこぶし大程度であった。平地に礫を集めただような状態で、調理など生活の場として使用された可能性は低い。周辺では2-a類土器が出土している。

##### (3) 遺物

###### ア 土器

早期土器は北側調査区から出土した。器形的特徴を確実につかめる口縁部が少ないため、押型文以外の土器は貝殻文土器で3つの類に細分した。これらの中から接合、復元できたものも含めて22点を図化した。

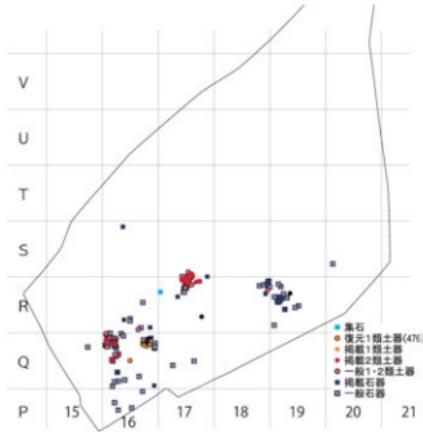
###### 第1類土器（第71図476～479）

外面に楕円・山形の押型文を施すものである。476はQ-16区で検出され、口縁部付近から底部までがまとまって出土した。胴部の最大径はおよそ35cmで、外面全体に山形・楕円の押型文を交互に施している。内面はヘラケグリ後にナデ調整、底部は径7.5-8.0cmでやや上げ気味の平底である。477は山形、478は楕円押型文の胴部、479は楕円押型文の底部である。

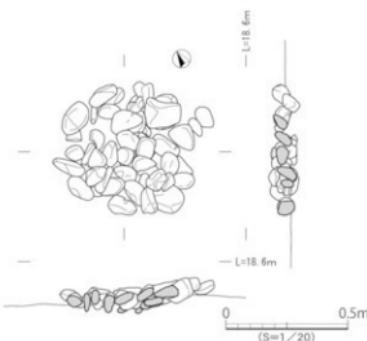
###### 第2類土器（第71図480～第72図497）

###### 2-a類

胴部のみである。直線的な貝殻条痕が残る。480・481は2条の貝殻条痕を横位に巡らせるものであるが、480には上部に貝殻で押引した部分が一部残る。482～484は横位・縱位の条痕が認められる。485～487は480と同様の押引を施す。488は胴部への刺突と角度をつけて曲がる条痕を施し、さらにその上に工具等によるナデが薄く残る。



第69図 縄文時代早期遺構配置・遺物出土状況図



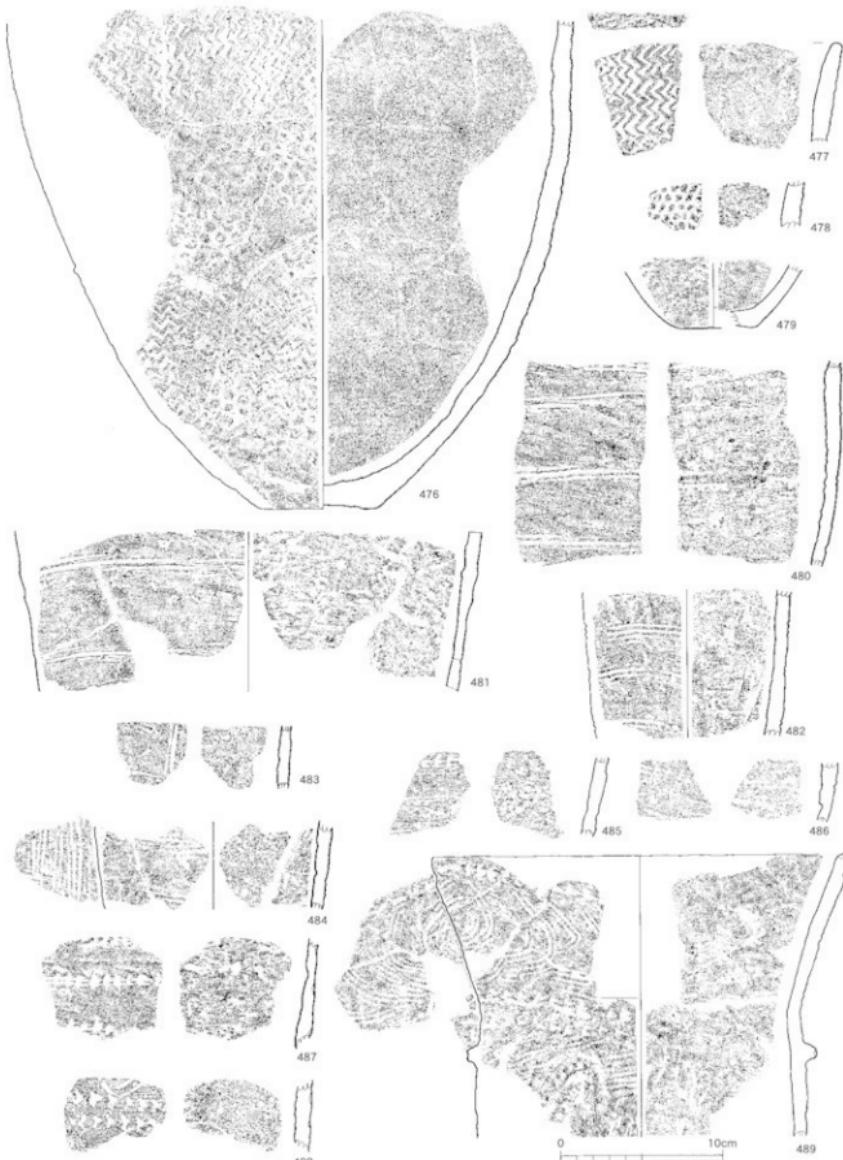
第70図 縄文時代早期集石遺構実測図

###### 2-b類

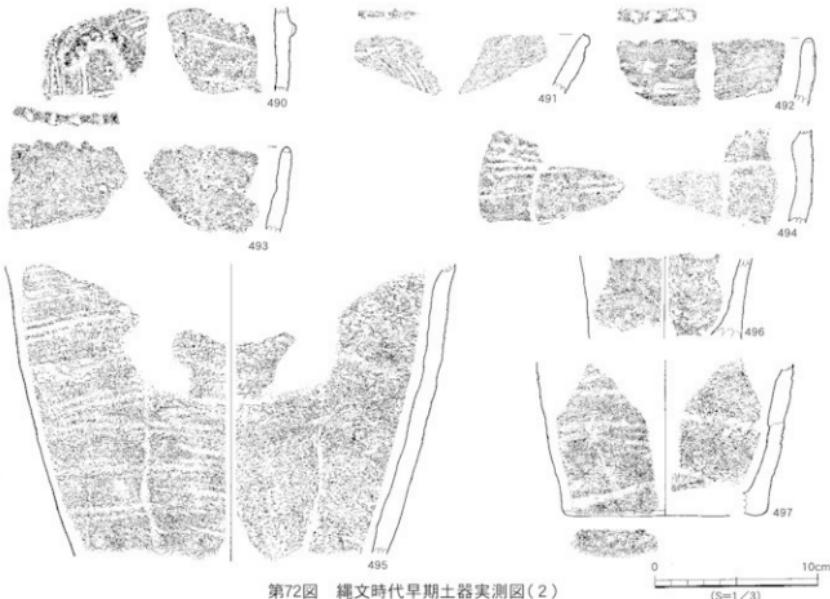
曲線的な貝殻条痕を施し、口唇部に刺突が残るものである。489～491は同一個体のものと思われる。頭部から口縁部にかけて条痕が残り、その上下に押引で境界を作れる。口唇部にはかすかだが刺突が認められる。492・493は刺突を持つ口縁部である。

###### 2-c類

494～496は2-a類よりも密に直線的な貝殻条痕を施すが、雰囲気を受ける。497は磨滅しているがかすかに同様の条痕が残る。



第71図 繩文時代早期土器実測図(1)



第72図 繩文時代早期土器実測図(2)

表22 繩文時代早期土器観察表

博物館	番号	出土区	層	取上番号	分類	部位	文様	調整		色調		胎土		参考	
								外	内	外	内	石英	長石	鈣長石	
1	476	Q-16	B	—	1 上縁～腹部	山形・円錐型文	ナデ	ナデ	ナデ	にない褐色	浅黄褐色	○	○	○	
	477	Q-16	B	96		山形網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々黄褐色	浅黄褐色	○	○	○	
	478	R-19	N	70		楕円網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々黄褐色	浅黄褐色	○	○	○	
	479	R-17	N	202	2a 胴部	楕円網目文	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	浅黄褐色	○	○	○	
	480	R-17	N	230		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々黄褐色	浅黄褐色	○	○	○	火山ガラス
	481	R-17	N	238		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	黃褐色	○	○	○	火山ガラス
	482	R-17	N	241		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	暗赤褐色	○	○	○	火山ガラス
	483	S-17	N	264		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	暗赤褐色	○	○	○	火山ガラス
	484	R-17	N	269		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	暗赤褐色	○	○	○	火山ガラス
	485	R-17	N	270		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	486	R-17	N	247	2b 上縁～底部	貝殻網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	487	R-17	N	225		貝殻網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	488	R-17	N	233		貝殻網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	489	Q-16	N	80		貝殻網目文	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
				213											
				249											
				250											
				251											
				252											
				253											
				254											
2c	490	R-17	B	255	2c 胴部	貝殻条板 文引文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々赤褐色	褐色	○	○	○	火山ガラス
	491	R-19	B	214		貝殻条板 各種文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	褐色	○	○	○	火山ガラス
	492	R-17	B	263		工具柄先文	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	褐色	○	○	○	火山ガラス
	493	R-17	N	173	2c 底部	貝殻網目文	ナデ	ナデ	ナデ	に云々褐色	褐色	○	○	○	火山ガラス
	494	Q-16	N	81		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	495	Q-16	N	72		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	○	○	○	火山ガラス
	496	Q-16	N	42	2c 底部	貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	褐色	○	○	○	
	497	Q-16	B	43		貝殻条板文	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	暗褐色	○	○	○	
				13											

#### イ 石器

石器は南北調査区合わせて900点あまり出土した。これらの中で、土器の出土状況から考えて北側調査区で出土しているものを早期石器とし、20点を図化した。

#### 打製石鏽（第73図498～500）

498・499は基部がわずかに弯曲するもので、498では右側縁、499では左側縁の一部が抉られる。この抉りは着装と関連する可能性も考えられ、注目したい。500の基部は深く抉られ、先端も鋭利に仕上げている。

#### 石匙（第73図501・502）

501は刃部の一部を欠くが、正面右側が折れている両面調整がなされ、つまみもしっかりしてあり丁寧に仕上げられている。502は素材剥片の形状を生かしたもので、つまみを形成する抉りを結ぶ線と刃部の線が斜めに交わる形状である。刃部は直線状に仕上げている。

#### 二次加工剥片（第73図503～505）

503は腹面下部から背面先端部に二次加工、504は正面下部に微細な剥離が認められる。505は右側縁、下端部に二次加工跡があり、レンズ状の断面形を呈している。

#### 原縞（第74図506）

腰岳産黒曜石とみられる。縦6.5cm、横6cm、厚さ4cmを測る。

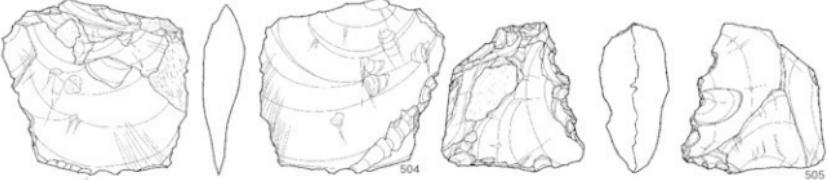
#### 磨製・打製石斧（第74図507・508）

507は磨製石斧である。右側面と裏面に残る摩滅痕は着柄によると思われる。刃部の刃潰れは激しく、伐採機能喪失後は敲打具として再利用されたと思われる。508は打製石斧である。方形の縛の縁辺を粗く剥離している。

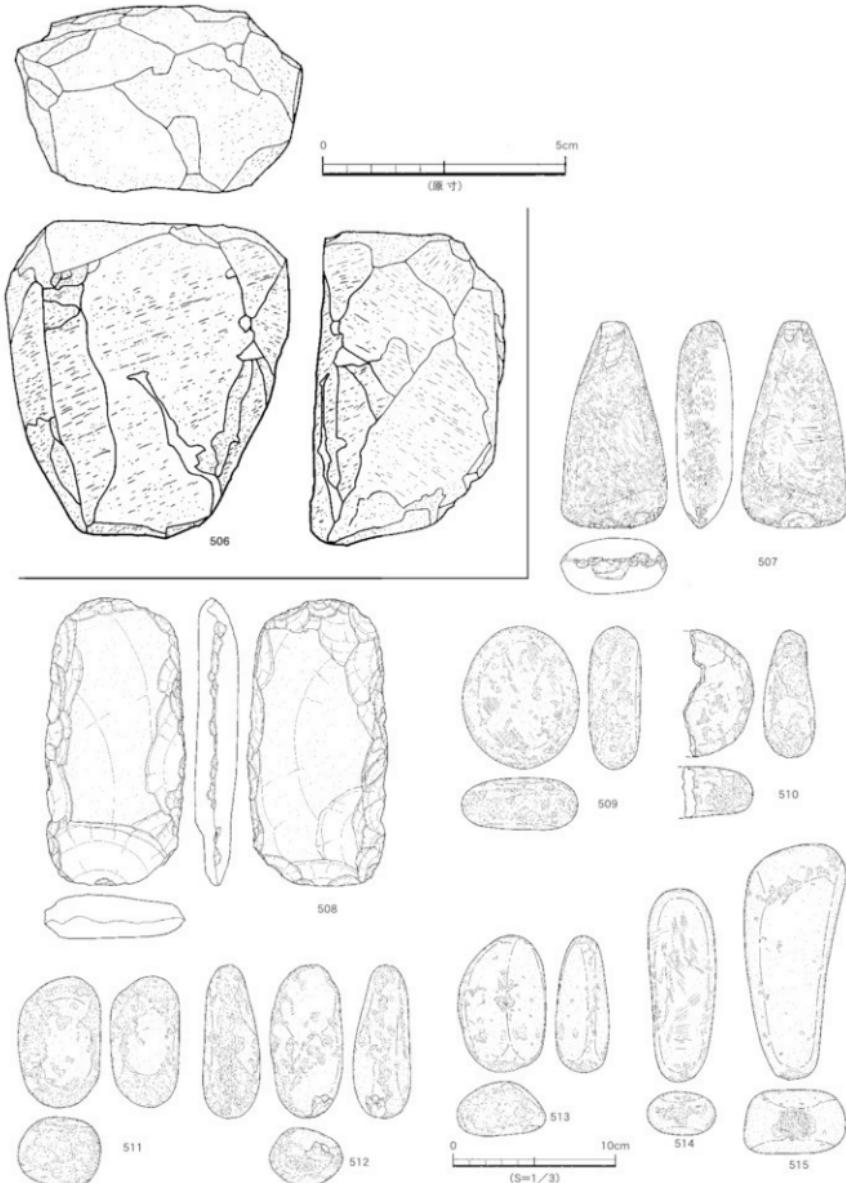
#### 敲石（第74図509～第75図516）

509・510は平坦面を持つ円縛もしくは楕円縛を用いたもので、平坦面は摩耗し、側縁部に敲

打痕がある。



第73図 繩文時代早期石器実測図(1)

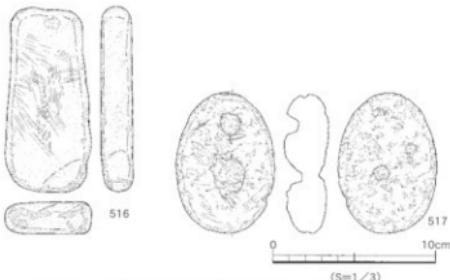


第74図 繩文時代早期石器実測図(2)

打痕が残る。511～513は棒状に近い縦の両端を敲打面としている。514・515は棒状の縦を研磨し、手になじむ形状に仕上げている。いずれも両端に敲打痕が残る。516は厚さ1cmの板石を隅丸方形状に加工したもので、下部に敲打痕が残る。

#### 軽石製品（第75図517）

517は軽石を構円の円盤状に加工し、平坦部に2か所の穿孔を試みている。中央に近い方は裏面からも穿孔を試みた痕跡が残り、製作途中ものと思われる。



第75図 繩文時代早期石器実測図 (3)

表23 繩文時代早期石器観察表

※重量の( )は欠損しているものを示す。

種別	番号	出土地区	期	取上番号	器種	石材 I	石材 II	最大長 (cm)	幅大横 (cm)	幅大厚 (cm)	重量 (g)	備考
73	498	Q-16	N	99	打製石錐	OB	I	2.1	1.5	0.4	1.0	
	499	R-16	N	180	打製石錐	砂岩	-	2.1	1.9	0.6	(1.9)	
	500	Q-16	N	95	打製石錐	OB	II	2.1	1.5	0.4	0.7	
	501	R-19	B	26	石錐	OB	N	2.8	4.1	0.9	(5.1)	
	502	S-16	B	25	石錐	チャート	-	3.3	4.2	1.1	(13.2)	
	503	S-17	B	74	二次加工剥片	チャート	-	5.9	4.7	1.0	24.8	
	504	R-19	B	148	二次加工剥片	OB	I	3.7	3.8	0.9	11.0	
	505	R-18	B	65	二次加工剥片	チャバク	-	3.1	2.9	1.4	9.8	
	506	R-17	N	65	打製石斧	OB	N	6.5	3.8	2.8	150.0	
	507	R-19	B	49	磨擦石斧	砂岩	-	12.7	6.4	2.4	390	
74	508	Q-16	B	2	打製石斧	白泥	-	17.7	8.5	2.6	580	
	509	Q-16	B	一絆	磨擦石	安山岩	-	9.3	7.1	3.1	300	
	510	R-17	N	206	磨擦石	安山岩	-	7.7	4.3	3.1	(120.0)	
	511	3-T	I	一絆	磨擦石	安山岩	-	8.0	5.1	4.1	240	
	512	R-19	B	34	磨擦石	安山岩	-	9.9	4.5	3.5	180.0	
	513	R-16	N	174	磨擦石	安山岩	-	8.3	5.4	3.2	210	
75	514	R-18	B	58	磨擦石	砂岩	-	11.8	4.2	2.2	210	
	515	R-18	B	67	磨擦石	安山岩	-	14.3	6.7	3.9	480	
	516	Q-16	B	53	磨擦石	安山岩	-	11.2	5.3	2.0	230	
	517	Q-16	N	141	軽石製品A	軽石	-	8.5	6.0	2.7	60.0	

#### 2 繩文時代前期から晩期の調査成果

##### (1) 概要

繩文時代の前期以降については、遺構は検出されず、遺物も北側調査区ではわずかに見られた程度であった。南側調査区では前期から後期にかけての遺物が主にⅢ層から、後期から晩期にかけての遺物が主にⅡ層から出土した。しかし、層位的には同等のレベルでも前期の遺物と晩期の遺物が見られるため、前期から晩期を一括りにして、器形や文様などの特徴をもとに13の類に分けてみた。ここではその中から63点を図化した。

##### (2) 遺物

###### ア 土器

###### 3 類土器（第77図518～520）

口縁～胴部に櫛描き状の文様が見られるものである。518は口縁部である。明瞭な沈線が施され、口肩部には細かい連続刺突が施される。519・520は胴部で、四角文と思われる沈線を施す。

#### 4 類土器（第77図521～第78図530）

貝殻による連点文や幾何学的な微細突帯による文様を施すもので、115点出土した。

521・522は貝殻腹縫による刺突で連点文をつけるものである。共に外面に縦位・横位と斜位の各方向に2列の連点文を施す。522は破片の縁が摩滅していることから、壊れたあとに流水の影響を受けたと考えられる。523・524は微隆起突帯とその周囲に巡らす数条の沈線で幾何学文様を作る。525・526は口縁～胴部の破片である。沈線の描き方からこの類が近いと判断したが、出土区が北側調査区であるため、この類に属さない可能性もある。沈線内に白色の微粒子粘質土が残存している。遺跡周辺や包含層内の土壤とは異なるもので、白色顔料の可能性もある。527・528は工具による条痕をつけた後に微隆起突帯を口縁～胴部に巡らす。527の口縁付近内面には、抉るような条痕が見られる。外面には煤が付着している。529・530は、文様及び胎土からこの類に属すると思われるものである。529はやや内傾する口縁部、530は尖底の底部である。

5類土器（第78図531）

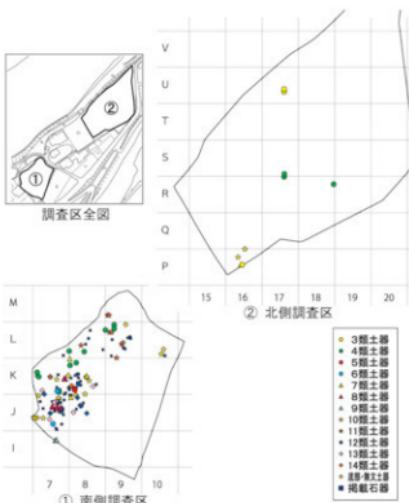
口縁部だけ5点出土した中から、接合した1点を図化した。口縁部が肥厚し、口脣部には「 $\Sigma$ 」字状刺突を施し、口縁内面には縞文、外面には三角突帯に「 $\Sigma$ 」字状刺突を施す。胎土にはわずかながら細かい雲母や火山ガラスが含まれてあり，在地の土を用いた可能性も考えられる。

6類土器（第78図532～534）

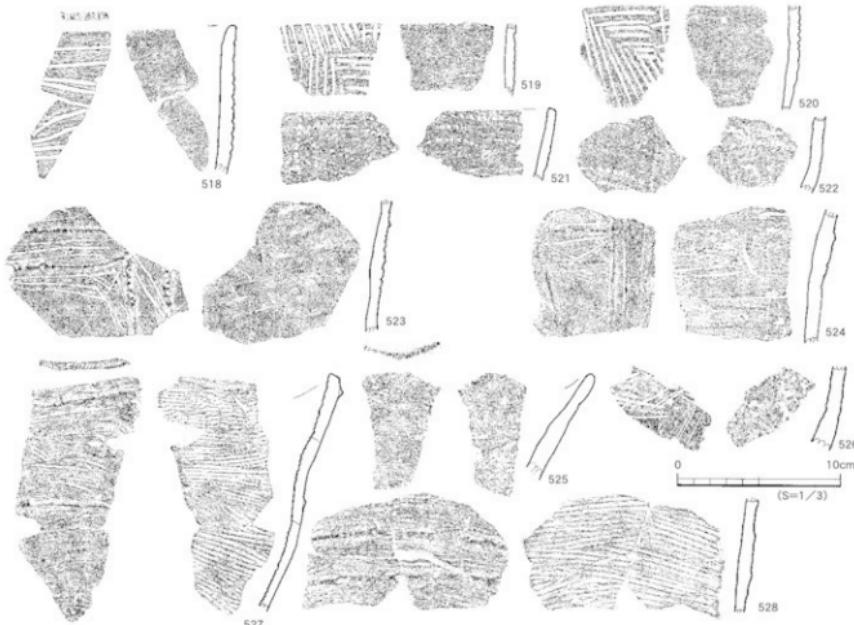
外外面に条痕を施すもので、外面には縦位の深い条痕、内面には横位・斜位の条痕が見られる。532・533は外面の条痕内に煤が付着していた。534から試料を採取し $^{14}C$ 年代測定をしたところ相応の時期判定が得られた（第5章参照）。

7類土器（第78図535・536）

全体に粗く硬い燃りの縞文を施す。535は内弯する口縁部で、工具による刺突を持つ突帯が1条巡り内側には斜位の縞文が施される。536は頸部で、殻頂圧痕を施す。



第76図 縄文時代前期～晩期遺物出土状況図



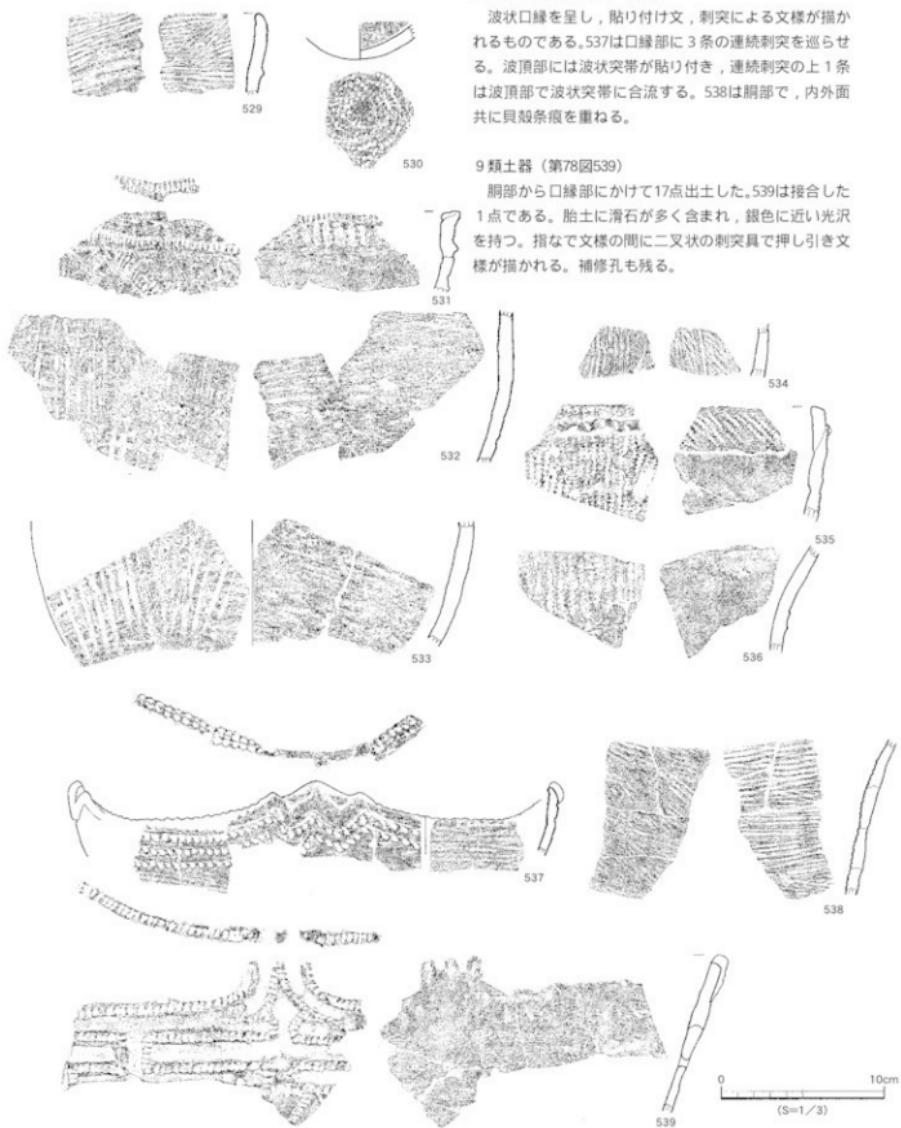
第77図 縄文時代前期～晩期土器実測図(1)

8類土器（第78図537・538）

波状口縁を呈し、貼り付け文、刺突による文様が描かれるものである。537は口縁部に3条の連続刺突を巡らせ、波頂部には波状突帯が貼り付き、連続刺突の上1条は波頂部で波状突帯に合流する。538は胴部で、内外面共に貝殻条痕を重ねる。

9類土器（第78図539）

胴部から口縁部にかけて17点出土した。539は接合した1点である。胎土に滑石が多く含まれ、銀色に近い光沢を持つ。指なで文様の間に二叉状の刺突具で押し引き文様が描かれる。補修孔も残る。



第78図 繩文時代前期～晩期土器実測図(2)

10類土器（第79図540～548）

指あるいは工具等を用いて太い沈線・凹線を描くものを一括した。540ははっきりとした横位の沈線で「口」を描き、中にも数条の沈線を残す。541はへらなどにより流線型の凸部を描く。口唇部には爪または竹管による刻みが入る。542は口縁から頸部にかけて太い凹線が入る。543は口縁部に爪形の連続刺突を施す皿である。544はねじり紐状の口唇を持ち、口縁部に短く深い沈線を斜位に刻む。545は1条の沈線で構円に近い文様を描く。546～548は底部である。546は網代底で、立ちあがりは少しひびれた後直線状に聞く。547は立ちあがりに斜位の筋痕が認められる。548はやや丸底で立ちあがりにへら等で押えた跡が残る。

11類土器（第79図549～554）

口縁部に縄文を施し、さらに沈線を巡らせるものと、それにつながると思われる胴部・底部をまとめた。549は内外面をミガキ調整し、口縁部にそれぞれ工具を使い分けた2条の沈線を施す。上位の沈線は太く、波状で、継ぎ目を濁すような刺突が入る。下位の沈線は細く、直線状に巡る。下位の沈線の下には弧状の烈点が加えられる。550は胴部で、2条の細かい沈線を1つの単位として横位・斜位に走らせる。551・552は、549・550よりも時期的に新しいと思われる口縁部である。551は口縁部が大きく外反し、断面は逆「く」字状に作られる。口縁外部は縄文を施した後、3条の沈線を巡らす。口縁内部は指押えによる凹線が入る。552は、口縁外部に細い沈線が



第79図 縄文時代前期～晩期土器実測図(3)

5条入るが、互いに平行ではなく、端が切れるものもある。口縁内部は剥落し、外部は接合面で剥離している。剥離面には接合痕が明瞭に残る。553・554はいずれも上げ底の底部である。立ち上がりはそれぞれ内弯・直立と異なるが、いずれも縦位の貝殻腹縁による条痕が施される。底部にも全面に同様の条痕が施され、553の方が大きめの貝を使用している。

#### 12類土器（第80図555～561）

器内外に貝殻条痕やナデなどの調整を施すものを一括した。555は玉縁状の口縁で粗い3条の沈線と突帯が残る。556～558は口唇部をナデているが、556は平坦に仕上げられ、ほかはやや粗い仕上げである。559は胴部最大径部で逆「く」字状に屈曲する。内面に一部削た跡が残る。560・561は内面にミガキ調整が施される半粗半精土器の胴部である。561は内面が煤で丁寧に磨きあげられている。

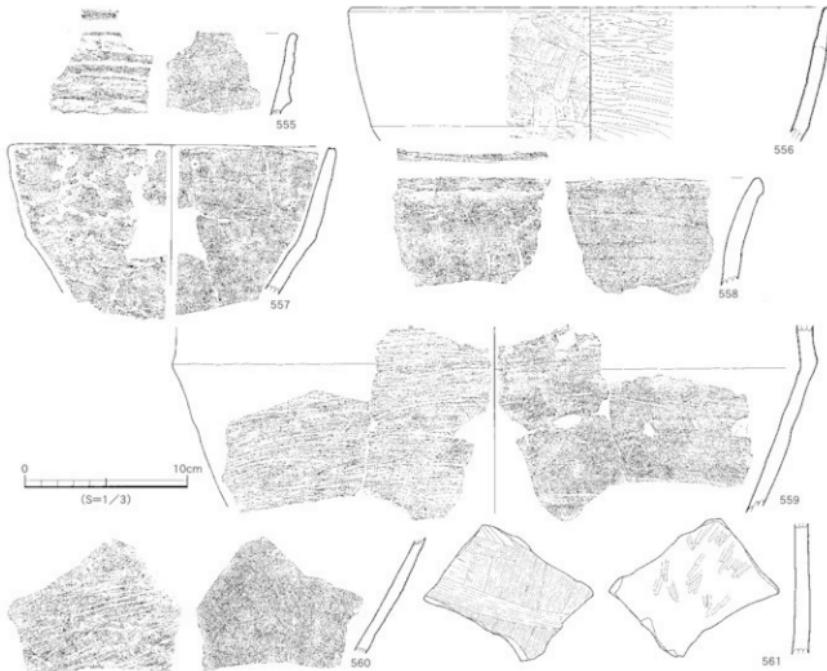
#### 13類土器（第81図562～572）

器内外面共にミガキが施されるものである。562は玉

縁状の口縁部を有し、頸部までが短い。頸部で「く」字状に屈曲し、胴部は丸みを帯び、口径よりも胴部径が大きい。563・564はリボン状の口縁部を持つ。564は玉縁状で直立する口縁部から胴部が大きく膨らむ。565は小型の鉢で、玉縁状の口縁と屈曲する頸部から胴部へ膨らむ。頸部を水平に削る形で2条の沈線を施す。566は波状口縁を有し口唇に沿って1条の沈線に入る。567は膨らんだ胴部から口縁部へと直立する。568・569は外反・内弯する胴部で、底部からせり出す形で段を作る。570は内傾する胴部で、2条の沈線を施す。沈線内に赤色顔料が残っており、電子顕微鏡観察によりバイブ状のベンガラであることが判明した。571は立ちあがりが深く括れる底部である。572は胴部下位に2条の沈線が巡り、わずかに赤色顔料が残る。

#### 14類土器（第81図573～575）

刻目突帯を巡らす甕形土器の口縁部である。573は口縁部直下に刻目突帯を巡らす。574は口縁端部及び胴部上位の屈曲部に刻目突帯を巡らすが、口縁端部の刻みは櫛状工具、胴部の刻みはヘラ状工具によるものと思われる。



第80図 縄文時代前期～晩期土器実測図(4)